

---

# 勇者指令ダグオンA's 風の詩

ジャン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者指令ダグオンA・S 風の詩

### 【Nコード】

N1237P

### 【作者名】

ジャン

### 【あらすじ】

・・・再び地球に危機が迫る・・・そして1人の少女が力を与えられた・・・

・・・少女は戦う決意をする・・・

・・・名の意味の通り・・・

・・・人の心に温かい風を吹かせるために・・・



## 第一話 風の勇者現る

風鈴山

森沿いの道を登山をしている親子が居た。

「うああなんでこんな山なんかに来るんだよ〜」

少年がリュックサックを背負ってへばっている。

「良いじゃないかたまにはこういう登山も〜」

「父さんね〜今はゲームとか面白いこと一杯あるのに!」

「ゲームじゃこのロマンは伝わらないよ〜」

「もう!」

その時だった。

親子の身体を風が包み込んだ・・・

「・・・風?」

少年が振り返ると風と共に1人の少女が現れた

## 第一話 風の勇者現る

「とお！おりゃああー！！」

親子は啞然としていた。目の前で年端も無い少女が物凄い身体能力を披露している。

「よつと！ほいつと！ー！！」

胴着姿で森の木から木へ猿の如く飛び移る少女。まるで野生動物の動きだ。

「な！なんなんだあの姉ちゃん！！」

「ん？」

少女は親子に気づくと親子の前に降り立った。

「うわー！！」

胴着姿の少女はニンマリ笑って親子を見ていた。

「あの・・・君は？」

「私ですか？南楓です」

「姉ちゃんゴリラかなんか？」

「じぶー」

少年の言葉に楓は笑った。

「うーん強いて言うなら・・・野生児かな」

「マジー!!」

「待ちなさい・・・その胴着・・・」

楓の胴着には『音』と刺繍が入っていた。

「はい！私ソニックアーツの門下生です」

「ソニックアーツ・・・あのミッドチルダの・・・あつたんだ・・・」

ソニックアーツとは近年生み出されたシューティングアーツ、カイザーアーツ、ストライクアーツと並ぶ武術であるがまだ発展途上のため正式な流派ではない。

「・・・そうか・・・この先がソニックアーツの道場ですか・・・」

「ソニックアーツに何かようですか？」

「この子にソニックアーツを学ばせようと思って」

「え？」

父親の意見に思わずぎよつとする楓と少年。

「ちょっと！父さんそんな勝手に！大体ハイキングが目的じゃ！！」

「ハイキングはついでだ！」

少年の抗議に父親は笑って突っぱねた。何故かその光景が羨ましい楓。

「私達の自己紹介がまだですね・・・霧島玄です」

「霧島風太郎です・・・」

「けらけらけら　じゃあ！こつちです」

つと言って楓が木に飛び移るが・・・

「ちょっと姉ちゃん！そんな動物じゃないんだから！」

「はははー！ごめんごめんー！」

と言って地上に降りてきた楓は道場まで案内した。

道場への道で・・・

修行の為が険しい道を歩いている楓たち。

「うーん・・・っと・・・疲れた〜」

「なに？最近の子はこれくらいで音を上げるの〜」

「煩い！姉ちゃんみたいな体力馬鹿じゃないんだ！！」

「いつもゲームばかりしてるからだろ〜」

「うしゃしゃしゃしゃ〜あ！付きましたよ〜」

「「あ！」「」

楓の案内に到着したソニックアーツ道場。

「お！戻った？楓！」

「おう！兄弟子！！」

と言って楓が兄弟子達の元に駆け寄った。

「うわ〜男ばかり・・・って女姉ちゃんしか居ないじゃん」

楓以外はほとんど男性のソニックアーツ道場。すると師範らしき人物が現れた。

「おや〜こんなところにお客さんかな？」

「え？はい！私の息子にソニックアーツを学ばせよう」と

「父さん！勝手に決めるなよ！」

と言って風太郎が抗議する。



「まあ最初からは無理だな・・・そうだ見学しては」

「うん」

つとつまらなさそうに風太郎はソニックアーツの組み手を見学するのだった。

「はあ！やあ！！」

風太郎は楓の姿に何故か引かれた。

「楓が気になるかい？」

「え？そういう訳じゃなくて・・・何と言うか・・・あの姉ちゃん変わってるな〜って思って」

「そういう考えか〜」

「え？」

「楓を知っている子は楓を『悪魔の子』というからな・・・」

「え？あの姉ちゃんが悪魔？そんなわけ無い無い」

一緒に居る時間が僅かながら楓からはアホな部分しか感じない風太郎。

「まあなんと言うか・・・人には影の部分がある・・・だが楓はそんな事を気にしなかった」

小休憩でアホ面している楓の姿にボケーとしている風太郎。

「それにしても楓が笑ってたか・・・」

「どうしたんだよ？」

「いやな・・・楓が笑うようになったのは最近なんだよ」

「ええ！！うつそー！！」

「まあ楓は家族とうまくいってなくてな・・・『悪魔の子』のレッテルもある・・・放浪している時にここを訪れてな・・・幸い此処にいる人間はそんな事気にしない・・・みんな札付きばかりだ・・・家族みたいなものだな」

「ふうん」

と言って道場で夕飯を取ることになった風太郎と玄。道場の夕食は当番制になっていて今日は楓の番だった。

「うああ！また山菜の煮物」

「贅沢言つな！！」

あまりテンションに着いていけない風太郎。

「姉ちゃん・・・変わってる・・・」

「そっかなあ！後でアーツ教えたあげるよ！！」

「いや！良いよ！！そんな事」

「遠慮しない 遠慮しない」

「良いじゃないかこんな可愛い子に教えてもらえて」

「おおいぞ楓」

「うらやましいぞ坊主」

完全にノリノリの門下生達に見送られながら楓は風太郎を外に連れ出した。

「ねえ姉ちゃんに教えてもらつとあんなこと出来るようになるの？」

「あんな事って？」

「・・・木から木にピョンピョン飛び移ったり」

「うん・・・練習すれば出来るかも」

「え？あれ奥義じゃないの？」

「まっさかあれは私の身体能力でやってるから」

「なぬ！姉ちゃん魔法使つてんじゃないの？」

「いや私攻撃魔法使えなくつて危ないし」

「ええ！姉ちゃん魔導師なのに？」

「それはそうなのですが、まあ……弟は凄く使えるけど、」

「え？姉ちゃん弟居たの？」

「うん……まあ……そうなんだけど……」

「おーい！」

「あ！父さん！」

楓と風太郎の元に駆け寄る玄。

「喜べ風太郎！この道場に住み込ませていただくことになったぞ！」

「へ？どういう事？」

「あれ？言っただけじゃなかったっけ？ソニックアーツの門下生は道場に住むって」

楓の一発に固まる風太郎。

「んじゃ……姉ちゃん……この山に住んでるの？」

「あつはっは、住んでるんだな、これが」

「だから姉ちゃん野生児って言ったんだ」

「けどこんなに可愛い野生児だったらいいかな」

「まあ・・・顔だけの奴って言われますけど」

その時だった。

ザワザワ

山がざわついている。

「!?!」

楓が振り向くと気配が違う・・・なにか途轍もなく嫌な物を感じ取った。

「姉ちゃん？」

「・・・風ちゃん・・・玄さん・・・さがって」

「「え?」「」

「良いから!?!」

楓が気配のした方向に構えた。

その時

「!?!」

空から爆撃されてしまった。

楓は咄嗟に風太郎、玄を抱え跳躍した。

凄まじい爆発が起きると楓は着地し周囲を見た。

「なに・・・これ・・・」

楓の周囲を異型のモンスターが囲んでいた。

「う！宇宙人！？」

「まさか・・・300年前の宇宙人の再来？」

「300年前？」

玄の言葉に楓は自分の祖先が300年前宇宙から侵略に来た宇宙人との戦いを思い出した。

「とにかく！管理局に連絡！！」

風太郎は携帯端末で時空管理局に連絡を図るが通じない。

「なんで？」

「妨害電波？は！！」

宇宙人が楓たちに襲い掛かると楓がその攻撃を防いだ。

「ぐー！！」

「姉ちゃん!」

「逃げて!!!がは!!!」

楓が吹き飛ばされたその時だった。

『ジジャアアアアアア!!!』

等身大の宇宙人たちが道場に向かって怪光線を放った。

「やめてええええええ!!!」

楓の叫びも空しく宇宙人の攻撃がソニックアーツ道場を破壊した。

「みんな!!!」

燃え上がる道場。楓は絶望の淵に立たされる。

自分の居場所・・・自分の家族・・・それが一瞬で奪われた・・・

『ジイイイイイイイイ!!!』

崩れる楓の周りを宇宙人が囲んだ。

「姉ちゃん!姉ちゃん!逃げようよ!!!」

風太郎が楓に呼びかけるが楓は絶望している。

(・・・楓・・・)

「誰!？」

楓の頭に何かの音が響く。

(・・・楓・・・)

「みんな!！」

「ごめんなさい・・・私のせいで・・・」

(楓・・・俺達はお前のせいだと思ってない・・・)

「え？」

(・・・今あの子達を守ってやれるのはお前しか居ないんだぞ・・・)

「私・・・く!！」

「姉ちゃん!！」

風太郎の叫びに楓が走った。

「!！」

楓が宇宙人に跳びかかった。



「はあ!!」

『ジイイイ!!!!』

楓の拳が次々と突き刺さり、最後の蹴りで宇宙人が弾み楓は弾んだ宇宙人をそのまま掴みとり宇宙人の身体を叩き付けた。

「姉ちゃん!!」

「く!!」

風太郎を守るべく楓が再び宇宙人の攻撃を防ぐと再び跳びかかった。

「うおおおおおおお!!!!」

楓の蹴りが宇宙人を吹き飛ばした。一心不乱に宇宙人に襲い掛かる楓。

「であああ!!でああああああ!!」

「……姉ちゃん……」

楓の戦う姿に風太郎は圧倒された。

悲しみ……憎しみ……孤独……虚しさ……

風太郎は楓からそんな気持ちしか感じられなかった。

しかし……

『ジャアアアアアアアアアア!!!』

楓たちを巨大な宇宙人が襲った。

「逃げて!！」

「!！」

風太郎と玄が回避すると楓が宇宙人に跳びかかった。しかし大きさが違い過ぎる為楓は手も足も出ない。宇宙人に握られる楓。

「ぐ・・・あ・・・!！」

このままでは潰される・・・その時・・・

『キエエエエエエエ!！」

『グルオオオオオオオ!！」

『ガオオオオオオオ!！」

咆哮と共に三匹の獣のロボットが現れた。ロボット達は宇宙人に攻撃を仕掛ける。

『ジアアアアアアアアアア!！」

『グルオオオオオオオオオオ!！」

宇宙人に豹型のロボットが飛び掛り楓を解放し鳥型のロボットが楓

を回収した。

「なに・・・いったい？」

『キエエエエエエエエエエエエ！！』

鳥型のロボットが咆哮をあげると楓は七色の空間に送り込まれた。

「姉ちゃんが消えた・・・うあああああ！！」

「ぐ！！！」

風太郎と玄に宇宙人が襲い掛かると豹型、ピューマ型のロボットが二人を守った。

「味方・・・なの？」

風太郎は3体のロボットに安心感を覚えた。そして安全な場所まで避難するのだった。

「・・・ここは？」

楓が鳥型のロボットに連れられ異空間を漂っていた。

「・・・なに・・・まさか！！！」

この状況・・・楓は先祖の出来事を思い出した。

楓の予想通り目の前に巨人が現れた。

『・・・一足違いだった・・・』

「あなたは？」

『ブレイブ星人』

「ブレイブ星人・・・あなた！」

『知つての通り・・・宇宙警察機構の刑事だ・・・南力の子孫だな』

「え？」

楓が南力の子孫であることを目の前の巨人は知っている。

『・・・君を・・・ダグオンに任命する』

「え!？」

いきなりの事に楓は驚いている。

「私が・・・ダグオンに？」

『・・・そうだ・・・南力の血を引く君なら・・・』

「・・・私なんか・・・弟なら・・・」

『?』

「弟に・・・南力の子孫なら!!弟に!!」

『・・・君じゃなければダメだ・・・』

「え?」

ブレイブ星人の言葉に楓は驚く。

『・・・君のガードロボットだ』

自分達を助けた鳥、豹、ピューマ型のロボットが空間を転移し楓の元を集った。ロボットは小さな光になると楓の元を集った。楓の手の中に3枚のカードが収められた。

「・・・私は・・・う!!」

楓の言葉を待たずブレイブ星人から光が発せられ楓の左腕にダグコマンダーが装着された。

「ダグコマンダー・・・何故?」

『・・・君なら出来る』

ブレイブ星人はそう言つと楓を元の世界に返した。

「うあああああああああ!!」

楓は元の世界に戻ると空に出た。宇宙人に向かって真っ逆さまに落ちるその時……

「トライダグオン!!」

楓がダグコマンダーを起動させると楓の身体に翡翠色のダグテクターが構築されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ストーム!!カエデ!!!」

ダグテクターを装着した楓はそのまま着地した。

凄まじい風が風太郎、玄を包み込んだ。

「……風?」

風太郎は吹き荒れる風の先にダグテクターを装着した楓の姿を見た。

「誰?」

「……」

風太郎の言葉に楓は答えない。

『ジャアアアアアアアアアアアアア!!』

宇宙人の攻撃が楓に襲い掛かると楓はその攻撃を受け止めた。

「うおおおおおおお!!とああああああ!!」

楓に投げ飛ばされる宇宙人。

「凄い・・・これが・・・ダグオン？」

ダグテクターの力に楓は驚いている。だが宇宙人は楓に攻撃を仕掛ける。

「く!!！」

楓は腰に装着されている銃を抜き宇宙人に向かって構えた。

「ストームシューター!!！」

ストームシューターのエネルギー弾が宇宙人にヒットする。

『ジアアアアヤアアアアア!!!!』

宇宙人は悶絶するが楓に向かって殴りかかる。

「がは!!!!うあああ!!！」

サイズが違い更にパニックで圧され始める楓。

「く!!!!う!!！」

その時一台のバイクが宇宙人に突撃し楓の元に集った。

「乗れって言うの?」

楓がバイクに跨るとそのまま宇宙人に突撃した。そして3枚のカー

ドを取り出した。

「はあ!!」

3枚のカードからガードファルコン、ガードクーガー、ガードジャガーが解き放たれる。

「さっきのロボット!!」

風太郎は驚き玄は啞然としていた。

「よし!!」

ガードアニマルは宇宙人に攻撃を仕掛け時間を稼ぐと楓がある体制に入った。

「融合合体!!」

楓のバイク・ストームバンディットが人型に変形すると楓と一体化し瞳が淡い緑色に光った。

『ダグ!ストーム!!』

ダグストームが降り立ち宇宙人を蹴り飛ばした。更にパワーに驚くダグストーム。

『これは・・・!!』

『ジュアアアアアア!!』



宇宙人の攻撃が繰り広げられダグストームは回避すると反撃体制に入った。

『ストームダイバー!!』

ダグストームの竜巻が宇宙人に襲いかかり宇宙人は怯むとガードアニマルから指令が出た。

『合体?・・・よし!!疾風合体!!』

ダグストームが飛び上がるとダグストームを中心にガードクイーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエ!!』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。腕が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン!!』

ストームダグオンが降り立つと物凄い風が巻き起こった。

『じー!ジエエエエエエ!!』

宇宙人は本能で叫んだ・・・危険だと・・・

『一気に決めます!!はあああ・・・』

ストームダグオンの拳を風が纏い嵐を呼んだ。

『メガスオオオオム！！パアアアンチ！！！！！！』

ブースターで突撃するストームダグオンの拳が宇宙人を貫いた。

『ギシャアアアアアアアア！！アアアアアアアア！！！！！！』

ストームダグオンが拳を引き抜くと宇宙人は爆発した。

『はあ・・・はあ・・・』

ストームダグオンが光り輝くと合体が強制解除された。

「ここだ！姉ちゃん！！」

避難していた風太郎と玄が倒れている楓を保護する。

「おい！大丈夫か！」

玄の言葉に楓は薄っすらと目を開けて言う。

「だ・大丈夫です・・・」

「良かった」

楓が無事なことに風太郎は安心し楓は左腕のダグコマンダーを見つめた。

(何で・・・私?・・・何で・・・私なの?)

楓は自分が手にした強大な力・・・ダグオンになった事に疑問を持つのだった。

## 第一話 風の勇者現る（後書き）

何で私にダグコマンダーが与えられたの？・・・私なんかに・・・  
どうして・・・え？私が時空管理局に？また宇宙人の攻撃が・・・  
私は！！

次回！勇者指令ダグオンA's風の詩 戦う決意  
私は守りたい

名前

みなみかえで  
南楓

年齢 十六歳

戦闘スタイル ソニックアーツ 南流喧嘩殺法

趣味 フィギュア作成 アウトドア

好きなもの 餃子 はっかの飴 湿気た煎餅 気の抜けた炭酸 伸

びたラーメン

嫌いなもの 悪党 女性らしい格好をする事 アクセサリー

ランクC

デバイス 無し

階級 二等陸士

性格 温厚 常識人 爛漫

イメージボイス 斎藤千和

備考 300年後の力の子孫。 どう間違っって生まれたのか力とは似てもつかない美少女。

幼少の頃より先祖の伝説的な悪業を骨の髄までたたき込まれるが本人曰く「会ったこともない先祖の事など知らん」と他の子孫ほど嫌悪することはなく、力の行動に共感する部分があるが部は弁える。

優秀な弟と比べられてきたが本人は嫉妬一つしなかった。

流行のファッションなどに疎く機能的では無いからという理由で女性らしい格好を嫌う。

尚捜査官は常にナイフを身に付けておくという理由で身体のどこかにナイフを隠し持っている。

300年後の武術ソニックアーツの達人だが物足りなかったのか南家禁断の武術南流喧嘩殺法を極めた。

趣味のフィギュア作成はプロ級であり間接なども精密に作り上げ、人間の動きを完全再現することが出来る。

温厚な常識人だが子孫の中で一番力の血を色濃くひいており最終行動は力になるが力ほど破天荒にはならない。

南家子孫の中ではみだし者。

とある事情で家とは絶縁状態になりソニックアーツ道場に居候する。

## 第二話 戦う決意

「ダグオンが現れた？」

時空管理局では宇宙の再来・・・そしてダグオンの再来に驚いていた。

「これが目撃されたダグオンです・・・あと」

画面に表示される楓。

「彼女は？」

「元魔導師・・・南楓・・・訓練中に魔力が暴走しその後行方をくらます・・・彼女がこの事件の生き残りだ・・・」

「彼女は今は？」

「まだ風鈴山に居るはずですが・・・」

「彼女の保護をお願いします」

## 第二話 戦う決意

風鈴山

「・・・」

楓は一人焼け焦げた道場の整理をしていた。他の門下生はどっつたか分からない。

長い髪を下ろし久しぶりに私服に着替えた楓は左腕のダグコマンドーを見つめた。

「・・・なんで私にダグコマンドーが与えられたんだろう・・・」

自分はダグオンには相応しくないそう思った。

「私は救世主なんかになるつもりは無いのに・・・」

風太郎から渡された1枚のメモを見た。

宇宙人の襲撃を回避した楓に風太郎と玄は・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「姉ちゃん・・・行くところあるの？」

「・・・ない・・・家には帰れないよ・・・」

楓は風太郎に空元気で答えた。

「大丈夫・・・何とかなるよ」

「楓さん」

「玄さん……」

「良かったら家に来ないか？」

「玄さんの家に？」

「家もちよつと訳ありでね……大丈夫、一人増えたって大丈夫さ」

そして風太郎からメモを貰った。

「……よし」

他に行く当ても無い楓は霧島家に向かうのだった。

ふもとで山に向かって礼をすると

……バスに乗り……

……電車に乗り……

……また歩いた……

ただ心にポツカリ穴が開いた気分になっていた。

「……着いた」

楓が辿り着いたのは大きな施設だった。とてもじゃないが一般の民家ではない。



「・・・養護施設『霧島園』？ここが玄さんの実家？」

楓はインターフォンを鳴らすと霧島園の中に入った。

「いらっしやい！！」

「お世話になります」

玄が楓を迎え入れると風太郎が楓を子ども達に紹介した。

「みんな集まれ！！」

『はああああい！！』

「みんな！新しい家族だ！」

「南楓です！宜しく」

『よろしくお願ひします！！』

子ども達の元気の良さに楓は思わず笑ってしまった。

「ねえ！お姉ちゃん遊んでよ〜」

「え！うん何する？」

「人形遊び！！」

「鬼ごっこ！！」

「分かった分かったみんなやるう」

これをきっかけに楓の新しい生活が始まった。

「……………!!……………!!」

何やら真剣な目つきで玉ねぎ切っている楓。今回の食事当番だった。

「姉ちゃん〜んご飯まだ〜?」

「ごめん!今ちよつと真剣なの!」

「ふあ〜い手洗つてくる」

「ええつと……………よつと……………ふ〜」

大体切り終えた楓は一息付くと炒めて水を張った鍋に投入した。独り身ならその辺の有り合わせで済ませるが人に食べさせるものとなるとちゃんとした物を作らなければならない。

「ふ〜何とかできたな〜」

野菜たっぷり肉たっぷり栄養満天のカレーを作った楓。器に盛ってお盆に載せて食卓に運ぶ。

「姉ちゃん!腹減った!」

「お腹すいた〜」

「ごめんごめん！」

「それじゃみんな席に着いたかな？」

「はいはいはい」

玄が食前の挨拶をすると一斉に食べ始めた。

「うわ！おいしい！」

「うん！姉ちゃん来てからレパートリーが増えたよね」

「お！良くそんな難しい言葉知ってるね」

と言って自分の大盛りカレーをがつつく楓だが・

「あれ？風ちゃんピーマン食べないの？」

「俺ピーマン嫌いだし・・・」

「好き嫌いは良くないよ」

「んじやく姉ちゃんが口移しで食べさせてくれるなら食べる」

と風太郎は冗談を言ってみるが・・・

「良いよ」

「は……！」

「私のチューで食べてくれるならいくらでもチューしてあげるよ」

「た！食べる食べる！！」

慌てる風太郎。楓なら本当にやりかねない・・・感覚がずれているようです。

「姉ちゃん～人形壊れた～」

「自転車欲しい～」

「はいはい。後で御飯終わったら直してあげるし作ってあげるから」

「て！姉ちゃん自転車作れるんかい！！」

「うん！本気になれば発明少年に出てきた竹で出来た自転車も作れるよ」

夜

「ええつとここで・・・」

廃材を熱して溶接して塗装して・・・ハンドメイドでちよちよいのちよいと自転車を作った楓。

「次は・・・パテ盛って・・・塗装して・・・」

と人形の壊れた部品を手作りで再現し完全にした。

「さてと・・・お仕事は山積みだ～」

と言って子ども達が楓に頼んだ様々な事を楓は寝ずにこなすのだっ  
た。

翌日

「なんじゃこれ・・・」

風太郎は啞然としていた。みんなが楓に頼んでいた無茶な要求を楓  
が全てこなした事に・・・

「・・・確かにベッド直せって言ったけど」

「タンスの立て付けが悪いから直してとは言ったし」

「穴の開いた鍋修繕してくれとも言ったけどさ・・・」

子ども達は楓の万能性に驚いています。因みに本日は休日で楓は油  
まみれで寝ています。

「姉ちゃん・・・」

「ZZZZZZZZ」

「姉ちゃん脂臭いよ・・・てえ!!」

突如寝ぼけた楓に抱き寄せられる風太郎。抱き枕とも思ったのか  
イビキかいて寝ています。

「ガアア！ガアアア！！」

「姉ちゃん！放せよ！脂臭いよ！！」

よっぽど疲れたのか楓は寝てます。そして風太郎が解放される頃は風太郎も油臭くなってしまうた。

「ふゝ気持ちよかつたゝ」

朝風呂に入る楓。しかし風呂も時間が決められている為ドラム缶沸かしてはいりました。因みにランニングシャツ一丁です。

「姉ちゃんみつともないよ」

「あははは・・・どうも1人暮らしの感覚が抜けなくてねゝ気をつけるよ」

集団生活において自堕落な生活は許されない。楓は身の回りのことに注意をするのだった。

「買い物！ゴー！！」

と言って子ども達と夕飯の買出しに出かける楓。楓のテンションに付いて行けない子ども達だった。

「なんかとんでもない姉ちゃんが着たかもね」

「うゝんけど・・・悪い人じゃないよねゝ」

「悪魔って絶対嘘だよね」

と子ども達が首を振ったその時。

空が曇った。

「え？なに？」

楓が空を見上げると巨大な海賊船のような物が浮いている。

「みんな！逃げて！」

「え？」

「はやく！！！」

ヤバイと思った楓は避難を要請するが時既に遅し……海賊船から宇宙人が降り立った。

「見つけたぜ……ダグオン！！！」

（……狙いは私か）

子ども達にしがみ付かれながら楓は身構える。

「！！あなた達は！？」

「俺達は宇宙海賊……『ゾーマ』……！！！」

「ゾーマ……」

「そして俺は船長のゾルバ……ダグオンを殺して賞金をガツポリ貰おうって……な!!」

ゾルバが目の前の子供・沙耶を掴み上げた。

「お姉ちゃん!!」

「沙耶ちゃん!!」

「へっへっへ……さあって……楽しませてくれよ!!」

ゾルバが沙耶を楓に投げつけ楓がキャッチすると楓を斬りつけた。

「く!!」

咄嗟に回避する楓だがジャケットの端が切り裂かれた。

「にげて!!」

「うん!!」

楓は沙耶を逃がすとゾルバに向かって構えた。ゾルバの剣を回避し蹴りを入れるが全く効いていない。

「どうした？魔法は使わないのか？」

「なに!!」



「だったら変身したらどうだ!！」

「ぐああ!！」

ゾルバの一閃に今度はアンダーシャツが切り裂かれた。あと一歩踏み込まれたら確実に致命傷だ。その時。

「なに!がああああ!！」

楓の溝に重い拳が突き刺さった。溝を押さえながら倒れこむ楓。そして滅多打ちになっている。

「姉ちゃん!！」

そのまま髪の毛を掴まれ持ち上げられる血まみれの楓。

「ふん!貴様のような奴がダグオンとはな・・・」

「ぐ!・・・う!」

「良いだろう・・・貴様を殺し・・・その後でガキどもを殺す!!!覚悟するんだな!！」

「お姉ちゃん!！」

沙耶が泣き叫んだその時

「!！」

楓はベルトからナイフを取り出し自分の長く黒い髪を切り裂きゾル

バから脱出した。

「な！」

「はあああああああああ！！！」

楓の髪が舞う中、楓の蹴りがゾルバを吹き飛ばした。

「姉ちゃん！！！」

「ふう……スッキリした！！！」

ショートヘアになった楓はゾルバに向かって構えそのまま飛び掛り場所を移した。

「……私は……救世主なんかになるつもりは無い……けど……  
・目の前で泣いてる子を守るなら！！！」

楓はダグコマンダーを翳した。

「トライダグオン！！！」

楓のダグコマンダーが起動すると翡翠色のダグテクターが構築されフルフェイスのマスクが装着される。

「ストーム！カエデ！！！」

「ほお……やっとなったか……ダグオン！！！」

ゾルバの攻撃を楓はかわした。

「ストームバンディット!!」

楓のコールに駆けつけるストームバンディット。

「うおおおおおおお!!」

「ぐう!!」

ストームバンディットの体当たりを受けるゾルバだが、そのまま楓をストームバンディットごと投げ飛ばした。

「うああああ!!」

「ふん!世界を救ったダグオンがその程度か!!」

「だったら!!」

楓はストームバンディットから飛び降りるとゾルバに一撃を入れた。

「ぐふ!!」

「はあああ!!」

ゾルバが怯むと楓はゾルバをよじ登り腕に関節技を入れた。

「でああああああ!!」

鈍い音と共にゾルバの間接が折れ、更に体重をかけてゾルバを倒し再び関節を折った。

「ぐああああ!!」

ゾルバは力技で楓を引き剥がすと折れた腕を押さえ楓と対峙した。

「へっへ・・・やるじゃねえか!おめえら!!相手してやれ!!」

撤退するゾルバの号令で飛来する海賊船。楓は再びストームバンデイツトに乗り込んだ。

「融合合体!!」

ストームバンデイツトが人型になると楓と一体化し瞳が淡い緑に光った。

『ダグストーム!!』

ダグストームはそのままストームガードを投げた。

『疾風合体!!』

ダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエ!!』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。拳が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン!!!』

嵐が起こると海賊船から敵機が発進され本船は撤退した。

『ハヤテ!!!』

ストームダグオンは羽ばたくと小太刀・ハヤテを抜くと敵機に斬りかかった。

『ぐ!!!』

敵機から攻撃される。途轍もなく数が多い。ストームダグオンは敵機を引きつけ無人地帯に誘い込んだ。

『!!!』

ストームダグオンが無人地帯に下りた時障害物など一切無いかつこの的だった。しかし

『すうう……』

ストームダグオンが深呼吸すると緑色のベルカ式の魔方陣が展開された。するとストームダグオンの身体から凄まじい魔力が噴出した。

『ぐ……う……』

あまりの魔力にストームダグオンの身体が耐えられない。

(……だめ……全然制御できない……けど……これしかない!!!)

だがストームダグオンは魔力の放出を止めない。

『ギーシャアアアア!!!』

敵軍がストームダグオンに襲い掛かったその時・・・

魔力が爆発した。

「・・・これは」

報告を受け魔力跡に駆け付けた管理局員・ウイリーが現場検証の中・  
・爆発の中心で倒れている楓を見つけた。

「・・・」

楓が目を覚ますと見知らぬ部屋に居た。だが機材などから楓は推測した。

(ああ・・・そうか・・・管理局に捕まったんだ・・・)

「目が覚めたかい？」

部屋の扉が開くと楓を保護した同員。ウイリーが入ってきた。

「あなたは？」

「ウイリー・グレン・・・时空管理局員・・・時間犯罪部署所属の  
一佐だ・・・」

「子ども達は!?!」

「安心してくれ・・・みんな無事だよ」

「良かった」

一息入れる楓だが・・・ウイリーは楓をじっと見た。

「あの魔力爆発は君か？」

「・・・はい・・・」

「・・・君は危険だ」

「・・・」

ウイリーの言葉に楓は無言になる。今までそうやって爪弾きにあってきたが・・・ウイリーから意外な言葉が出た。

「・・・君は・・・管理局に入る気はないか？」

「え？」

「・・・ちゃんとした訓練を受ければ・・・もしかしたら君の力をコントロールできるかもしれない・・・君を時空管理局の監視下と称して私達の保護下に置く・・・」

「・・・それって・・・」

「・・・君には管理局員になってもらおう」

その言葉に楓は・・・

「・・・分かりました」

正直楓は何を信じていいのか分からなかった。

宇宙海賊の襲来

だがこれは夢ではない

突如手に入れた強大な力で子ども達を守り抜く

楓はそう誓いダグコマンダーを見つめた。





## 第二話 戦う決意（後書き）

私が管理局員に・・・部署は・・・陸士部隊？早速の任務は・・・え？ロストロギアの捕獲？このロストロギア・・・復活の呪文？次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 パワーストーン  
誰？あなた？

ストームバンディット

スズキ・バンディットBandit1260タイプのダグビークル。

ダグストーム

楓とストームバンディットが融合合体した姿。母体がバイクの為通常の融合合体に比べると小型であることが特徴。

全高	5.8 m
重量	19 t
走速度	370.0 km/h
跳躍力	175 m
最大出力	29000ブレイブパワー

必殺技

ストームディバイダー

### 第三話 パワーストーン

「ええっと」

霧島園で楓が荷物をまとめていた。風太郎が楓の手を見て言った。

「姉ちゃん……その手袋どうしたの？」

風太郎は楓が装着したドライビンググローブが気になった。

「ん？だって。ヒーローは指の抜いたグローブをつけるもんでしょ？」

「単純な姉ちゃん……」

玄関で見送られる楓。

「寂しくなるね……」

「えへっへ……落ち着いたら帰ってきます」

「ああ！ここは君の家だよ」

「はいー」

霧島園の子ども達に見送られながら楓は新たな戦いに向かった。

### 第三話 パワーストーン

管理局陸士部隊に着いた楓はウイリーの元に向かった。

「待っていたよ・・・楓」

「はい」

「早速で悪いが登録を済ませてくれないか・・・」

「・・・」

以前時空管理局の資格を取得したことがある楓。記録の復元だけで済んだ。

早速楓は部隊に配属され自己紹介が始まった。

「南楓です・・・よろしくお願いします」

『ぞわぞわ』

みんなが楓の姿を見て涼しい目をしている。

（・・・こんなものか）

時空管理局に居るであろうエリートの弟と悪魔の子レットルで楓は煙たがられている。

「早速で悪いが・・・君には訓練を受けてもらおう」

「……………」

と言つて訓練場に連れてこられた楓。

「では……データを取る」

教導官の指示で楓は魔力を披露してみるが……

「なんだ……これ……」

教導官は楓の魔力量に驚いている。楓の魔力は常人の100が1になつている状態だつた。

「く!!う!!」

魔力に耐え切れず倒れる楓はそのまま医務室に運ばれた。

「う〜ん……」

楓を引き抜いたウイリーは楓の潜在能力の高さに驚いている。だが制御は凄くデリケートだつた。医務室のベッドで話し合った。

「……君の魔力は……物凄く高いようだね……」

「……はい……私のお爺ちゃんは魔導師じゃなかったから魔力はないですけど……お婆ちゃんかな……けど私お婆ちゃんの事は知らないんですよね……」

先祖の悪行のことは生まれた頃から骨の髄まで叩き込まれたが、そ

の先祖の嫁については不明だった。だが一族からは先祖の嫁になった者は世紀末の馬鹿、最強の物好きなど罵倒されている。

「まあ・・・焦らずゆっくりやれば良い・・・」

「・・・はい」

それから数日間訓練の日々は続き、楓は補助魔法などは使いこなせるようになったが肝心の攻撃魔法は使いこなせなかった。

それから数日後

「今日は任務だ」

楓にとって初の任務。それはホテル・アグスタのオークションでロストログアが裏取引されるといふものだったが・・・

「女性は会場で潜入捜査してもらおう」

「・・・・・・」

その一発が物凄く嫌そうな楓。楓は長年の独り身生活の為流行に疎く、また女性らしい格好は苦手であった。

食堂で楓は指定された紙を見ていると・・・

「はぁ・・・私ドレスなんて持ってないしなあ・・・買える様なお金無いし・・・」

貰ったの給料の殆どは霧島園に寄付している楓。

と言うより着る物も有り合わせや安物を擦り切れるまで着るタイプ  
の人間である。そういう一生物などは持っていない。

「はぁ・・・どうしようかな・・・私友達居ないから相談も出来な  
いよ〜」

と言って頭を抱える楓だった。

翌日

ホテル・アグスタにて楓は外部の警護についていた。

「良かった〜ドレス買わないで済んだ〜」

と言って堂々とサボっている楓。缶ジュース飲んでます。

「と言っても・・・ロストログアって何出るだろ・・・」

楓がカタログを見ているその時だった。

ズツドーン

「なに!?!」

楓が振り向くとホテル・アグスタから爆発が起きた。



ホテル・アグスタがパニックになると一人の男がホテル・アグスタから出てきた。手には手ごろなサイズのロストロギアが収められていた。

「こおつら!!」

楓が男を追いかけ蹴り飛ばす、吹き飛ばされた男は持っていたロストロギアを散らばらせた。

「くそ!!」

男は一つの石を持ち出すと再び逃げ出した。

「南です!!ロストロギア強奪犯追跡中!応援を!!」

と言って楓は通信を送った。

「く!!」

「はあ!!」

逃げる男に楓は綾取りの糸を取り出し魔力を込め強化させると男に向かって投げた。

「な!!」

強化された糸に締め上げられる男。

「大人しくしなさい！！そのロストロギア！どうするつもり！？」

「これは・・・宇宙海賊との交渉材料・・・」

「宇宙海賊？」

「でああああああああ！！」

男が楓に襲い掛かると楓は男を蹴り飛ばし更に関節技を決めた。

「大人しくしなさい！！」

「ぐおおお！！がああああ！！」

男は楓に締め上げられ持っていたロストロギア・パワーストーンを落としてしまう。

「しまった！！」

「てええ！！」

「ぐあああああ！！」

楓の蹴りで伸びてしまう売人。そして楓はパワーストーンを拾った。

「・・・これは・・・え！！」

楓の元に舞い降りる宇宙人。

『ふん役立たずが！！』

「ゾーマー!!」

宇宙海賊ゾーマの奇襲を受ける楓。数が多すぎた。

「く!!」

楓は咄嗟に離脱を図ろうとするが逃げ切れない。

「く!!」

『その石を渡せ!!』

「トライダグオン!!」

楓がダグコマンドを起動させると翡翠色のダグテクターが構築されフルフェイスのマスクが構築される。

「ストームカエデ!!」

ダグテクターを装着した楓がストームバンディットに跨った。

「融合合体!!」

ストームバンディットが人型に変形すると楓と一体化し瞳が淡い緑に光る。

『ダグストーム!!疾風合体!!』

ダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パー

ツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエエ！！』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。拳が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストオオオムダグオン！！』

宇宙人の群れと対峙するストームダグオン。

『サイクロンノヴァー！！』

ストームダグオンの竜巻で宇宙人が撃墜されるが数が多い。すぐに反撃される。

『ぐー！！』

宇宙人の攻撃を受け続けるストームダグオン。

『ぐー！！』

『そのパワーストーンを渡せ！！』

『何でこの石を狙っているの！？』

『その石は伝説の石・・・呪文を唱えれば石に封じられた勇者を従える！！』

『で？その呪文は？』

『黄金の力守りし勇者よ今こそ甦り我が前に現れ出でよ』

その時……

『へえ……そうすれば甦るんだ……』

『は！しまった！！』

ストームダグオンがロストロギア・パワーストーンを掲げた。

『黄金の力守りし勇者よ！今こそ甦り我が前に現れ出でよ！！』

ストームダグオンのパワーストーンが光り輝くと青い光を放ち一台の車が走った。

『チエンジー！！』

車が変形し勇者が蘇った。

『青銅戦士！ブロンゾン！！』

ストームダグオンの前に降り立つブロンゾン。そして振り返る。

『あなたが新しいリーダーか？』

『え？』

『俺を蘇らせたってことはあんた俺の主って訳だけど』

『口が悪いなあ』

とストームダグオンとブロンゾンのやり取りを見ていた宇宙人は・

『貴様ら俺を無視するな!!』

宇宙人の攻撃をストームダグオンとブロンゾンが避ける。

『ふん!とお!!』

凄まじい柔軟性で避けるブロンゾン。

『ぬおおおおおお!!』

ブロンゾンのマグナムで宇宙人が迎撃されスキが出来た。

『Bアーマー!!』

ブロンゾンのコールと共に空から巨大なジェット機が飛来した。

『行くぞ!!』

Bアーマーが各パーツになるとブロンゾンの身体に装着される。

『青銅合体!ブロスガー!!』

『ブロスガー・・・それがあなたの本当の力・・・』

『行くぜリーダー!!! ジャッククロッド!!!』

ブロズガーがジャッククロッドを振り回し周りの敵を一掃した。

『な! 立った一太刀で・・・』

『凄い・・・』

『うおりゃああああああ!!!』

ブロズガーの一閃が宇宙人を押さえつける。

『リーダー今だ!!!』

『よし!!!』

ストームダグオンが拳に風を纏った。

『メガスオオオオム!!! パアアアンチ!!!』

宇宙人に向かって突撃するストームダグオン。その拳が宇宙人を貫いた。

『ぐあああああああああ!!!』

爆発する宇宙人と並び立つストームダグオンとブロズガー。

『全く・・・ロストロギアを勝手に持ち出すな!!!』

『・・・すみません』

上司に滅茶苦茶怒られる楓。

「もういい！君はクビだ！！売人の彼女は貴様の先祖を消す為にその時代に行った！！貴様が消えようが勝手だ！！」

と言われる楓だが・・・上司の通信端末が鳴った。

「はい？グレン一佐！！え？クビはまだ不味い・・・しかし！！」

楓の処分が論議される中・・・

『で？リーダー・・・俺はどうすればいい？』

ブロンゾンは目覚めたはいいが待遇について楓にたずねるが・・・

「とりあえず・・・霧島園でお仕事」

『はっ。』

こうしてブロンゾンは霧島園で保育士をやる羽目になった。

（はぁ・・・とりあえず友達も出来たし・・・お爺ちゃんの時代に行くか・・・）

勇者指令ダグオンA's 第三十四話を通ります。



### 第三話 パワーストーン（後書き）

いや〜お爺ちゃん愉快な人だったなあ〜ってついでにお婆ちゃん見  
たし。え？誰かって？それは言えません。私の存在に関わりませし。  
そう言えば・・・ブレイブポリスのA Iを作った博士連れてきたな  
〜よし！私の友達作ってもらおう！！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 ブレイブポリス  
私の新しい友達

青銅戦士ブロンゾン

イメージボイス 平田弘明

ミッドチルダ、ロストロギアとして展示されていたパワーストーン  
から復活したレジェンドラ製勇者。ビークルモードはマツダ・ファ  
ミリア型。その名の通りビークルモードがファミリーカーのため霧  
島園の買出しなどかなりこき使われる。文句が多いがなんだかんだ  
言って面倒見が良い性格。尚霧島園の子ども達に宇宙の話させら  
れる。

楓の友達第一号。

## 第四話 ブレイブポリス

時空管理局にて……

「……どうも……南楓です」

結局管理局一の札付き部署……時間犯罪部署に配属された楓。

「よろしく頼むぜ！」

「猫の手も借りたいのよ」

つと札付き部署では先祖の悪行。

英雄殺し

は不問のようだった。

第四話 ブレイブポリス

「ん？」

管理局整備班を見ていると何やら3台のビークルが製作されていた。

「なんだいこれ？」

「ああ、最近になってダグオンがまた現れたらう？」

「はい・・・こちらも戦力として過去にあったブレイブポリスプロジェクトを元にブレイブポリスを製作しているんだ」

「これが？」

バイクと二台のスポーツカーのブレイブポリスが開発された。

一方

霧島園

「ねえねえブロンゾン！買い物行こうよ！」

『・・・へいへい』

「ねえ宇宙の話聞かせてよ！」

『へいへい』

「ダメだよおままごとが先！」



「それにしてもダグオンの再来か」

風太郎は新聞のダグオンの記事を読んでいた。楓がダグオンだと言うことはちゃんと知らないようだ。

「ダグオンに逢わせてよ！姉ちゃん局員だからいつでも呼べるんだろ」

すると楓は静かに答えた。

「・・・呼べばいつでも来てくれるって訳じゃないんだよ」

「は？」

「ダグオンが来る前に自分で精一杯頑張らないと」

「たまに難しいこと言うな」

楓は自分がダグオンだと明かすつもりはないらしい。と言っている間に通信端末が鳴った。

「ん？呼び出し？」

「姉ちゃん行ってきてよ！」

「ええ・・・けどな」

「楓さんお仕事はちゃんとやりましょ」

「はい」

と玄の一発で管理局に向う楓。因みにブロンズンで出勤しています。

『たくリーダーもこき使いすぎなんだよ』

「ぼやかないぼやかない」

とそんなこんなで研究所に到着。

「ええつとここつて?」

『なんじゃ?』

と楓たちの目前に現れたビークルは変形し人型になった。

「これは?」

『『命令をどうぞ・・・命令をどうぞ・・・』』

「気に入ってくれたかな」

楓が振り向くと開発主任と思われる人物が現れた。

「・・・これは?」

「ダグオンのサポートマシンとして作り上げたブレイブポリス」

「ブレイブポリス」

『『命令をどうぞ・・・命令をどうぞ』』

『なんだかな・・・』

ブロンズンは何かを感じていた。

「彼らには心はないんですか？」

「うむ・・・どうも彼らブレイブポリスの超AIの心にかんするデータが残っていないくてね・・・ボディを再現するのが精一杯だった」

「・・・」

楓は黙ってブロンズンに乗っていた。

『リーダーどうした？』

「うん・・・彼ら・・・寂しそうだった・・・」

『というと？』

「うん・・・なんか・・・こう・・・思いかな・・・それが伝わってきたって言うか」

『大丈夫だよ・・・心は生まれるって』

と言いながら楓は霧島園に帰宅するのだった。

夜

ビービー!!

警報が響き楓たちに収集がかかった。

「何々なんなの!?!」

楓はストームバンディットを走らせ現場に急行した。

「遅くなりました!」

「遅いぞ!」

と言って楓はブリーフィングを聞いた。

「現在・・・我々は謎の怪電波に惑わされている・・・これがその映像だ」

「・・・これは」

モニターを見ると機械が暴走し機械同士が破壊しあっている。

「ブレイブポリスは?」

「この怪電波じゃ自殺行為だ・・・彼らはとてもデリケートだ・・・このままじゃコンピュータが全て破壊されてしまう・・・例えるならあの電波は悪いことを機械に案じさせている・・・無垢な機械はその悪い心を判断できず破壊工作してしまう・・・せめて超AI



の基礎が出来れば・・・心があれば自分自身で善悪を判断できる」

「超AIの基礎・・・そうだ!」

「おい!南!」

楓は時空移動を開始した。

「全く鉄砲玉みたいな奴・・・よし!我々は電波発生源を探すぞ!」

天野平和科学研究所

「ZZZZ」

部屋で気持ちよさそうに寝ているジェイル・スカリエッティ。すると緑の魔方陣が展開された。

「ども!」

「なに!」

ジェイルは突然現れた楓に驚いていた。

「ちょっと来て下さい!」

「え？なに？誘拐？」

「いいから来て下さい！！」

「あああれええええ！！」

と言って楓に連行されるジェル。先祖の時同様こき使われる運命にあるようです。

「ちわあ作つた人つれてきました！！」

『おおおおお！！！！』

と管理局員達はジェルに詰め寄つた。

「何だつて？私に超AIの基本を教えてだつて！？無茶な事を言うな！私の場合は、確率がとてつもなく低くて不安だつたんだよ！」

「お願いです！世界の平和の為に貴方の技術を私達に授けてください！！」

未来の科学者達は、ジェルに必死に頼み込む。

「世界平和の為かい？」

ジェルは「世界平和」と言う言葉で目の色を変えた。

「なら仕方ないな……私がOKを言うまでやるよ！」

『ありがとうございます！！』

こうして技師達はジェイルの指導の元超AIの実験が始まった。

「さて……やることは」

楓はストームバンディットで発信元に向うが……

「うー!!」

怪電波の発生装置は力を増す。ダグビークルのストームバンディットは影響を軽減できるようだがそれでも肉体的な負担がかかった。

「トライダグオン!!」

楓がダグコマンドーを起動させると翡翠色のダグテクターが構築されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ストームカエデ!!」

楓はストームシューターを構え廃ビルの地下の発生装置を破壊するべく工作するが……

「うあ!あ!!」

激しいトラップが仕掛けられている。楓は一つずつ破壊しながら先に進み発生装置を見つける。

「……これは……旧文明の遺産……」

怪電波の原因は旧文明の遺産の暴走だった。弾みで起動したらしく

機械を破壊していった。

「うあああ!」

楓の頭上から瓦礫が落ちてくる。

「ぐ!う!」

瓦礫に押しつぶされる楓。その時。

ブーン!

瓦礫を吹き飛ばし一台のラリーカーが現れた。

「まさか・・・超AIがもう完成したの?」

ラリーカーは何も言わずにロボットに変形する。

『ソイツハ・・・ヤラセエ・・・エ・・・』

「え?」

ラリーカー型のロボットは装備されているライフルを構えると電波発生装置に向かって発砲した。

発生装置はバリアを張るがラリーカーのロボットはバリアを打ち碎いた。

ドーンドーン!!

ロボットが装置を破壊すると楓を連れ出し脱出した。

「あ・ありがと・・・」

楓の言葉にラリーカー型のロボットは機械的ながらも笑みを浮かべようとする。

『フリ・・・イナ・・・マダ・・・カンゼ・・・ンジャ・・・』

「・・・これから一緒にね」

『・・・アア』

そう言うと楓とラリーカー型のロボットは帰還した。

数日後

楓、ブロンズンはジェルに呼び出されるとブレイブポリスたちの初お披露目を見るのだった。

「皆心がもらえたんですね」

『俺も仲間が増えて嬉しいぜ』

と喜ぶ楓とブロンズン。

「それじゃあ皆！お披露目だ！」

ジェイルの指示にビークルは動き出した。

『チェンジ!』

バイク型ビークルが変形しロボットになった。

『うおっしやああああああ!俺はアクセルエース!チームリーダーだぜ!』

アクセルエースが名乗ると・・・

『チェンジ!』

車型のビークルが変形しロボットになった。

『・・・俺はソニックエース・・・よろしく』

『チェンジ!』

再び楓を助けたラリーカー型のビークルが変形しロボットになった。

『へ!俺はラリーエース!こいつらの子守だ!』

『うっせえなああ!俺がこのチームのリーダーなんだよ!』

『あんだとオメエエ!』

『・・・ウザい』

とリーダーである事を主張するアクセルエース。

「ふふ 賑やかになりそうだね!みんな宜しく!」

『 『 『 おう！ ！ 』 』 』

とエースチームと言う仲間を得た楓は宇宙海賊との戦いを誓うのだ。  
った。

## 第四話 ブレイブポリス（後書き）

やあ〜仲間も増えてえかったえかった・・・え？敵襲！？凄い数・・・  
・私達だけじゃ倒しきれない！！その時私の前に現れた戦士・・・  
あなたは・・・

次回！勇者指令ダグオンA's風の詩 出会い楓とシズマ  
剣の一族？

天使さんが考えてくれた勇者です！天使さんありがとうございま  
す！！

アクセルエース

ビークル：バイクのCBR600がモデル

エースチームのリーダー。

ボイス：結城比呂

性格は情に厚くバイク乗りの鏡の様な奴。

ソニックエース



ビークル：日産のGT-R（R34）がモデル。

ボイス：宮本駿一

性格：根暗で何時も寝ているがドラテクと音楽をこよなく愛する走り屋の塊。ガンダムSEEDのシャニに似ている。

ラリーエース

ビークル：インプレッサ・ホットハッチタイプ

性格：エースチームの中で良心かつ常識人。普段は、ラリーカーだが図書館の仕事をしている。トランクに本を乗せているので誤解される。読書家でアクセルエースとソニックエースが騒いでいると怒る。

主に突っ込み担当で楓や他のエースチームにしている。

ボイス：中井和哉

## 第五話 出会い楓とシズマ

宇宙で一人漂っている少年。

（・・・ち・・・またアフエタが抜けちまった・・・）

少年は何かを探していた。そしてミッドチルダを訪れた。

## 第五話 出会い楓とシズマ

時空管理局

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一人の捜査官が調査をしていた。その姿は風格があった。

「南一佐 凄いよね」

「あの歳でエリート街道まっしぐらだって」

局長達が噂しているが捜査官は何も言わなかった。

「そう言えばお姉さんが管理局に復帰したとか？」

「・・・・・・・・お姉さんも同じくらい優秀なのかな・・・うー!!」

その言葉を聞いた捜査官・南大地は局員を締め上げた。

「な！なにするんですか！」

大地は冷徹に一言言った。

「……私をあんな阿婆擦れと一緒にしないでいただきたい」

霧島園

「　　」

暢気に鼻歌歌いながら夕飯作っている楓。もう慣れたのか板につき始めました。から揚げ作ってます。

「うーん我ながら中々の出来栄え〜」

味見と称したつまみ食いしてる楓。先祖の血が多分に出ています。

「ねえ！アクセルエース今度乗せてよ！」

『て！おめえあぶねえだろ！！』

霧島園に無理矢理連行されたアクセルエース。因みに連行してきたのはブロンゾンだった。

『おめえ何のつもりだよ！』

『いいじゃねえの。旅は道連れ余話は情けってか？』

『は？』

なんだかんだ言ってアクセルエースも子供の面倒見えています。

「皆ご飯できたよ。」

【は〜い！】

楓の指示で食卓に付く子ども達。その時だった。

「あれ？なつちゃんは？」

「七海なら今日暗かったよ。」

「ふ〜んちょっと探してくるよ〜ちょっと待っててね。」

「ふお〜いみんなちょっと待っててな。」

風太郎がそう言っタのを確認すると楓は七海を探しにいった。

「部屋には居なかったし・・・あ。」

楓が外の遊具を見るとブランコで俯いている七海の姿があった。

「なつちゃんどうしたの？」

暗い顔をしながら七海は答えた。

「・・・馬鹿にされた」

「え？」

「・・・私・・・お父さんも・・・お母さんも居ないんだって言われちゃった・・・なんで？どうしてそんな事で馬鹿にされなきゃいけないの・・・う！」

泣き始める七海。すると楓は優しい顔で応えた。

「・・・大丈夫・・・なっちゃんには家族が一杯居るじゃない」

「え？」

「私や・・・風ちゃんや玄さん・・・皆やブロンゾンやエースチーム・・・皆家族だよ」

「でも!!!」

「・・・私はなっちゃんの本当のお姉ちゃんにもお母さんにもなれない・・・けどなっちゃん達の事は本当の家族だって思ってるよ・・・それじゃ・・・ダメかな？」

「お姉ちゃん!!!」

七海は楓に抱きつき楓も七海を抱き返した。

「・・・」

七海は泣き付かれたのかお腹がすいたのか食卓に楓と来た。すると。

「七海遅いぞ！」

「そっだよ！御飯冷めちゃうよ」

「じゅめん！」

皆が七海を温かく受け入れた。楓はその光景がうらやましかった。

(・・・家族・・・か・・・)

翌日

「ふあ〜」

首を鳴らし寒風摩擦している楓。すると通信端末がなった。

「ん？はい南です」

『楓か？』

「グレンさんどうしたんですか？」

『今宇宙海賊の反応だ！！管理局会議場が危ない！南一佐もそこに  
いる』

「え？・・・大地が」

『今エースチームがそちらに向っている。我々も救出活動で現場に向う…!』

そう言うとウイリーは通信を切った。

「こつしちやいられない…!」

楓はストームバンディットに跨ると現場に急行した。

「く!落ち着け!!海賊は我々で始末すれば良い!!」

大地が局員達を誘導するが局員達はパニックになっていた。

「くそ!エースチーム遅い!!」

『うおおおおおおお!!』

えび型宇宙海賊員ロボズが外壁を破壊した。丸見えになる大地達。

「ち!!」

大地が魔法で攻撃しようとしたその時だった。

『うおおおおおおお！！』

『ぐああ！！』

ストームダグオンのキックがロボズを吹き飛ばした。

(・・・あれは・・・ダグオン？)

外で対峙しているストームダグオンとロボズ。

『宇宙海賊！私が着たからには指一本触れさせません！』

『ふん！お決まりの台詞を・・・私の目的がお前だと言うことに気づいていないとはな！』

『え？』

『こんな密集した場所でその巨体で守りながら戦うのは困難だろうからな！』

管理局会議場があるのは都市部下手に戦えない。ストームダグオンが身構えると。

『待て待て待て！！』

『！？』

『青銅合体！ブロズガー！』



『チエンジ！アクセルエース！』

『チエンジ！ソニックエース！』

『チエンジ！ラリーエース！』

ストームダグオンと並び立つブロズガーとエースチーム。

『俺達を忘れてもらっちゃ困るぜ！』

『ウチのリーダーはお守りが必要なんだからな！』

『いや・・・二人ともそれ失礼でしょ・・・』

ブロズガーとラリーエースにツツコミを入れるストームダグオン。

『く！かかれ！！』

ロボズの指令で出撃する円盤軍。

『散って！！』

『『『『おっ！！』』』』

五人の勇者は散開した。

『エースシューター！！』

アクセルエースの銃が円盤を撃墜していく。

『ホイールグランチュー!!』

ソニックエースはタイヤを外し投げつけた。

『ラリーパルサー!!』

ラリーエースが両腕のマシニングを発射し円盤を一掃していく。

『凄い・・・みんな性能以上の力を出してる』

『俺も負けられねえな!!ブロンズカノン!!』

ブロンズガーは盾を構えると砲身が現れ円盤を撃墜していく。

『死ね!!』

『ぐあ!!』

ロボズに殴り飛ばされるストームダグオン。周りに人が居る為下手に動けない。

『ふん!であああ!!』

『うおおお!!』

ロボズの攻撃を受け止めながらストームダグオンは反撃をするが決定打にならない。

『ぬん!!』

『しまった』

攻撃される会議場。ストームダグオンが身を盾にして守っている。

『ふん！そのまま的になれ！！』

ロブズは一斉射撃を繰り出しストームダグオンをボロボロにしている。勇者達も雑魚の数が多すぎる為援護できない。

下では大地が避難誘導していた。

「皆さん落ち着いて・・・くそ・・・何やってんだよダグオン！」

大地がストームダグオンを見上げたその時。

「な！」

大地の頭の上に瓦礫が落ちてきた。

「くそ！」

避けられないその時。

『く！！』

「なに！」

ストームダグオンが大地達に覆いかぶさるように庇った。

『ぐー！っー！』

「なんなんだこいつ？」

大地はストームダグオンの行動が理解できない。

『リーダー！ジャックロッド！！』

ブロズガーのジャックロッドが雑魚を一掃する。

『エースシューター！！』

『ホイールグラツシュ！！』

アクセルエース、ソニックエースの攻撃が炸裂していく。

『ジェットアッパー！！』

ラリーエースのアッパーが雑魚を大空の彼方まで吹き飛ばした。

『いくぞ！おめえら！！』

『『『『おお！！』』』』

ラリーエースの先導にブロズガー、アクセルエース、ソニックエースが突撃するが・・・

『しゃらくさい！！』

『『『『なに！？』』』』

電磁ワイヤーで拘束されるエースチームとブロズガー。

『うあああああああああ！！』

『がああああ！！』

『うおおおおおおお！！』

『ぐぐぐぐぐぐぐぐぐ！！』

電流が流されダメージが蓄積されていく。

『ぐ・・う！！！負けるわけには・・』

『『『『リーダー！！』』』』

ブロズガー、エースチームが楓の援護に回ろうとするが敵の数が多すぎる。

『く！行くよ！！』

ポロボロのストームダグオンがロボズに向おうとしたその時。

『止めときな！！』

『！？』

ストームダグオンが振り向くと大きなマシンとともに一人の少年が立っていた。

「今のアンタが敵う相手じゃねえだろ！」

『……誰？』

「……勝ち目の無い戦いを挑むのは……勇氣とは呼べないんだぜ！！」

少年はストームダグオンに向かって言うとブレスを構えた。

「セイバアアアアチェンジ！！」

バイクと共にジェット機、消防車、マリンライナーが召喚された。それぞれのビークルは

『セイバアアアヴァリ！オン！！』

降り立つセイバーヴァリオン。

『あんだ！命が惜しかったら下がってな！！』

セイバーヴァリオンの言葉にストームダグオンは……

『……そういうわけにはいかない……私は……ダグオンだ！』

『ち……勝手にしる俺は好きにやらせてもらっぜー！』

『何者だ？まあいい……来い！！』

ロブズはハサミをセイバーヴァリオンに向けるが……

『消えた？』

『ラダーブレイド!!』

『ぐあああああ!!』

ロボズの背後に現れたセイバーヴァリオンのラダーブレイドがロボズを切り裂いた。

『・・・強い』

『なんなんだあいつ？』

プロズガー、ラリーースはセイバーヴァリオンの強さに驚いていた。

『一気に決めるぜ・・・シャインショット!!』

『ぐあああああ!!』

セイバーヴァリオンの胸からビームが発射されるとロボズは飲み込まれ消滅した。

戦いが終わり楓と少年は対峙していた。

「あなた……一体……」

「……別に誰でもいいだろ」

「名前は？」

「……シズマ」

少年シズマはぶっきら棒に言う。

「……どうして……助けてくれたんですか？」

「……アンタがあんまりにもグズだったからな、見ておけなかつたんだよ」

(口は悪いけど良い人だな)

と楓は思った。そして楓とシズマが振り向くと大地が立っていた。

「……大地」

「……久しぶりだな……姉貴……いや楓!」

兄弟関係など微塵も感じない大地の言葉を受ける楓。

「てめえ……一体何しに来たんだよ？」

「……私は」

「ん?……それは!」



大地は楓の左腕のダグコマンダーに目がいった。

「……これは」

「……んでだよ……」

「え？」

「なんでお前みたいな奴がダグコマンダー持ったんだー!」

「大地!」

「け……お前はそれで勇者になったんだよな……悪魔の子からのし上がったんだよな」

「……大地……あなた」

大地はそのまま去っていった。それを見ていたシズマは。

「……なんだあいつ？」

「……すみませんウチの弟です」

「……確かにあんた甘いけどな」

シズマの指摘に黙ってしまふ楓。そしてシズマの身体が光何かをとり出した。

光は楓の目の前で実体化し3本の剣になった。

「これは？」

「アフエタ」

「アフエタ？」

「次に会うまでにこいつを物にしな！！」

それだけ言うとシズマは去っていった。楓の目の前には二本の剣だけが残された。

## 第五話 出会い楓とシズマ（後書き）

私は・・・一体どうすればいいの？アフエタで作られた剣・・・ムゲンブレイド。私には重いよ・・・え？お爺ちゃん？何するの！？

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 戦慄！楓対力

南の生き様・・・この身体で受け止める！！

## 第六話 戦慄！楓対力

『おい・・・リーダーどうしたんだよ？』

ラリーエースが楓の様子を見に来ていた。

『どうもこの間のこと引きずってるみたいよ』

ブロンゾン達は楓の復活を待つのだった。

## 第六話 戦慄！楓対力

### 楓の部屋

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ここ数日部屋に籠りながら楓はずっと大地のことを考えていた。

（・・・お前はそれで悪魔の子からのし上がったんだよな）

ダグコマンダーを見つめる楓。

(・・・確かに・・・大地の方が魔法も凄いいし頭も良い・・・人望だってある・・・なんで私ばかり力をもらえるの?)

楓はシズマが渡したアフエタの剣を使ってみたが剣のパワーが強すぎ扱うことが出来ない。ネガティブ思考になっている楓を誰もが見ていることしか出来なかった。

(・・・どうすればいいの？私は・・・ダグオンは大地がなればよかったんだ・・・私は勇者になったつもりはない・・・)

楓はダグオンだと言うことを周囲に明かしておらず相談できる相手もない。そして唯一のそうだできる相手は・・・

(お爺ちゃんならこういう時どうするんだろう?)

楓は居ても立つても居られなくなり時空移動を開始した。A's時代ではなくA's時代より10年経った力の元に向かった。

「　　」

A's時代から10年28歳になった力は相変わらず暢気に歩いていました。今回は嫁に頼まれタンスの材料や夕飯の材料などの買出しをさせられていた。

「え〜つと牛肉に豆腐に・・・今夜鍋か・・・」

ふと力がドリンクコーナーを見ると緑の魔方陣が展開された。

「あの魔方陣って」

魔方陣から抜け出てきた楓。

「楓!」

「・・・久しぶり・・・お爺ちゃん」

何やら楓の様子が違うことに気づいた力は電話を取ると遅くなると連絡した。

「・・・お爺ちゃん誰に電話したの?」

「嫁」

「て！お爺ちゃん結婚できたんだ！！」

力が結婚できたことに驚いている楓。嫁については・・・気にするのは止めた。

（・・・お爺ちゃんと結婚した最凶最悪の物好き誰だろう？）

己の先祖に身も蓋もない事言う楓。時間があつたら見に行こうと思つた楓だつた。

いつも集まる公園にて

「・・・お爺ちゃんお仕事何やってんの？」

「いろいろ会つてボディガードやってます」

「おじいちゃん雇つてくれるところあんの？」

「あんな・・・俺これでも腕はいい方だぞ」

「まっ・・・お爺ちゃんだからね」

他愛もない会話。楓にとって話し合える家族は母親のほかに力しか

居なかった。

「で？お前どうしたんだ？」

「どうしたって」

「なんか悩みがあるって顔だな・・・この時代に16のお前が遊びに来るのは初めてだぞ」

力は騙せない楓。すると己の胸のうちを明かすことにした。

「・・・お爺ちゃん」

「なんだよ？」

「私・・・ダグオン・・・やめようかかって思って」

「なに？」

楓の言葉に力は顔をしかめた。

「私の弟の事・・・話したよね」

「ああ・・・ダグコマンダーもえなかったって話か？」

「うん・・・私のダグコマンダー・・・大地に上げようと思って」

泣きそうな顔になる楓。今の楓にとってダグオンは重すぎた。

「・・・やっぱり・・・私なんかダグオンになるのが可笑しかっ



「ただよ」

「……お前……それ本気で言ってるのか？」

「……うん……私にダグオンの資格なんて……無いよ……大地がなればよかつたんだ……大地なら正しく戦えると思っから」とすると力が楓に掴みかかった。

「お爺ちゃん？」

「……お前その程度の覚悟だったのか？来い！」

力は楓をどこかに連れ出した。

そして時間が経ち

夜

元機動六課隊舎

「……………」

元機動六課屋上に楓と力が対峙していた。

「……お爺ちゃんもしかして此処……」

「・・・ここはな・・・はやてが青春かけた場所だ・・・今は違うけどな」

すると力は楓を見た。

「お前・・・弟にダグオンを譲りたいのか？」

「うん・・・だって大地の方が私よ」「甘ったれんな」「え？」

力が楓の言葉を塞いだ。

「ダグオンってのはなブレイブ星の言葉で『勇者』を表す言葉なんだ・・・その勇者に選ばれたのは・・・他の誰でもないお前だ」

「お爺ちゃん・・・!!」

「お前・・・変身したとき覚悟で変身したんだろ・・・だったら・・・覚悟・・・決める!!」

すると力は着ていた青いジャケットを投げ捨てた。実戦で鍛え抜かれた身体があらわになる。

「・・・脱ぎな!楓!!」

「・・・!!」

何かを悟り楓も自らの黒いジャケットを脱ぎ捨てた。アンダーシャツになると力同様傷ついた身体が現れた。



「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

飛び掛ってくる楓の拳を力は受け止めた。

「！！！」

力が楓を弾くとミドルレンジに立った。

「！！！！！」

力と楓は駆け出すとお互いに頭突きでぶつかり合った。一瞬目が眩むと楓が拳を繰り出した。

力の顔面をめがけて楓は拳を振り回すが力は掻い潜り楓にカウンタ―お見舞いした。

楓は一瞬下がると怯まず前に進み飛び掛りながら二段蹴りをお見舞いするが力は再び受け止める。

楓はそのまま左右の裏拳のコンビネーションを見舞い力は再びカウンタ―を浴びせそのまま突進した。

「うおりゃあああああああああああああ！！！」

「ぐああ！！！」

力の蹴りが楓にクリーンヒットした。蹲る楓。

「ぐ……でえええええええええええ！！！」

楓は下段から回し蹴りの連撃を浴びせるが力は逆回転内側から回し蹴りのカウンターを浴びせた。

「こは……はぁ……ああああああああ！！！」

楓の上段蹴りを力は足で膝関節を絡めとりそのまま楓を倒した。

「ぐ……う……」

「どうした楓……お前はその程度で終わんのか？」

「はぁ……うおおおおおおおおおおおおお  
お！！！」

楓は力にしがみつくとそのまま押し倒しマウントポジションを取った。

「ぐ……うっ！！！」

力を減多打ちにしていく楓。だが楓は利器に何かをぶつけていた。それが何かは楓にも分からなかった。

「おりゃああああああ！！！」

今度は力が楓のマウントをとり楓を減多打ちにしていく。

「ぐっ！ああああ！！でえええええ！！！」

力を蹴り飛ばすと楓は起き上がった。両者構えるが楓の方が疲労している。

「・・・ぜえ・・・ぜえ・・・どうしてここまで？」

「・・・俺達戦う奴つてのはな・・・相手が1000人、2000人だつて・・・たった一人で戦わないといけない時があるんだ」

「たった・・・一人で」

「いくぞ楓！！うおおおおおおお！！」

「はああああああああああああ！！」

楓の上段が力の側頭部を力の中段が楓の足を捕らえた。そのままお互いの頭に掴みかかり両者膝蹴りのラッシュが浴びせられる。

「ぐーう！！」

「ぬーう！！」

我慢比べが続く。そして膝蹴りが同時にヒットし両者が吹き飛ぶと拳を振りかぶった。力は迷いを吹っ切り全ての想いをのせたあのパンチを放った。楓も負けじとパンチを放つ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

力と楓の拳同士がぶつかり合い力比べになる。

「べーうーうーうーうーうーうーうーうーうー！！」



今の楓に伝えるようにアフエタの剣は輝き始め一本の大剣が現れた。

「剣がお前を認めたいだな」

「うん・・吹っ切れた。ありがとう!!」

それだけ言うと楓は魔方陣を展開し元の時代に戻った。

楓を見送ると力の携帯がなくなった。画面には『嫁』と書かれていた。

「へいへい今帰りやすよ」

と言って力は帰るのだった・・・

「覚悟か・・・だったら・・・私の覚悟を決める!!」

そう決意する楓

だがふと思った

「あ!お婆ちゃん見てくるの忘れた。ま・・・いつか」

と特に気にしない楓だった。





## 第六話 戦慄！楓対力（後書き）

さつて覚悟も決めたしこれからが私の本当の戦い。そしてエースチームが合体フォーメーションをとる事になった。え？超A I 同士の合体はデリケート？うわ！みんなもめちやダメ！！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 高速合体  
これがエースチームの真の力

## 第七話 高速合体

### 第六話 高速合体

霧島園

部屋で宿題やら勉強している子ども達を見ているソニックエース。

『何でお前らこんな面倒くさい事やってんの?』

「だって勉強は覚えないと」

『ウザい・・・そんなら俺達みたいにAIにすりゃいいじゃねえか』

「ブーブー!そんなに言うなら教えてよ!」

『じゃあねえな』

と言ってソニックエースは勉強を見ている。

『おーいお前ら!本持ってきてやったぞ!』

『うわあい!』

ラリーエースが霧島園に本を運んできた。働いている図書館から拝借した。

「ねえラリーエース!」

『あんだよ?』

「今度ライトノベルがいい!」

『わあったわあった!今度持つてきてやるよ!』

子供に懐かれるラリーエース。

『おらあああ!』

子ども達とサッカーしているアクセルエース。

「ずりいぞ!!アクセルエースデかいし!!」

『へっへん!』

「ちきゅしょう!!ブロンゾン!!」

『へえへえ分かりやしたよ』

と言ってアクセルエース対ブロンゾンの試合が始まる。

「みんな馴染んできたな」

楓はみんなの光景を微笑ましく見ている。

「なんだかんだ言っても面倒見てくれるなんて」

そう言うとダグゴマンダーが鳴った。



『てめえらぶつ殺す!!』

ともめにもめているエースチームだが無理矢理合体シチュエーションに入る。

「それじゃあ!みんな行くよ!!」

『『『ふえ〜い』』』

やる気無さそうなエースチームに楓はダグコマンダーを掲げた。

「ブレイブアアップ!!エースレジェンド!!」

エースチームが滑空する。アクセルエースが頭部と翼、ソニックエースが両腕両足、ラリーエースが胴体になる。

『『『!!』』』

全員が巨人に組み上がっていくが・・・

ガッシャーン!!

『『『うわあああああああああああああああああああああ  
あ!!』』』

エースチームは合体に失敗し墜落した。

「みんな大丈夫!？」

楓がエースチームの元に駆け寄ると・・・

『てめらのせいで合体に失敗したじゃねえか!!』

『うるせえ!合体なんて都合よく出きんだよ!!』

『・・・確かに・・・300年前どっかの馬鹿があっさりやったし・・・』

その言葉に楓は・・・

(・・・言えない・・・その出来ちゃった合体やったのウチのご主人だって)

とどこぞの狸の事を思い出す楓だった。

その時デバイスが鳴った。

「え?みんな!?!」

通信によれば衛星観測施設が宇宙人に襲撃され火災が起きていると情報が入り出撃した。

「これは・・・」

炎上する管理施設。この状態では等身大の楓しか突入できない。

「みんな!消火を」

『『『『おう！！』』』』

エースチームとブロンズンは外面から消化液を放った。

「大丈夫ですか！？」

楓は取り残された人々の救助に当たる。

「娘が宇宙人に」

「え？」

母親の言葉に楓は急ぎ司令室に入ると少女を人質にしている宇宙人がいた。

「そのこと離して！！」

すると楓は人口彗星の軌道が地上に向けられていることに気づいた。

「これはあなたが！！」

「おうよ！この彗星の軌道が狂えばこの星はお陀仏だぜ！！」

「そんなことはさせない！！」

楓は宇宙人を倒し少女を救出するが・・・

「け・・・もう・・・俺が死んでも・・・彗星は止められない」





アクセルエースが壁を殴りつけている。

『俺達が合体できれば・・・』

『くそ！何で出来ねえんだよ！！』

『おい落ち着け』

『うるせえ！サポートマシンとお手軽合体の奴に言われたくねえ』

『てめえ！』

アクセルエースの売り言葉で揉めるブロンゾン。

「・・・みんな」

『『『リーダー！』』』』

病室の窓から包帯を巻いた楓がメンバーを見た。

「・・・ごめん・・・これじゃ・・・私は出撃できない・・・けど信じてる・・・みんななら大丈夫って・・・う！！」

『リーダー！！』

ラリーエースが楓をベッドに戻した。

『どつするっ』

『たりめえだろ！リーダーは俺達のこと信じてんだ！！やるしかね

え!!!」

『『『おう!!!』』』

一致団結するエースチームとブロンゾン。

数時間後

彗星を捕らえる勇者達は迎撃体制に入った。

『Bアーマー!!!』

Bアーマーが分離するとブロンゾンの身体に装着された。

『青銅合体!ブロスガー!!!』

ブロスガーがエースチームに言う。

『先行くぜ!!!』

ブロスガーを見たエースチームは・・・

『あいつばかりにい格好させるか!!!いくぜ!!!』

『『『おう!!!』』』

合体制に入るエースチーム。

『俺は・・・守りたいやつらが・・・』

『俺には・・・友達が・・・』

『俺には大切な人が・・・』

それぞれの護る者を思いエースチームは・・・

『うおおおおおおおー!!』

ソニックエースが両腕両足に変形し・・・

『おりゃあああああああああー!!』

アクセルエースが頭と翼に変形し・・・

『でああああああああー!!』

ラリーエースが胴体に変形した。

そしてそのまま組みあがっていく。

『うおおおおおおおー!!』  
『うおおおおおおおー!!』  
『うおおおおおおおー!!』

頭部の瞳が輝き全身に力が沸き起こる。

『エエエスレジェンドー!!』

ラリーエースの声が響き誕生したエースレジェンド。

『うおおおー!!』

『すげえ』

『まじ……』

エースレジェンドのパワーに驚くエースチームは大気圏を突破した。

『ぐーっ！』

ブロスガーが彗星を破壊していくがとてもしゃ防ぎきれない。

その時

『『『うおおおおおおおおおおおおおおおお！』』』

エースチームの音が響きエースレジェンドが飛来した。

『お前ら！』

『待たせたな！ブロスガー！』

『行くぜ！』

エースレジェンドは全ての武装を合体させたレジェンドライフルを構えた。

『指揮系統は俺がやる!!』

『パワーは俺だ!!』

『・・・運動は俺だ』

ラリーエース、アクセルエース、ソニックエースの音が響いた。

『行くぜ!!』

エースレジエンドの照準が合わされる。

『一撃で決めてくれよ!へましたら破片が増える』

『『『おう!!』』』

レジエンドライフルにエネルギーが充填されていく。

『『『タアアアボシューティング!!』』』

エースレジエンドから放たれたビームが大型の彗星の破片を貫いた。

『やったな!!』

『ああ!!』

そう言いエースレジエンドとプロズガーは地上に戻るのだった。

「・・・良かった」

病床から楓は勇者達のことを見守るのだった。

## 第七話 高速合体（後書き）

長期任務で訪れた私達。大地どうしたのそのユニット・・・え？大地？そのアーマー一体・・・まさかあのプロジェクトの！  
次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 楓対大地  
あなた・・・いったい！？



## 第八話 楓対大地

### 管理局研究施設

「エネルギー係数・・・10・・・20・・・よし安定だ・・・」

研究施設で黒いアーマーが製作されていた。そして其処には大地の姿があった。

「このアーマーが完成すれば・・・ダグテクターを超えられる!!」

大地はアーマーを見ながらダグテクターを思うのだった。

### 第九話 楓対大地

#### 何処かの発掘場

「ふあ〜」

と楓は発掘現場を見学していた。

今日の楓の任務は発掘現場の警護をだった。

「ん〜私時間犯罪部署なのにな〜なんでこつこつにばっかり借り出されるんだろ」

楓の所属する時間犯罪部署とは札付き局員のたまり場・・・いわゆるはみ出し者集団で構築されており、警備から何ら人手不足の部署に借り出される所謂人材派遣部署のようなものであるがゆえオールマイティにこなせる人物が必要となる。

「ん」

「職務中にアクビとはいいいご身分だな・・・楓」

「!!!」

楓が振り向くと大地が居た。大地は楓を見下すような目で見ていた。

「・・・大地どうしてここに？」

「・・・俺はお前みたいな島流し女と違って暇じゃないんだよ・・・」

「・・・そう」

罵倒されながらも笑顔で答える楓。

「気色悪いいな・・・笑いやがって」

「あなたみたいにかめっ面ばかりしてもくらいし」

「・・・仲間と群れやがって」

「え？」

「・・・俺はお前と違って仲間は作らない主義でな・・・」

「あなた・・・」

そう言い残し立ち去る大地。だが楓は見逃さなかった・・・大地の背中が寂しそうだったことに・・・

夜

楓は一人発掘現場を訪れていた。発掘現場ではロストログアを狙っているという情報が舞い込んできた。

「・・・居た」

発掘現場に居たのは地球人ではなかった。

「宇宙人？」

『ぎー！』

宇宙人は楓の姿を見ると撤退を開始するが・・・

ダン！ダン！ダン！

銃が火を噴くと宇宙人が叩き落とされた。

その先には・・・

「・・・大地？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大地は何も言わずに銃を構えていると宇宙人が空中に飛び上がった。

「は!!」

「ち!!」

追跡を始める楓と大地・・・宇宙人を空中で捕らえると・・・

「トライダグオン!!」

楓がダグコマンダーを起動させると翡翠のダグテクターが構築されフルフェイスのマスクが覆われる。

「ストームカエデ!!」

楓がダグテクターを装着すると大地もユニットを構えた。

「コネクション!!」

ユニットから大地の身体を包み込むアーマーが装着された。

二つの閃光が起ると宇宙人は瞬殺され空中で対峙した。

黒い騎士のようなアーマーの大地を装着した大地が楓を見つめていた。

「その鎧・・・まさか・・・ジエノサイドプロジェクトの・・・黒

い騎士」

「黒い騎士？どうせなら暗黒騎士とも呼べよ」

漆黒の鎧を纏った大地は楓に向かって構えた。

「・・・どうする？少し遊んでいくか？」

対決は避けられないそう感じた楓は構えた。

大地が飛び掛り楓も構えた。空中でぶつかり合う楓と大地。

「く！う！」

「はあ！おりゃ！！」

大地の迷いの無い攻撃を楓は受け続ける。大地は拳に剣を装着し楓に振り下ろすが楓は受け止め弾こつとした時大地のカウンターの頭突きがヒットした。

「ぐー！」

墜落する楓だが大地は追撃を止めない。大地は剣を振り下ろすが楓は咄嗟に空中回避した。

「うあ！ああ！！」

空中でバランスを崩す大地を楓は追撃した。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「くう!!」

「あああああああああ!!」

楓のパンチが大地に突き刺さり大地は撃墜された。

「ぐ・あ・・・」

蹲る大地と着地する楓。

「まだだ・・・まだ終わっちゃいねえ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大地の姿を見た楓は何も言わずダグテクターを解除した。

「てめえ・・・何の真似だ!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

楓はただ大地を見ているだけだ。

「この野郎!!」

大地は血迷ったように楓に剣を振り下ろした。

「なに!？」

大地は驚愕した。楓は身体で剣を受け止めていた。

楓は大地の一閃を避けなかったからだ。剣に楓の血が流れ落ちる。

「な・なんで・・・」

「あなたは・・・それで満足なの？」

「なに？」

楓は大地の剣を握り締めた。剣に楓の血が滴り落ちる。

「ここで私を殺して・・・自分を誤魔化し続けて・・・それで満足なの？」

「黙れ！！」

大地は剣に力を込めるが楓の体を切り裂けない。

「今のあなたの剣じゃ・・・私は斬れない・・・」

楓のその言葉に大地はへたり込むのだった。

楓はそのまま剣を引き抜くと楓は去っていった。

(・・・あの女・・・強い・・・)

大地は楓に対しそう思うのだった。

## 第八話 楓対大地（後書き）

さつてと怪我も治ったし皆も一皮剥けた。あ！いけないヴィヴィオ  
ちゃんが呼んでる！！つて！何で大地まで来たの！？

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 勇者の心  
・・・弱くて・・・ごめんね・・・



## 第九話 勇者の心

ある嵐の夜

「ZZZZZZZZZZ」

ヴィヴィオが気持ちよさそうに眠っている。

（フハハハハ！死ね聖王！！）

（キャアアアア！！）

夢の中でドライアスに殺されてしまうヴィヴィオ。

「うわあああああああああ！！」

あまりにも怖い夢のため飛び起きてしまうヴィヴィオ。

「うわあああお姉ちゃああん！！」

と言ってヴィヴィオが発信機鳴らす。

300年後

「いや〜久しぶりの風呂はええな〜」

と暢気に爺臭く風呂に入っている楓。療養の為ずっと風呂に入っていないかった。

その時

PIPIPIPIPIPI

「ん!!行けない!!!!ヴィヴィオちゃんが呼んでる!!!」

と言ってダグコマンダーだけ持って急ぎ時空移動する楓。

この人の頭は己の欲望よりも子供のほうが優先順位上のようにです。

「ヒック・・・ヒック・・・ん?」

ヴィヴィオの目の前に緑の魔方陣が展開されすっぱんぼんの楓が抜け出てきた。

「ヴィヴィオちゃんどうしたの!!!!?」

「うわ〜ん!!お姉ちゃんああん!!怖かったよ〜!!!」

「ぐは!!!」

毎度おなじみ挨拶のロケット頭突きを食らう楓。のたうち回ってます。

「で〜どうしたの？」

とりあえず滅茶苦茶怒られた後ウーノが持ってきた服に着替えた楓はヴィヴィオの話聞いた。

## 第九話 勇者の心

翌日

近くの山にて・・・

「えい！えい！！」

ヴィヴィオの突きを楓は受けている。

ヴィヴィオは余程怖かったようで楓から護身術程度のソニックアーツを伝習することになった。

「ていー！」

「よー！とおー！」

ヴィヴィオの蹴りをかわし木の上にジャンプする楓。

「あ！お姉ちゃん！ズルイ！」

「へへ。やっぱりヴィヴィオちゃんは戦うのには向かないよ」

するとヴィヴィオは俯いてしまった。

「だって私はお姉ちゃんみたいに特別な力なんて無いもん」

「あーヴィヴィオちゃん」

失言したと思った楓は木から飛び降りるとヴィヴィオの元に駆け寄った。

「ヴィヴィオちゃん気を悪くしないでよ」

ヴィヴィオは川に石を投げながら呟いた。

「私はお姉ちゃんみたいに強くないもん・・・」

その言葉を聞いた楓は・・・

「・・・力や技だけが戦うのに必要なんじゃないよ」

「え？」

「それだけじゃ・・・本当に必要な勇氣は出ないよ」

「けど！それが一番必要なんじゃない！！」

すると楓は考えながら言った。

「うーんただ暴れるだけならそれで良いんだけどね」

「・・・暴れるだけ？」

楓の話が分からないヴィヴィオだった。

一方

楓たちから少し離れた場所でジャンゴが実験をしていた。

「ふふふ・・・これさえあれば・・・」

ジャンゴの目の前にある巨大なカノン砲。対宇宙警備隊、宇宙警察  
機構、銀河連邦の新兵器スペースカノン。

「早速実験開始じゃ」

ジャンゴがスペースカノンを最低出力で発射した。

「！！！」

爆音が響き楓が振り返ると山が爆発した。

「なに!?!」

「ヴィヴィオちゃん!伏せて!!」

石の破片などからヴィヴィオを守っている楓。

「・・・お姉ちゃん・・・これって」

「やばそう・・・火鳥さんたちに連絡を・・・く!!」

楓が連絡しようと崖沿いの道を走ったその時。光線の余波が楓たち  
の下に降り注いだ。

「ぐ!!」

咄嗟に防御結界を張る楓だが圧力に圧されてしまう。

「うああああああ・・・」

吹き飛ばされ崖下に転落してしまう楓。

「お姉ちゃん!!」

崖下で蹲っている楓。その時。

「ち・・・相変わらず使えない女だ・・・」

「誰?」

ヴィヴィオが振り返ると大地の姿があった。

「・・・名乗るほどのもんじゃない」

ヴィヴィオの問いかけを突っぱねる大地。

「お願い！お姉ちゃんを助けて！！」

「・・・断る・・・自業自得だ・・・それに俺も任務はそいつを助けることじゃない」

大地はヴィヴィオの願いを突っぱねた。

「どうして！？助けて！！」

「・・・そんなに助けたければ自分で助けるんだな」

無情に立ち去る大地はヴィヴィオに一言だけ呟いた。

「あの女を助けたら伝えとけ・・・精々プラネットエネルギーが吸い尽くされないうちにどうにかするんだな」

そう言うと大地は山を調査し始めるのだった。

取り残されたヴィヴィオは・・・

(・・・私が助けなきゃ・・・私が！！)

ヴィヴィオは楓の元に走った。

険しい山を下りながら・・・ただ楓のことだけを思い・・・

「くーきゃー！」

獣道を滑り落ちてしまおうヴィヴィオ。その時。

「・・・テシター？」

山を登っていくテシターの姿が・・・ヴィヴィオはこっそり付いていくと・・・

「げはっはっはっは！！成功じゃ！成功じゃ！！！」

洞窟の中で狂喜乱舞しているジャンゴ。

「プラネットエナジーを破壊光線に変換させるこのスペーススカノン・・・これさえあればあのファイバードもを粉々に出来る！！！」

「ジャンゴ！！！」

「んー！」

ジャンゴに気づかれてしまったヴィヴィオは咄嗟に逃げ出した。

「逃がすなー！！！」

ジャンゴはテシターを追わせた。

「はあーはあー！！！」

必死に走るヴィヴィオだがテシターの方が速い。囲まれてしまおう



イヴィオは・・・

(ダメ・・・やっつけて・・・早くお姉ちゃんを助けないと・・・)

ヴィヴィオは震えながら構えた。

「うわあああああああああああ!!」

テシターに突撃するがテシターに突き飛ばされてしまう。テシターは蹲るヴィヴィオにジワジワと詰め寄り銃を構えた。

(・・・殺されちゃう!!)

テシターがヴィヴィオに襲い掛かったその時。

「であ!!」

テシターが蹴り飛ばされた。

「!!」

ヴィヴィオが振り向くと楓の姿が・・・

「お姉ちゃん!!」

「ヴィヴィオちゃんこっち!!」

楓はヴィヴィオを抱き上げるとそのまま走りテシターを巻くために隠れるのだった。

「ヴィヴィオちゃん。もう大丈夫」

「……………」

何も言わないヴィヴィオ。

「……ヴィヴィオちゃん？」

「……怖かった」

「え？」

「とても怖かった！私！殺されるかと思っただら動けなかった！！こんなんじゃない……パパやお姉ちゃんと一緒に戦えない！！」

すると楓は微笑みヴィヴィオに言った。

「ヴィヴィオちゃん……言ったよね……戦うのに必要なのは力や技だけじゃないんだよ……もうヴィヴィオちゃんは大切な心を掴んでる」

「え？」

「そんなに泥だらけになつて私を助けに来てくれたんだもん。それはとても勇気がある事だし。その優しさが戦うのに一番必要なんだよ」

「……………」

「優しさがあれば……相手を思いやる事が出来る……それは強

い人じゃないと出来ない・・・私のお母さんが言った」

「・・・お姉ちゃんママが？」

「うん・・・私もね・・・子供の頃凄く怖い思いをしたんだ・・・」

「え？」

楓はヴィヴィオに昔話をした。

私ね。弟と一緒にピクニックに行っただ・・・そしたらね・・・

「「うわあああ！！」」

古井戸に落ちちゃったんだ・・・子供じゃ這い出ることが出来ないし・・・弟はパニックになっちゃうし・・・

「姉ちゃん・・・怖いよ！！」

「大地。大丈夫だよ」

私は弟を抱きしめて強がったけど・・・怖かった・・・弟は安心して眠っちゃうし・・・暗くなるし・・・何も聞こえなくなるし・・・けど・・・弟に弱い自分を見せたらもつと怖がると思ったんだ・・・弟だけは助けたかったから・・・そしたら・・・

「楓！大地！！」

「お母さん！！」

お母さんが私たちを見つけてくれたの・・・井戸から引き上げてくれたお母さんは眠ってる弟をおんぶして私のほうを見たの・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・私は・・・怒られると思った・・・私も情けなかったし・・・弟に怖い思いもさせちゃったし・・・けどお母さんは・・・

「楓・・・頑張ったね」

「え?」

「怖かったよね・・・怖くても立ち向かっていくのが・・・本当の  
勇気だよ・・・」

「・・・お母さん」

「・・・たく・・・泣いちゃダメ」

お母さんが頭を撫でてずっと一緒に居てくれたんだ・・・

「・・・だから・・・ヴィヴィオちゃんだって勇気を持ってるんだ  
よ」

「・・・お姉ちゃん・・・そうだ!!」

ヴィヴィオが立ち上がった。

「この先に・・・ジャンゴの新兵器があったんだ!私見たよ!!そ

れに変なお兄さんが言った・・・プラネットエネルギーを吸い尽く  
されないうちにつて・・・」

「・・・変なお兄さん？まさか大地・・・急がないと・・・う！」

傷ついた身体で楓は立ち上がり構えた。

「お姉ちゃん！無理しないで！！」

「大丈夫・・・」

傷つきながら立ち上がる楓を支えるヴィヴィオ。

「・・・お姉ちゃん・・・今も・・・怖い？」

「・・・怖いよ・・・とっても怖い・・・けど行かないと・・・」

それだけ言うと楓は駆け出した。ヴィヴィオは楓の背がとても重そ  
うに見えた。

「私も行く」

「ヴィヴィオちゃん？」

「私が案内する！」

ヴィヴィオの決意を見た楓は・・・

「連れてって・・・」

ヴィヴィオに任せるのだった。

洞窟に辿り着いた楓たちを待ち構えていたジャンゴ。

『待つてぞ！ダグオン！！』

ロボットに乗り込みスペースカノンを構えるジャンゴ。

「トライダグオン！！」

楓がダグコマンダーを起動されると翡翠のダグテクターが構築されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ストームカエデ！」

ダグテクターを装着した楓を見るとジャンゴは天井を突き破り外に出た。楓とヴィヴィオもあとを追う。

『食らえ！！』

ジャンゴはスペースカノンを発射するが楓は避け続ける。

「く！こんなの食らつたら私消えちゃう」

と楓はスペースカノンの威力に驚愕する。

『ふん！ダグオン！貴様は何故人間を守る！？』

「え？」

『人間など所詮愚かな存在でしかない!!』

ジャンゴはロボットの拳を楓に向かって振り下ろした。

「!?!」

楓がジャンゴの攻撃を受け止めようとするとジャンゴの動きが止まった。

「!?!」

楓の視線の先にはジャンゴのロボットに剣を突き刺している大地の姿が……

「……大地」

「……勝負してみるか？」

「え？」

「……It's show time」

大地の合図と共に楓と大地はジャンゴに飛び掛った。

『なに!?!』

楓と大地の連携攻撃に翻弄されるジャンゴ。

「……こいつの言うとおり人間って愚かなんだろうな!!」

ジャンゴを攻撃しながらあざ笑うような大地の言葉に楓は……

「……だからどうした？」

「ほう〜？」

「私はためらわない!! 守ることに!!」

楓はビークルを呼び出した。

「疾風合体!!」

ダグストームが飛び上がるとダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエ!!』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。腕が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン!!』

ストームダグオンが降り立つと物凄い風が巻き起った。

『おのれ!!』



ジャンゴが襲い掛かろうとすると・・

「フォートレススライカー!!」

大地のコールに飛来する巨大なジェット機。

「合身！」

ジェット機が人型に変形すると大地がコックピットに転送されアー  
マーと連結した。

「デスライカー!!」

大地のもう一つの姿・・デスライカーが誕生した。

「おのれ!ダグオンだけではなく貴様まで現れるとは!!」

ジャンゴがスペーススカノンを低出力で乱射するとストームダグオン  
とデスライカーはサイドステップで避けた。

「なに!?!」

「ハヤテ!!」

「ドリルアーム!!」

ストームダグオンはアフエタの剣を構えデスライカーはドリルを装  
着すると両サイドから攻撃した。

『く!?!』

ジャンゴはデスライカーにバルカンを放つがストームダグオンが防御結界を張り防くとデスライカーがビームガンを発射しジャンゴのバルカンを破壊した。

『何だこいつらは!?!?』

ストームダグオンとデスライカーの連携に圧されるジャンゴ。

『こっぴなったら!?!』

「え?」

ジャンゴがスペーススカノンをヴィヴィオに向けた。

『ヴィヴィオちゃん!』

『ち!』

『死ね!?!』

ヴィヴィオに向かってスペーススカノンが高出力で発射される。

「ひ!」

ヴィヴィオが光線に飲まそうなその時。

『うおおおおお!?!』

「!?!」

ストームダグオンがヴィヴィオの盾になった。膝を突き倒れるストームダグオン。

「お姉ちゃん!?!」

『・・・弱くて・・・ごめんね・・・』

頭部の瞳が輝きを無くす。

「お姉ちゃん!?!」

泣き叫ぶヴィヴィオをよそにジャンゴがストームダグオンの首を持ち上げる。

『その首へし折ってやる!?!』

ジャンゴがストームダグオンの首を折ろうとしたその時・・・

『・・・なせ・・・』

『なに!?!?』

『・・・姉貴に触るじゃねええ!?!?!』

デスライカーの一撃がジャンゴにヒットしストームダグオンを解放した。

『デスランサー!?!?!』

諸刃の槍を構えるデスライカーにエネルギーが充填されていく。

『グランドクロス!!』

『うおおおおおおお!!』

十字に切り裂かれるジャンゴのロボットが爆発すると脱出ポットが飛んでいった。デスランサーを納めるデスライカー。

戦いが終わり楓と大地は向かい合っていた。

ヴィヴィオは楓たちを見つめていた。

「……大地……ありがとう」

「……礼を言われる筋合いは無い……俺は俺の任務を全うしただけだ」

大地はスペーススカノンの破壊が目的であり楓との勝負もついでだった。

「大地……あなたも一緒に」

差し出された手を大地は振り払った。

「ざけんな……俺はお前とは違う……仲間なんて要らない!」

立ち去る大地の背中を見送りながらヴィヴィオが言った。

「お姉ちゃん・・・大地さんは・・・」

「大丈夫・・・大地もきつと仲間になってくれる」

立ち去る大地を見送りながら・・・

(・・・待ってるよ・・・大地)

楓はそう思うのだった。

## 第九話 勇者の心（後書き）

宇宙人の超音波で眠れる人々。このままじゃ皆が衰弱死しちゃう！  
！そんな超A Iのみんなやブロンゾンまで！大地・・・守るものや  
仲間は弱点？そんな！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 独りの戦い  
大地！今はあなたに構ってる暇はない！！

## 第十話 独りの戦い

ゾーマ艦

「・・・なるほど・・・彼女がダグオンか」

ゾーマ鉄壁の武道家シュテルンが楓の動きを見ていた。

「ふむ・・・彼女の動きは無駄なところが多い・・・そして無駄に仲間とともに戦っている」

楓の動きを計算し始めるシュテルン。

「・・・そうか・・・物理の法則からしてこれは・・・よし・・・これで彼女が我々に勝てる可能性は・・・0だ」

第十話 独りの戦い

「姉ちゃん！風呂でたか？」

「うん！」

と言って風呂上りに浴衣着ている楓。

「いいお湯だった」

と言って首にタオルをかけうちわで扇いでいる。

『おいリーダーいい加減みっともないのやめろよ』

『・・・そうだよ』

ブロンゾンとソニックエースが冷ややかな視線で見ている。

「まあまあ 硬いこと言わない言わない」

『て！あんだ社会の見本になる大人だろ！』

『・・・まあ抑える抑える』

楓に向かって発砲しようとしているブロンズンをラリーエースが止める。

すると

キーン

「・・・音？」

楓の耳が何かの音を感じ取ると・・・

『大変だ！』



アクセルエースが血相を変えて車庫から出てきた。

『どうした!?!』

『みんなが気絶しちまった!』

「え?」

楓が霧島園の中に入ると風太郎を含む子ども達、そして玄が倒れていた。

「これって・・・管理局」

楓はワイリーに連絡をとろうとするが・・・繋がらない。

「・・・まさか・・・さっきの音」

楓はラリーエースに指示し音の発信源を分析させる。

ラリーエースが発信源を見つけるとストームダグオン、ブロスガー、エースレジェンドが出撃した。

『あそこだ!』

エースレジェンドの見る先には巨大なアンテナのような装置があった。そして急に違和感を感じだすブロスガーとエースレジェンド。

『く！なんだ？』

『・・・これは』

『どっしたの？』

ストームダグオンの言葉に何でもないと言い装置の前に着地する。

『なにこれ？』

データを収集するその時。

『！！』

電磁ネットが張られた。身動きが取れなくなるストームダグオン、ブローズガー、エースレジエント。

『く！』

ストームダグオンがハヤテを引き抜きネットを切り裂いた。全員脱出すると今度はゾーマ兵が群れてきた。

『く！』

応戦するストームダグオン達だがその時。

『ぐは！』

『リーダー！！』

ストームダグオンが何者かに殴り飛ばされた。立ち上がるとそこに居たのは闘士。

『貴様がリーダーか・・・ふ!』

『え?ぐあ!?!』

一瞬で懐に潜られると殴り飛ばされるストームダグオン。反撃しようとするが闘士はストームダグオンの急所というべき場所を徹底的に攻撃している。

『ぐ・う!』

体力が削られるストームダグオン。

『てめえ!』

『うおおおおおお!!』

ブロズガーとエースレジェンドが援護に向かったその時だった。

『ぐああああああ!!』

装置が起動し巨大な超音波が二人を包み込んだ。倒れてしまう勇者達。

『みんな!がああ!?!』

ストームダグオンにも容赦なく超音波が浴びせられる。

『ふふ・・・君は特別なようだね・・・だが・・・君はもう勝てない！このシュテルン！君を倒す！！』

ストームダグオンに決定打を浴びせるシュテルンだが・・・

『なに！？』

踏みとどまるストームダグオン。そしてゆっくりと立ち上がるのを見ると・・・

『撤退だ！！』

町から撤退するシュテルン。そしてストームダグオンは蹲ってるブロズガーとエースレジェンドに駆け寄った。

『みんな！』

『ぐ・・・あ・・・』

『うっうっう』

『ブロズガー！エースレジェンド！』

強制的に合体が解除されるブロンゾンとエースチーム。ストームダグオンもガードアニマル達が機能を停止してしまったためダグストームに戻った。

『みんな！ブロンゾン！ラリーエース！ソニックエース！アクセルエース！！みんな！！』

ダグストームは混乱するがとりあえず霧島園に戻った。格納庫にセツトするが・・・

「まさか・・・超AIのみんなはあの超音波に影響されて・・・けど・・・私も超音波を受けたのに・・・もしかして」

楓の得な体質。力の血のおかげで楓は超音波の影響を受けなかったようだ。

とりあえず医務室で子ども達を寝かせ身体を調査する。

パソコンを立ち上げ分析すると・・・

「これは・・・前にジャンゴがやった催眠音波」

しかもジャンゴの使った音波より硬直のスピードが速い。

「待つて・・・あんな目立つ音波なら・・・そう簡単に移動できないはず・・・」

分析すると発信源が現れた。

「でた・・・ポイント5908の森林地帯・・・やるしかない・・・勝つしかない!!!」

動けない仲間を背に楓はストームバンディットに乗り込み森林地帯に向かった。

そして

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その背中を見送る大地の姿が

町並みは静かだった。催眠音波により人々は硬直している。

「この先」

町外れまで走ると森の入り口に差し掛かる。

その時無数のエネルギーが楓を襲った。ストームバンディットのハンドルを切り咄嗟に回避する楓。

「誰!?!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

襲撃された楓の前に現れたのは大地だった。

「・・・大地」

「どうやら俺とお前はじいさんの体質のせいで硬直音波が効かないみたいだな」

「大地・・・悪いけど・・・今はあなたに構っている暇はない!!」

大地を通り過ぎようとする楓だが、大地は楓を殴り飛ばしストームバンディットから叩き落した。

「く！大地」

「お前に教えてやるよ・・・仲間の愚かさを・・・コネクション」

ジェノサイドアーマーを装着する大地は剣を構えた。

「トライダグオン！」

戦いは避けられないそう判断した楓がダグコマンダーを起動させると翡翠色のダグテクターが装着された。

「ストームカエデ！」

対峙する楓と大地。

先に仕掛けたのは大地だった。

「ぐああ！」

「!!」

大地の斬撃をあびる楓。楓は大地の剣を抱え込むように受け止め鏢迫り合いになった。

「お前は甘いんだよ!!」

「え?」

「・・・仲間と群れてな・・・絆や仲間なんてな・・・所詮弱点に  
しかならないんだよ!!」

「なに!!」

一歩下がりストームシューターを構える楓。

「く!!」

「!!」

「うわああああああ!!」

銃撃する前に大地のキャノンを浴びせられる楓。ダグテクターが強  
制解除された。

「ぐ!あ・・・あ・・・」

大地は楓に詰め寄った。

「そっだよ・・・甘いんだよお前は・・・相手が俺だから遠慮して  
んのか?」

肉親と戦うことをためらってしまう楓。吐血しながら大地を睨み付  
けた。



「けど・・・私はそういう戦いを選んだ!」

「・・・なに」

「それで私が弱いなら弱くたっていい!けど私は踏みつけられたってボロボロになったって・・・何度だって立ち上がってみせる!」

大地と向き合う楓。

「私は・・・仲間を絆を信じる・・・あなたとだって繋がってるはず!」

「ざけんな!俺はお前の事なんかなんとも思ってたねえんだよ!」

その時だった。

「!」

高密度の超音波が楓と大地に向かって浴びせられた。

「ち・・・この先か・・・」

「く!」

楓が向かおうと走ると大地がキャノンを構えるすると・・・

「な!」

キャノンを打ち抜かれる大地。その先には銃を構えた楓の姿が。

「大地！邪魔をすれば・・・私は命に代えてもあなたを倒す！！」

楓は再びダグテクターを装着するとストームバンディットに跨ると大地を後にした。

(・・・認めない！私は大地のやり方を！！)

森に入ると道は段々狭くなってきた。

そして一番深い場所まで走ると等身大の状態のゾーマ兵たちが居た。

催眠音波発生装置で仁王立ちしている等身大のシュテルン。

「・・・来たか・・・ダグオン・・・」

「・・・く」

駆けつけた楓はシュテルンと対峙している。そしてゾーマ兵が木の間から次々と現れた。

「ふん・・・私の計算ではお前が勝てる方法は0%だ」

「なに！」

「仲間と切り離され一人のお前では我々に勝つことは出来ん・・・私の無駄のない作戦・・・そして効率よく鍛えぬいた・・・無駄のない肉体・・・もうお前に勝つ手段はない!!」

ゾーマ兵を楓に向かわせ楓を取り囲んだ。

「GGガン!!」

ゾーマ兵が次々とかき消されていく。楓が振り向いた先には・・・

「大地！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大地は何も言わず楓の元にいき背中合わせの状態になった。大地を含めて次々と囲んでいく。多勢に無勢だった。

「ふふふ・・・貴様が現れることなど計算の内だ南大地・・・二人になったところで」

「・・・勝手に俺を頭数に居れてんじゃねえよ」

ぶつきら棒に反論する大地だが背中ががら空きだった。

「!?!」

大地の背後から襲い掛かるゾーマ兵

しかし

「ぐー!!」

だが大地の背中には楓が居る。ゾーマ兵は吹き飛ばされる。

楓の背中にも大地が居る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

楓は不思議と安心している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大地も一人で戦うときとは何か違う感覚を持った。

「やれ!」

シュテルンの指令が下ったその時。

「あいやあああ!!」

ちびっこい少年が舞い降り宇宙海賊を蹴り飛ばした。そしてこけた。

「あらゝ着地失敗」

「あ!あなた!」

少年に身に覚えがある楓。

「あゝあゝ登場シーン踏み外して」

聞き覚えのある大好きな声

その声に振り返ると・・・

「まさか！」

「！！！」

楓の先にいる四人の影。

「時空を超えて孫を助けに来た！」

楓と大地の視線の先に・・・

力が・・・飛鳥が・・・北斗が・・・最初に登場したサイモンが・・・  
そしてはやてが・・・

「「「おりゃあああああ！！」「」」

3馬鹿に蹴り飛ばされる宇宙海賊。

「お前ら・・・まさか！ありえん！！」

時空を超えて集結した八神組最悪の5馬鹿。

「時空を超えて八神組最悪の5馬鹿参上や！！」

「いえ・・・6馬鹿です！」

「てめ！俺を勝手に頭数に居れんじゃねえ！！」

と楓に文句を言う大地。

「ていうか・・・どうやって来たんですか？」

「ん？熱い絆に不可能はないんや！！」

と身も蓋もないことを言う組長。

「アホか・・・漫画返しに行こうって言って天野博士のミラクルタイムマシンで来たんだろうが・・・」

と飛鳥。

「・・・まあ・・・こんなことになっているとは思わなかったがな」

と北斗。

「みんな」

時を越えて繋がっている絆。

「さつとと・・・俺の孫たつぷり可愛がってくれたみてえだな・・・南家流の落とし前・・・着けさせてもらおうかいね」

と歴史に残る悪魔・力が指間接ボキボキ慣らす。

「よし！散開や！！」

「「「おっ！」「」」

組長の号令に飛び出す4馬鹿。

「「トライダグオン！」「」

「アジャスト！」

「アクセス！」

変身し飛び掛る4馬鹿。

「おりゃあああああああ！！」

サイモンのパンチが手下を破壊する。そしてゾーマ兵を持ち上げるとそのまま別のゾーマ兵に投げつけ壊しあった。

「このガキがあああ！！」

「ガンモード！」

襲い掛かってくる手下を銃撃が一掃した。

「天井鞭！！」

北斗の鞭術が一掃し・・・

「朱雀・・・舞羽陣」

飛鳥の羽が舞った。次々と切り裂かれていくゾーマ兵。

「ぬん！てりゃー！！」

力の拳が手下に突き刺さっていく。

「おおおおおおおお！！寝てる！！」

右と左の腕で手下の頭を掴み取ると激突させ手下の頭を潰した。

「！！！！」

はやてのパンチがゾーマ兵を3メートル以上吹っ飛ばした。

「楓！雑魚引き受けた！親玉やりな！！」

「お爺ちゃん・・・うん！！大地！超音波発生装置を！！」

「命令すんな！！」

と大地は超音波発生装置に向かい楓はグラムと対峙した。

「・・・第二ラウンド」

「ほむけー！！」

襲い掛かるシュテルンに・・・

「うおおおおおおおおー！！」

「・・・」



楓の瞳が紅く輝き

・・・楓の中の野生が目覚めた・・・

「!!!」

「グボオオオオオオオオ!!!!」

楓の拳に吹き飛ばされ大木に叩きつけられるシュテルン。

「がは・・・そんな馬鹿な・・・私のほうが強いはず・・・」

うるたえるシュテルンに楓はジワジワと詰め寄った。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

シュテルンは楓の急所に次々と殴りかかる。ふらつく楓。

(・・・今度こそこれで死んだはず!!)

安心したシュテルンだが。

「!!!!」

楓は踏みとどまった。そしてシュテルンを睨みつける。その瞳は死ぬどころか立ち上がるたびに闘志を燃やした。

(なんなんだ！なんなんだこの女は！？私の攻撃をこれだけ受け続けて・・・立ち上がって来た者なんか居なかった!!)

楓の死人のように立ち上がってくる姿に脅えるシュテルン。かつてこれほどの恐怖を感じたことが無かった。

それを見た力は・・・

「一ついいこと教えてやろうか？」

「な！なんだ!？」

「・・・力学なんてただの通過点なんだよ」

「な！」

己の修練を否定され絶句するシュテルン。そして飛鳥が続いた。

「あくあたしスポーツ力学とか嫌いなんだよね〜」

「なに！？」

「・・・人間の可能性なんて計算なんかじゃ絶対出せないんだよ・・・あんなもん潜在能力に制限かけるだけじゃねえか・・・それに・・・あんた負けたことないでしょ？」

と飛鳥に言われ反論できないシュテルン。

「よく居るんだよね〜力学的に物事を覚えて肝心なもん鍛え忘れる奴・・・」

「肝心なもの？」

シュテルンの言葉に飛鳥は自分の胸を指した。

「な！」

「・・・何で根性論なんてあると思う？・・・上っ面だけの技術だけじゃない・・・負けて・・・踏みつけられて・・・ボロボロになっても立ち上がる・・・強靱な精神力を身に付けるため」

「それにな・・・」

力が付け加える。

「・・・無駄なもんは無駄じゃねえんだよ!!」

合法的効率的にしか物事を考えたことのないシュテルン。

「うああああああああああああああ!!」

「!!」

シュテルンは楓のダグテクターのマスクを破壊した。その時楓の身体から3つの光が現れ一本の巨大な剣になった。

「これ・・・ムゲンブレード・・・」

ムゲンブレードから何かのイメージを感じ取る楓。

「くそおおおおおおお!!」

シュテルンが殴りかかったその時楓の身体を風が包んだ。楓の髪がなびきムゲンブレードを構える楓。

「蔓烈風!!」

「くおおおおおおお!!」

楓がムゲンブレードを振り下ろすとシュテルンの身体を風が包み込み身動きを取れなくした。

「が・・・」

「はあー!!」

「うあああああああああああー!!」

身動きが取れなくなったシュテルンを両断する楓。

「・・・つまんねえ仕事だぜ」

楓たちがゾーマの相手をしている内に催眠音波発生装置を破壊した大地。

装置が破壊されたことにより催眠音波の効力が薄れ先に回復した人たちは除去音波を流し自体が丸く収まった。

戦いが集結し対峙する6馬鹿と組長。

「いや 楓にこんな弟が居るなんて〜このこの〜」

大地の頭をグリグリするサイモン。

「うっせえな喋るんじゃないやねえよガキ」

「こらあああー!!もっと愛想よくせんかい!!」

と言ってはやてに拳骨食らう大地。

「うっせんだよブス!!」

「大地！」

バチコーンと大地を殴る楓はすぐさまはやてに土下座体制に入った。

「すみません！すみません！ウチの弟が失礼しましたのでとにかく私が謝っておきます！！すみません！すみません！」

ととにかく謝りまくる楓。流石のはやても啞然としている。

「な・なんか超親しい光景のような」

「あんたが日頃はやてに土下座させてるのみて真似したんじゃないの？」

と飛鳥の突っ込みに黙る力。

「いや 楓ちゃんが日頃やってることに比べたらこの程度」

「てめえ！」

はやての言葉を聞いた瞬間今度は大地が楓を殴りはやてに土下座体制に入った。

「すみません！すみません！ウチの馬鹿姉が何やったか知りませんがとにかく俺が謝っておきます！！すみません！すみません！」

と言って謝りまくる大地。はやては物凄くドン引きしている。南力に関わった人物はこの謝り方が定着したようだ。

すると

「うるせえ！てめえら！！」

北斗が楓たちに向かって発砲し丸く収まった。

## 第十話 独りの戦い（後書き）

とりあえず大地は何かを感じ取ったみたい。え？ハイウェイに暴走トラック？よし！ダグオン！出勤！え？シズマ？スバル？力を貸してくれるの？

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 相棒

私に相棒が出来た！



## 第十一話 相棒

夜中のハイウェイ

「へいへいへい!!」

暴走族がハイウェイで集団暴走行為をしている。

すると

「ん?うわあああ!!」

背後から来たトラックが暴走族に襲い掛かった。

第十一話 相棒

トラックー星人登場

霧島園

「うわああ!消防車だ!!」

子ども達が過去から来たガードファイヤーに懐いていた。

「ねえねえ!梯子出して!!」

「違うよ!サイレンサイレン!!」

『ああ！やってやるから静かにしろって』

と言って風太郎達の面倒見るガードファイヤー。

「人気だね〜ガードファイヤー」

「うん！やっぱり消防士って子供の憧れの仕事なのかな〜」

とジュース飲んでいるスバル。

「いやはや悪いね〜わざわざ過去から来てもらっちゃって〜」

「良いつて良いつて〜他でもない楓の頼みだし」

と楓の言葉に笑っているスバル。実は手が足りないと言って非番だったスバルにスクランブルを頼みガードファイヤーも面白そうだからという理由で付き合ってくれた。

（それにしても羨ましいな〜相棒か〜）

スバルとガードファイヤーのコンビが正直羨ましい楓。そして以前自分のことを助けてくれた少年・シズマの事を思い出した。

（そつえばあれからどうしたんだろ？仲間になってくれないかな〜）

と思っていると玄が新聞を差し出した。

「ん？玄さん？」

「最近物騒だよ」

楓とスバルが新聞を読む。

ハイウェイに暴走トラック登場！暴走族数名重軽傷を多数。

「このハイウェイって確か・・・」

「ああ、ウチの近所だ・・・子ども達が怖がらなければいいんだが」  
玄の言葉に楓達は出勤するのだった。

「確かこの辺だよな？」

「そうだね」

ハイウェイをストームバンディットでパトロールする楓とガードフ  
アイヤーに乗り込みパトロールするスバル。

なお通信は管理局に知られないためにダグコマンダーで行っていた。

「悪いねスバル。折角の非番なのに」

「大丈夫だって！子ども達のこと心配だし。それに私達コンビでし  
よ！」

「ははありがとう」

いつぞやのグレート合体のとき以来何となくコンビ関係が出来上がってしまった楓とスバル。

『おいスバル！前』

「？」

しばらく走っていると目の前に巨大なバイクが停まっていた。

「「ぎゃあああああああああ！！」」

とりあえずブレーキをかける楓たち。

『バツキヤロー！あぶねえじゃねえか！！』

とバイクに文句を言うガードファイヤー、楓はそのバイクに見覚えがあった。

「ん？お前」

「シズマ！！」

バイク、モトヴァリオンからひよっこり顔を出すシズマ。

「え？何々？楓の彼氏？」

「んなんじゃねえ！！」

スバルの言葉に激怒するシズマ。楓の異性の同世代の知り合いなどシズマぐらいしかいない。

「シズマどうしたの？」

「ああ。最近この辺りで物騒なことが起きてるってんでな」

ぶつきら棒に言うシズマ。何だかんだ言って放っておけないようだ。

「ねえシズマ協力して！」

「は？何でだよー！」

「まあ〜袖摺りあうも他生の縁っていうし。私たちコンビじゃない  
」？  
」

「て！いつ俺がお前の相棒になった！！」

というシズマ。スバルとガードファイヤーはケタケタと笑っていた。

結局利害一致ということでシズマも一向に加わった。

「いや〜こつやってツーリングもいいね〜」

「呑気にしてんじゃねえ」

「けどこつやってドライブも良いよね〜」

『だな』

と暴走トラックが現れるまでドライブを楽しむ一行。別働隊のエアースチームとブロンゾンも同じだった。

「?目の前のトラックなんか変じゃない?」

スバルが目の前のトラックに疑問を抱いた見るとモンスタートラックのような巨体だった。

『ちょっと前見てみるか』

ガードファイヤーが回り込もうとサイドにたつたしたその時。

「「「!」」」

目の前のトラックには人が乗っていなかった。そして逆走しストームバンディット、モトヴァリオンを跳ね飛ばした。

「ぐー!」

「ああ!」

「楓!シズマ!」

打ち付けられる楓とシズマにスバルがガードファイヤーから降り慌てて駆け寄る。

「大丈夫?」

「くそ!なんなんだあいつ?」

とシズマの言葉にガードファイヤーが。

『あいつ・・・トラッカー星人!!』

「「「トラッカー星人?」」」

そのまんまの名前に楓達は。

「追っよ!!」

「「おっ!!!!」」

と楓はダグテクターをスバルはバリアジャケットを装着しトラッカー星を追うのだった。

一方

『全く・・・ウチのリーダーも人使い荒いよな』

『「「うんうん」」』

ラリーエースの言葉に頷きながらハイウェイをパトロールしている勇者達。

『ん?っおおおおお!!』

ラリーエースの目の前をトラックが通り過ぎた。

『バキヤロー！アブねえじゃねえか！！「ちよつとちよつと！」あ？』

ラリーエースが振り向くと楓の姿が・・・

「うわあああ！！どいて〜」

『ぐぼっ！』

正面から来た楓はラリーエースを避けられずストームバンディットでそのまま乗り上げてしまう。

『ぐがが・・・お「悪い！」がうあああああ！！』

シズマも避けきれずモトヴァリオンで乗り上げてしまう。

『てめえら！！いいかげん「ごめえん！！」「悪い」あつっつ！！』

スバルのマツハキャリバーとガードファイヤーに乗り上げられてしまうラリーエース。

『おい・・・大丈夫か？』

ブロンゾンが引かれたラリーエースに聞いてみると・・・

『おつおめえら！！戦じゃあああああ！！！！』



『『おう！！』』

『本場の走り屋の腕みせてやるぜ！！』

パリラパリラでも鳴らしそうな勢いで楓たちを追いかけ始めるエースチーム。

『暴走族か？俺ら・・・』

ブロンゾンも後を追うのだった。

「????？」

スピードを徐々に上げていくトラッカー星人。

「おい！なんであいつ走ってるだけなんだ？」

シズマの言葉に楓達は考える。

『野郎！とにかく広いところにおびき出すんだ！！』

「じゃあこの先が廃墟のはず！！」

と言って廃墟に着くまでトラッカー星人追い回す楓たち。

しばらく走ると廃墟まで辿り着き戦闘体制に入った。

すると

『ウゲエエエエエエ！！』

トトラックー星人は形状記憶変形を開始し巨大な化け物になった。

「なんだありや！？」

「やばそう！！」

シズマとスバルはトラックー星人に向かって構える。

そして

『うおらあああああ！！』

怒り狂ったラリーエースも登場した。勇者達がそろい合体シークエンスに入った。

『疾風合体！』

ダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエ！！』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。腕が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン！！』

ストームダグオンが降り立つと物凄い風が巻き起こった。

『リーダー！』『』『合体命令だ！！』『』『』『』

『ようし！！ブレイブアップ！！ブロスガー！！エースレジェンド  
！！！』

『Bアーマー！！！！』

ブロンゾンのコールと共に空から巨大なジェット機が飛来した。

『行くぞ！！！！』

Bアーマーが各パーツになるとブロンゾンの身体に装着される。

『青銅合体！ブロスガー！！！！』

『』『』『』『』『』『』『』『』『』

エースチームが空に舞い上がる。

『はあああああああ！！！！』

ソニックエースが両腕両足に変形し

『おりゃあああああああ！！！！』

アクセルエースが頭と翼に変形し

『でああああああああ！！！！』



「たあ!!」

スバルが胸部に乗り込むとゆっくりと胸部が閉じ同時に竜の顔が胸に現れた。

<CONNECT>

瞳が淡い緑に光る。

『メタルウウウウウ！ダグオン!!!!!!』

降り立つメタルダグオン。

『ブブブ？（何故胸に竜の顔が？）』

音声の話せないトラックー星人の声を聞いたメタルダグオンは。

『それはね・・・かつこいいからだよ!!』

（）（そのノリはいつまで続くの？）（）（）

お決まりの台詞にえ？つとなる一同そして。

「俺を忘れんな!!」

シズマがブレスを起動させる。

「セイバアアチェンジ!!」

シズマの叫びにスカイソニック、ランドファイヤー、マリンスピー

ダーが発進され各パーツに変形した。モトヴァリオンを中心に合体していく。

『セイバアアヴァリ！オン！！』

完成したセイバーヴァリオン。

『は！！』

『『『うおお！！』』』

『『『あああああ！！』』』

全員の斉射撃が繰り出されトラックー星人に浴びせられる。

凄まじい爆炎が起こる。

『やったの？ぐ！！』

爆炎から出てきたトラックー星人に吹き飛ばされるストームダグオン。

『リーダー！ぐあ！』

『があ！！』

エースレジェンド、ブロズガーも吹き飛ばされる。

『く！ジャッククロッド！！』

ジャックロッドから鎖が発射されトラッカー星人を掴み取るがパワーが足りない。

『ぐー！』

『何やってんだ！？』

エースレジェンドもジャックロッドを掴み取りトラッカー星人を押しさえつける。

『パワーなら私！！』

メタルダグオンがトラッカー星人を羽交い絞めにしようとするが暴れるトラッカー星人に吹き飛ばされてしまう。

『うああああ！！』

『スバル！この野郎！！』

ガードファイヤーがトラッカー星人を攻撃するが全く効いてない。

トラッカー星人がガードファイヤーに一斉射撃をすると

『ぐー！！』

『スバル！！』

メタルダグオンが腕をクロスさせ防いだ。

『ぐー・・・あ・・・』

メタルダグオンの腕のダメージが大きい。

『このおおー!!』

ストームダグオンがトラッカー星人を殴りつけるがパワーが大きい  
トラッカー星人は吹っ飛ばしてしまう。

『うわああああ!!』

打ち付けられるストームダグオン。

『のやるうー!!』

セイバーヴァリオンも砲撃するがトラッカー星人には通用しない。

『ぐあああ!!』

ジャックロッドを振り回され吹っ飛ばされるブロスガーとエースレ  
ジェンド。

トラッカー星人は吹っ飛ばされたストームダグオンに詰め寄った。

『うー!!』

トラッカー星人がストームダグオンを襲おうとしたその時。

『くー!!』

セイバーヴァリオンがラダーブレイドでトラッカー星人を受け止めた。



『シズマ・・・どうして?』

ストームダグオンの言葉にシズマは・・・

『決まってるんだろ!片方がダメならもう片方がフォローする!!それが相棒って奴だろ!!』

嘘偽りのないシズマの言葉。

『・・・相棒・・・私が』

『おう!!』

セイバーヴァリオンと並び立つストームダグオン。

『くう!!負けてられない!!』

立ち上がるメタルダグオンしかし腕の状態が芳しくない。

『スバル!無茶するな!その腕じゃ!』ガードファイヤー!合体だ!  
『は!?!』

いきなりの無茶ブリにガードファイヤーは・・・

『おもしれえ!その賭け乗ったぞ!!』

『行くよ!』フォームアップ!!』

メタルダグオンの両腕が折りたたまれ背中に回るとガードファイヤ

ーが腕になりメタルダグオンの腕のあった部分に合体した。

『『二体合体！！』ガアアアドメタルダグオン！！』

メタルダグオンの意識にガードファイヤーが宿った。

『こいつはすげえ行くぜ！ガードデイスチャージャー！！』

ガードメタルダグオンのホースから放水される。トラッカー星人の足が止められる。

『メタルトンファー！！』

ガードメタルダグオンの意識がスバルに切り替わり一撃を見舞った。そこに隙が出来た。

『ジャッククロッド！源流舞！！』

ブロズガーの舞がトラッカー星人のダクトを破壊した。

『レジェンドライフル！！タアアボシューティング！！』

エースレジェンドの銃撃がタイヤを破壊した。

『ラダーブレイド！！』

『ムゲンブレード！！』

飛び上がったセイバーヴァリオンとストームダグオンが剣を構えた。

『ヴォルテックストリーム!!』』

両者の一閃で両断されるトラックー星人は爆発した。

降り立つ勇者達。

戦いが終わり

「シズマ」

「うっぜえ!! てめえ懐くんじゃね!!」

じゃれ付く楓をウザそうに見るシズマ。そしてスバルも呆れて見ていた。

「まったまたシズマ」

「だから懐くんじゃねええ!!」

シズマの怒声が響いた。

楓はよっぽど同世代の友達が出来たことが嬉しかったらしい。

(春が来た・・・楓に春が来た!!)

と思うスバル。

しかしここで注意書きが

楓はロマンスでフォーリンラブはありません。BY作者

つまり楓は恋愛のない主役のようです。

## 第十一話 相棒（後書き）

いや〜やっと同世代の友達が出来た〜え？この子達誰？ザコス星人が町で大暴れ！！何？この金ぴかの車・・・え！！金ぴかの恐竜まで現れた！！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 黄金勇者との出会い  
あなたもレジエンドラの勇者？

## 第十二話 黄金勇者との出会い

小学校放課後

「よう！風太郎！」

「お！タクヤ！」

風太郎のクラスメイトのタクヤが風太郎に話しかけてきた。

「なあ！お前んちに遊びに行つて良いか？」

「え？別に良いけど・・・またみんなの相手させられるぞ」

「いや～なんか綺麗な姉ちゃんが来たつて言うからさ～」

と鼻の下伸ばすタクヤ。

「んまあ・・・顔だけの姉ちゃんだけだな」

「ひでえな」

風太郎の批評に汗を流すタクヤ。

すると

「お～いタクヤ～」

「そろそろ帰ろうよ」

「おうちよつとま・・・!!」

カズキとダイがタクヤを呼んだ瞬間学校に地震が起こった。

## 第十二話 黄金勇者との出会い

「くくく」

楓が家事労働に勤しんでいる。

「えつとく大地が持ってきたお婆ちゃんのレシピだところどころ  
ころ」

楓がレシピ通りに料理していたその時だった。

「ねえく顔だけの楓姉ちゃん」

ユリカが楓を呼んだ。

「ん？なに？」

「風太郎兄ちゃんが帰ってこないんだけど」

「え？」

時計を見ると4時を回っていた。

「おかしいな。そろそろ帰ってくる頃なんだけどな」

と言ってエプロンつけたまま表に出てみる楓。

『リーダー！』

「ん？ラリーエース？」

『不味いぜ！』

ラリーエースが楓にモニターを見せた。モニターには空間湾曲が表示されている。

「なに？どうしたの？」

『さっき索敵したらキャッチしちまったんだよ』

「ここって・・・風ちゃんの学校じゃない！！」

楓はエプロンを外しヘルメットを被った。

「みんな！シズマに連絡！」

『了解！』

「私先に行く！！」



ブロンズンに後を任せ楓はストームバンディットで現場に向かった。

「うわ〜」

現場に到着すると禍々しい空間が構成されていた。

すぐに分析する楓。

「これは・・・ザコス星人のザコス空間？」

小学校に入る楓。

「風ちゃんの教室は・・・こっち？」

楓が角を曲がると・・・

「!?!」

入り口に戻ってしまおう。

「……嘘」

楓が別の道を行くがまた別の場所に到着してしまおう。

「空間が捻じ曲がって繋がってるの……トライダグオン!!」

楓がダグコマンダーを起動させると翡翠色のダグテクターが構築されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ストームカエデ!!」

楓はサーチすると捻じ曲がった空間の場所を特定した。

「てい!!」

「ダグオン!!」

楓の登場に喜ぶ風太郎。

「風ちゃん大丈夫!？」

「うん!!」

「何だこの姉ちゃん？」

タクヤが楓のことを不審がる。

「話した後!捕まって!!」

「わかった！」

「ああ！」

風太郎、タクヤが楓にしがみ付いた。

「いつせえのっせ！！」

楓が空間を抜けると校庭に出た。

「タクヤ君！」

「タクヤ！」

ダイとカズキが駆けつけた。

「お前らどうして！？」

「心配だから来たんだよ！！」

と言ってダイが指差したのは金色の車。

（最近の小学生は車乗るんだ）

あんたの考えはズレています楓。その時だった。

「！！！」

地面から次々と現れるザコス星人。あっという間に囲まれる。

『ジシャアアアアアア!!』

「旋風拳!!」

楓の竜巻がザコス星人を吹き飛ばす。そしてストームシューターを風太郎に渡した。

「ダゲオン?」

「これ使って逃げて!」

「ええ!!」

無茶振りをされる風太郎。そして楓に次々とザコス星人が襲い掛かる。

「く!ストームバンディット!!融合合体!!」

ストームバンディットが人型に変形すると楓と一体化し瞳が淡い緑に光る。

『ダゲストーム!!』

「どっひゃ〜」

「あの人口ポットになっちゃった」

タクヤとダイは驚いている。

『ギシャアアアアアア！！』

『ストームディバイダー！！』

ダグストームの技に吹き飛ばされるザコス星人の群れ。しかし次々とザコス星人は現れる。

その時

「待て待て！！」

黄金の車のボンネットに乗ったタクヤ、カズキ、ダイ、風太郎がダグストームを援護するべくザコス星人に向かうがザコス星人の攻撃に吹き飛ばされてしまう。

「……うああああああ」「……」

『みんな！うぐ！！』

気を取られるダグストームはザコス星人の攻撃を受けてしまう。

それを見たタクヤが叫んだ。

「くそ！こうなったら！！行けドラン！！」

『心得た！！』

タクヤの叫びに黄金の車は変形しロボットになった。そしてダグストームに襲い掛かるザコス星人を蹴り飛ばした。

『黄金剣士！ドラゴン！見参！！』

『黄金剣士？』

ダグストームの前に降り立つドラゴン。

『竜牙剣！稲妻斬り！！』

ザコス星人達が次々と剣の錆になっていく。

『す、すい』

ドラゴンの力に圧倒されるダグストーム。

『負けてられない！！ホイールクラッシュ！！』

タイヤを投げつけるダグストーム。そしてザコス星人が一掃された。

『大体片付けたようだ』

『そうですね』

『！！！！』

ドラゴンとダグストームが安心した瞬間地震が置き地面から円盤が現れた。

『あれは！！』

『ザコス星人の円盤！！』

ザコス星人円盤ではダグストームとドランを抹殺するべく攻撃を開始した。

「「「うわあああ」「」「」

まごまごしていれば風太郎たちの命が危ない。早期決着を試みるダグストームとドラン。

『疾風合体！』

ダグストームを中心にガードクイーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエ！』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。腕が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン！！』

ストームダグオンが降り立つと物凄い風が巻き起こった。

『ゴルゴオオン！！』

ドランの叫びに大地が割れ黄金の恐竜が現れた。

『ゴルゴン！黄金合体だ！！』

『グオオ!!』

ドランの叫びにゴルゴンが人型に変形する。

『つおおおおおお!!とお!!』

ドランがゴルゴンに飛び込むように飛ぶと四角の宝石のような姿になりゴルゴンの胸に納まった。ゴルゴンの方向と共に口に顔が現れる。

『黄金合体!ゴルドラアアアン!!』

ザコス星人円盤の前に降り立つ黄金勇者。ザコス星人がゴルドランに襲い掛かる。

『スーパー竜牙剣!!ぬおおおおおお!!』

ゴルドランは腰からスーパー竜牙剣抜きザコス星人円盤のミサイルポットを次々と切り捨てていく。

『つおおおおおお!!』

ストームダグオンのキックが円盤に炸裂した。円盤はストームダグオンに狙いを定めようとする。ゴルドランが攻撃し円盤はよろける。

トドメの体制に入った。

『ようし!ムゲンブレード!!』

ストームダグオンがムゲンブレードを構える。



『いくよ！ゴールドラン！！』

『心得た！！』

ザコス星人の円盤に向かって跳躍するストームダグオンとゴールドラン。

『ムゲンブレード！！蔓烈風！！』

『スーパー竜牙剣！一刀両断斬り！！』

Xに両断される円盤は爆発し散っていった。

「いや、まさかレジエンドラの勇者にお目にかかれるなんて」

『私もまさかダグオンに逢えるとは思わなかった』

霧島園に向かう楓はドランの存在に驚いていた。

「到着」

「着いた着いた！」

と言ってタクヤがドランから出てくるが楓に止められる。

「ちよい待ち」

「なんで？」

タクヤを止め楓は庭に石ころを投げた。

グシャー！！

地面の中からせり出てきた巨大な虎バサミ。

「な・・・なんでこんなもんあんの？」

「子ども達が怖がらないように泥棒避けに罾仕掛けておいたの」

見た目があまりにもえげつない罾にタクヤ、カズキ、ダイが風太郎に振り返ると・・・

「な・・・顔だけの姉ちゃんって言っただろ」

「」「コクコク」「」

「んじゃいつくよー」

この後タクヤ達は楓が『趣味』で仕掛けた罾を掻い潜りながら霧島園に到着するのだが帰るのに苦労したらしい。

## 第十二話 黄金勇者との出会い（後書き）

いや〜まさか黄金勇者に会うとはな〜え？何？宇宙警察ブレイバ  
ズ？また勇者が着てくれたの！！いやった〜え！？電気ビリビリの  
宇宙人が来たの！！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩

宇宙警察ブレイバース

さっつ〜土地買わないと〜

## 第十三話 宇宙警察ブレイバース!

宇宙にて

4つの光が地球を見ていた。

『ここが地球か』

『あの電気宇宙人ここに逃げたって聞いたで・・・』

『ダグオンも活動している言うしな』

『ささつとけり付けようぜ』

そう言つと4つの光は地球に降り注がれた。

### 第十三話 宇宙警察ブレイバース

霧島園

「あれ?風太郎兄ちゃん!『顔だけ』の楓姉ちゃんは?」

「え?『顔だけ』の楓姉ちゃんなら買出しに行ったぞ」

霧島園の子ども達にとってはもう楓は『顔だけ』の存在になってしまったようだ。

街中

「うわ〜行けない！すっかり遅くなった!!」

ストームバンディットで急いで帰ろうとする楓。信号待ちしている。

「イライライラ」

そして信号が青になり楓がストームバンディットを走らせると・・・

「え?」

突然信号が変わりパニックになった。

「うおりゃあああ!!」

咄嗟にジャンプする楓。

「ふう〜決まった・・・さて帰るか!」

再びストームバンディットを走らせるが・・・

「ええ・・・」

踏切事故で踏切が通れない。

「どつしよ……これじゃ帰れないよ」

ふと町の案内板を見ると……

「ええっと今ここに居るからこうやって一直線に道なき道を行けば……」

地図を一直線でなぞる楓。

「3分で帰れる……ふ……私天才!」

ピンポン

あなたは馬鹿です

「えっほえっほ!」

何処にそんな体力があるのかストームバンディット担ぎ上げて歩道橋をわたり……

「失礼します」

民家の庭を突っ切り……

「しいし」

学校を不法侵入し……

「し」

町外れの廃工場を走っていると・・・

「ん？」

何故か廃工場から電撃が見えた。楓が恐る恐る除いてみると稲妻模様の宇宙人の姿があった。

「あれは宇宙人！こんな時に・・・どうしようかな・・・」

ここで仕掛けるか応援を待つか・・・宇宙人が楓に気づき楓に電流を浴びせた。

「ぐ・・・痺れた・・・30秒でケリ付けちゃう！」

と言って楓が手をかけたのはダグコマンダーではなく・・・

「うおりゃあああああああああああああ！！！」

その辺に違法駐車してあったバイクだった。

「せえの！！！」

バイクを振り回し宇宙人をペシャンコにする楓。力譲りの馬鹿力のようにです。

『ぎいいいいい！！』

「しつこい！！！」

バイクで何度も宇宙人をド突きまくる楓。はつきりいって宇宙人が

可哀想です。

「うおりゃあああああああ!!」

そのままバイクを叩き付け爆発させると宇宙人は木っ端微塵になっ  
た。

「ふ〜・・・え?なんかの電波が・・・正義の味方のクセに公共の  
バイク壊していいのか?良いんだもん!こんな所に違法駐車してい  
るのが悪いんだもん!」

そのままストームバンディットに跨って廃工場を後にする楓。

霧島園

「ただ今」

「あ!顔だけの楓姉ちゃんお帰り」

「あははは・・・」

もうこの際どういわれようと知ったこっちゃんない楓。

「姉ちゃん腹減ったよ」

「はいはい今作るから」

そういって楓は台所に立つのだった。



一方

「ギギギ」

楓が戦った廃工場で先ほど倒した宇宙人が蘇り電力を吸収し始めた。

「ふ〜んふ〜ん」

『おいリーダー俺は自家用車じゃねえんだぞ・・・』

ラリーエースで買い物に向かう楓。ファミリーカーのブロンズンは子ども達の相手のため手が離せないためラリーエースに白羽の矢が立った。

「良いじゃないの旅は道連れ世は情け〜」

その時

『!!--』

ラリーエースが何かに気づき急ブレーキをし楓は頭を打った。

「痛痛た・・・何でよ?」

『リーダー!あれを見ろ!』

「え？」

ラリーエースの指した方向を見た楓。

「信号が・・・全部点滅してる？」

信号機が狂いだした事に驚くと・・・

「あれは・・・」

巨大になった宇宙人が現れ楓が驚いた。

「あいつ倒したはずなのに・・・」

『グズグズすんなリーダー！チェンジ！』

ラリーエースがチェンジし楓がダグコマンダーに手をかけた。

「トライダグオン！！」

翡翠色のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクが覆われる。

「ストーム・・・カエデ！！」

楓はそのまま融合合体をすると宇宙人に対峙する。

『行くよ！ラリーエース！』

『おっ！』

『 ストームディバイダー!!! 』

『 ラリーパルサー!!! 』

ダグストームとラリーエースの攻撃を受ける宇宙人だが・・・

『 え? 』

『 効いてないのか? 』

宇宙人はフル充電状態であるため中途半端な攻撃は効かなかった。

『 ギシャアアアアア!!! 』

『 ぐ!!! 』

『 う!!! 』

宇宙人から電気のチェーンが放たれダグストームとラリーエース縛り上げる。引き千切ろうとするが電気のチェーンは全く折れる心配がない。

その時

『 待て待て待て!!! 』

『 !!! 』

突然響いた声にダグストームが振り返ると・・・

トラック、新幹線、パトカー、ドリルタンクが接近してきた。

『なに？え？』

ビークルが宇宙人に向けて攻撃を繰り返して宇宙人を怯ませる。

『なに！？』

『チエエンジン！』

トラックが変形し人型になった。

『俺はビッグブレイバー！お前がダグオンか？』

『チエエンジン！』

新幹線が変形し人型になった。

『ワイはライナーブレイバー！ボケさせたら宇宙一や！』

『チエエンジン！』

パトカーが変形し人型になった。

『俺はスターブレイバー！この星に来たブレイバーズの一人だ！』

『チエエンジン！』

ドリルタンクが変形し人型になった。

『俺はドリルブレイバー……まあ……応援に来てやってってとこだな』

膝を突くダグストーム。そして

「セイバアアチェンジ！」

助っ人に来たシズマのブレスが輝くとスカイソニック、ランドファイヤー、マリンスピーダーが発進され各パーツに変形した。モトヴアリオンを中心に合体していく。

『セイバアア！ヴアリ！オン！！』

完成したセイバァーヴアリオン。

『……シズマ』

『ここは俺に任せる！』

『よろしく』

ダグストームがシズマにバトンを渡した。

『行くぜ！』

『『『『『おっ！！』』』』』』

ラリーエース、ビッグブレイバー、ライナーブレイバー、スターブレイバー、ドリルブレイバーが一斉射撃に入った。

『ラリーパルサー!』

『コンテナキャノン!』

『スターマグナム!』

ラリーエース、ビッグブレイバー、スターブレイバーの射撃が繰り出され宇宙人が怯むと・・・

『ライナーセイバー!』

『ドリルアックス!』

ライナーブレイバー、ドリルブレイバーの一閃が宇宙人にヒットし・・・

『ラダーブレイド!』うおりゃあああああああ!』

シズマの一閃が宇宙人を両断した。爆発する宇宙人にシズマをラダーブレイドを納めるのだった。

「ブレイバー?」

『ああ!俺達は宇宙警察!ブレイバー!』

ブレイバーズを代表しビッグブレイバーが楓と話した。

『宇宙警察機構のダグオンがまた活動を始めたからって聞いてな・・・俺達も助っ人に来たってわけだ!よろしく!』

ブレイバース一同が楓に敬礼をするが・・・

(うわゝ大きい友達増えたなゝ)

霧島園に増えるロボット達にちよつと考えるのだった。

ブレイバース

宇宙警察の新米4体のチーム。任務により地球にやってくる。4体とも仲はいい

ビッグブレイバー

トラックから変形するブレイバースのリーダー。性格は真面目な熱血漢。武器は背中のコンテナが変形したコンテナキャノン

CV：島田敏

ライナーブレイバー

新幹線から変形するブレイバースの一人。なぜか関西弁。性格は芸人でつまらないギャグをよく言う。武器はライナーセイバー

CV：結城比呂

スターブレイバー

パトカーから変形するブレイバースの一人。性格は几帳面で真面目、またかなり頑固。武器はスターマグナム

CV：板東尚樹

ドリルブレイバー

ドリルタンクから変形するブレイバーズの一人。性格は適当でよく  
スターブレイバーに怒られている。武器はドリルアックス

CV：巻島直樹



### 第十三話 宇宙警察ブレイバース！（後書き）

突然ゲームの世界に着た私達。こんな所までゾーマがはびこっているようとは・・・え？何あの巨大な新幹線・・・勇者特急隊？あれって！！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 嵐の勇者あらわる！

正義の力が嵐を呼ぶぜ！

## 第十四話 嵐の勇者あらわる！

第十四話 嵐の勇者あらわる！

霧島園

「　　」

霧島園の校庭にて楓が趣味で作ったドリル特急を点検していた。

「いや、ミツキさんのところから点検で無断で持って来ちゃったけど、まっいつか」

楓は趣味で何でも作ってしまう。フィギュアから自転車まではたまたま廃棄物から自作パソコン、またまた部品屋から発注したパーツでドリル特急まで自作してしまう。

「楓さんこの雑巾でここ拭けばいい？」

「うん・・・え？」

点検していた楓の隣に居たヴィヴィオ。

「え？楓さん？ウチのヴィヴィオちゃんじゃない・・・まさかユウさんとこの・・・」

「うん」

「どうやらユウのところのヴィヴィオがドリル特急に密航してきたようだった。」

「すまねえ楓」

「の！ノアちゃん！！」

「ヴィヴィオの髪の毛からひょっこり出てきたノア。カムフラージュのようだ。」

「……というより楓勝負じゃああああ！！！！」

「もげげげ！！」

「フルサイズになったノアはここであつたが百年目と言わんばかりに楓に襲撃するのだった。」

「で？てめえ何しに来たんだよ」

「楓の保護者兼相棒のシズマがノアを摘み上げている。」

「うるせえ離せ！楓と決着つけるんだ！！今度こそあたいが勝つんだ！！！！」

「うるっせ！黙れ！黙んねえと口にカートリッジ突っ込むぞ！」

「シズマの言葉を聞いたヴィヴィオが……」

「え？やってみたい！！」

「馬鹿止める！！」

ノアの口にカートリッジ捻じ込んでみるヴィヴィオだった。

「……そういえばはやてさんがラインに同じ事やってたような・  
」

そして

園のモニタールームで『勇者特急マイトガイン』というゲームをや  
つてる楓。

「うお！マイトガインじゃねえか！」

「あはは〜これを参考にして頼まれてたマイトカイザー作っちゃっ  
た〜」

「……ガキが」

「あんだと！！」

シズマの言葉が気に入らないノア。

するし

「！！」

テレビに何かの魂のようなものが宿った。

「ジエケケケケー!!」

テレビの画面が鳴るとその場に居た楓、シズマ、ノア、ヴィヴィオがテレビに飲み込まれた。

『これは!』

表に居たドラン、ドリル特急もテレビの中に吸収されてしまった。

「どこだここは!?!」

気がつくとも見知らぬ町に立っている楓たち。

「なんで都合よくビークルは有るんだかね・・・」

自分達のビークルがある事に驚くシズマ。

「おいヴァリオンどうなってんだこれ?」

『恐らく・・・さっきのは宇宙人の思念体・・・それがテレビに入ることにより我々をこの世界に連れてきたようだ・・・』

ヴァリオンの言葉に考える楓。

「まさかここって・・・」

「おい!楓何処行くんだよ!」

楓が駆け出すとノアが後を追った。

「やっぱり」

「どつという事だ？」

「ここはヌーベルトキオシティ」

「てことは・・・ここはゲームの世界か？」

勘付くノアすると何やら人々が逃げてきた。何やら尋常じゃない人たち。何のことかと思いついた楓たちが振り返ると鎧武者？どこその時代遅れの将軍が居た。

「だあつはっはは！！」

「え？シヨーグン・ミフネ!？」

楓が見たのはマイトガインの敵キャラクター・シヨーグン・ミフネだった。

「かかれ！！影の軍団！！」

ミフネが手を翳すと次々と降り立つ忍者たち。取り囲まれる楓、シズマ、ノア。

忍者が襲い掛かったその時・・・

「トライダグオン！！」

楓がダグコマンドーを起動させると翡翠色のダグテクターが装着さ

れフルフェイスのマスクで覆われる。

「ストーム・・・カエデ!!」

楓が忍者の剣を受け止め、シズマも木刀を構え忍者を叩き付けノアも殴り飛ばした。

「お!? 忍者?」

「ていうか何でこいつら攻めてきたんだ?」

「黙ってねえでやれ!!」

次々と襲い掛かってくる忍者に応戦する楓たち。その時

「!!!!」

レーザーが放たれてくると咄嗟に避ける楓達。上空から・・・

「ゾーマの戦艦?」

思念体のゾーマの戦艦が攻めてくると・・・

『ここは私が! チェンジ!』

ドランが人型に変形すると竜牙剣で戦艦から発進されたロボットを斬った。

「やるな! 貴様ら!」

ミフネの攻撃を受け止める楓すると思つた。

「この人普通の人間だよな？それじゃ私ダグテクターつけてるの卑怯なような・・・まっいつか！勝てばいいの！！」

「貴様それでも正義の味方か！？おのれ！！」

ミフネが何かを呼び出した。

すると

「ロボット？」

『貴様ら！踏み潰してやる！！』

ミフネがロボットに乗り込むと楓たちを踏み潰しにかかった。

「やたらめつたら攻撃なんて！！」

「やるぞ！！」

合体制に入る勇者達。

『疾風合体！ストームダグオン！』

『セイバアアア！ヴァリ！オン！！』

『黄金合体！ゴルドラアアン！！』

三体の勇者が降り立つ。



「ノア！私達もマイトカイザーで！」

「おう！」

『ダメ！この世界マイトガインの世界だから多分ダメかも！！』

「「ぶっぶっ！！」「」

ぶつたれるノアとヴィヴィオ。

『ラダーブレイド！！』

『ムゲンブレード！！』

セイバーヴァリオン、ストームダグオンの攻撃がミフネのロボットに突き刺さるが全く効いてない。

『なに！？』

『固い』

『むんぐあああああああ！！』

『『うあああああああ！！』』

ミフネに吹っ飛ばされるストームダグオンとセイバーヴァリオン。

『うおおおおおおお！！』

上空からゾーマ艦に攻撃を食らうゴールドラン。

『シヨルダーバルカン!!』

応戦するが空中に居るゾーマ艦に力を発揮しきれないゴールドラン。

『く!せめて空影がいれば!ぐ!!』

シャワーのようなビームがストームダグオン、セイバーヴァリオン、ゴールドランに降り注がれ膝を突いてしまう。

『何この火力・・・ぐ!!』

「おい!楓!しっかりしろよ!」

『他愛もない!』

ノアが叫ぶ。ミフネも楓達に止めを刺そうとしたとき。

汽笛の音が・・・

『ん?』

ストームダグオンが振り返ると何かが迫ってきた。よく見ると・・・

『新幹線?』

『馬鹿な!街中に新幹線!?!』

ゴールドランも驚いている。新幹線は猛スピードでロボットに向かっ

ていくと・・・

『チェンジ!!』』

ロボットに変形した。

『貴様らゾーマだな!?!』

「え?嘘・・・あいつ・・・ガインじゃねえか!?!」

ガインの登場に驚くノア。そしてもう一台新幹線が・・・

『え?飛行機になった!?!』

新幹線が飛行機マイトウイングに変形した。

『ガイン!』

『舞人!』

ガインがマイトウイングに向かって叫んだ。

『ダグオン?・・・ゴルドラン?・・・セイバーヴァリオンまで・・・  
一体?』

何かを感じ取る舞人。

『ガイン!援護だ!』

『おう!ガインショット!?!』

マイトウイングがミサイルを放ちガインがガインショットでミフネを攻撃する。

『ぐ！旋風寺舞人！今日こそは！！』

『とお！！』

ゴルドランがミフネを押さえつける。

『己邪魔するかサムライ！！』

『一刀両断斬り！！』

ゴルドランの一刀両断で真っ二つにされるミフネは爆発すると撤退した。だが膝を突くゴルドラン。

上空から勇者達に向かって攻撃を繰り返すゾーマ艦。

『く！！う！！』

『ぐ！！』

ダメージを追っているストームダグオンとセイバーヴァリオンは動けない。

すると

『こうなったらガイン行くぞ！！』

『おう!!』

舞人が左腕のコマンダーを起動させる。

「レエエエツッ!!マアアアイト!ガアアイイン!!」

舞人のコマンダーが輝くと発進されたロコモライザーを中心にガイ  
ン、マイトウイングがVの字に並び巨大な紋章を描いた。

ロコモライザーから足が展開するとガインが左腕、マイトウイング  
が右腕に変形するとロコモライザーに合体し舞人の乗っているコッ  
クピットが移動するとレバーを掴む。

「マイトガイン!起動!!」

頭部が形成されると汽笛が鳴り響き誕生した嵐の勇者。

それを見たゾーマ艦は

『きさま・・・まさか・・・まさか!!』

『そう・・・その通り!!』

『銀の翼に望みを乗せて!灯せ平和の青信号!!勇者特急マイトガ  
イン!!定刻通りにただいま到着!!!!』

響き渡る勇者の叫び。

『・・・あれは・・・マイトガイン・・・』

マイトガインが現れた事に驚くストームダグオン。

「すごい・・・マイトガインだ・・・本物だ!!」

目の前に本物のマイトガインがいる事が嬉しくてたまらないヴィヴィオとノア。

「いけえ!マイトガイン!!」

『レディの声援は無に出来ないな!ガイン!』

『おっ!』

マイトガインが空中に飛んだ。

『マイティバルカン!!』

マイトガインのマイティバルカンが火を噴きゾーマ艦を攻撃するがゾーマ艦は反撃しマイトガインを叩き落とす。

『マイトガイン!く!』

マイトガインを援護するべく立ち上がろうとするゴルドランだが動けない。

『マイティキャノン!!』

再び放たれるマイトガインの攻撃を受けるゾーマ艦効果があり外壁が崩れ始めるが・・・

『く!』

空中に居る為若干不利な状況だった。

『く!カイザーがあれば』

「舞人!あ・カイザーだったら!!!ヴィヴィオ!!!」

「うん!」

ノアがヴィヴィオと共に楓の作ったドリル特急に乗り込んだ。

『よっしゃ行くぜ!!』

隠蔽魔法を解除するドリル特急を発進されると舞人がそれに気づいた。

『あれは!ドリル特急!何故!?!』

『舞人使え!これは楓が作った1分の1レプリカだ!!』

『え?』

『大丈夫!そのドリル特急は私が自作して本物とそんなに変わらないから!!』

ストームダグオンの言葉を聞いたマイトガインが・・・

『・・・本物と変わらない?・・・なら!!!ガイン頼むぞ!!!』

『わかった!』

マイトガインから降りる舞人はノアたちが乗るドリル特急に乗り込んだ。

「な! まままま舞人! ?」

「悪いけど・・・借りるよ!!」

「え?」

席から下ろされたノア。舞人は操縦桿を握るとドリル特急を走らせた。

『チェンジ! マイトカイザー!!』

舞人の叫びにドリル特急は勇者ロボ・マイトカイザーにチェンジした。

『愛の翼に勇気を込めて! 回せ正義の大車輪! 勇者特急マイトカイザー! ご期待通りにただいま到着!!』

降り立つマイトカイザー。

『なるほど! 本物とそんなに変わらない! ガイン! やるぞ!』

『おっ!』

舞人が再びコマンドーを起動させた。



『レエエツツ！マアアイトガアアイン！！！！』

舞人のコマンダーが輝いた。

『グレートダツシユ！！』

マイトガインが舞い上がるとマイトカイザーが分離し舞い上がった。

マイトガインを中心に次々と組み上がっていく。

舞人、ノア、ヴィヴィオがコックピットに移動すると舞人がレバーを引いた。

『グレートマイトガイン！起動！！』

マイトガインの頭に兜が装着され完成した勇者・グレートマイトガイン。

そして空に舞い上がるグレートマイトガインは構えた。

『動輪剣！！』

『ぬん！！』

グレート動輪剣を抜くグレートマイトガイン。

『平和な町を支配し！自らの野望の為に人々を犠牲にしようなど・  
・この勇者特急隊が許しはしない！！』

『グレート動輪剣！！』

グレート動輪剣から溢れ出すエネルギー。

『真っ向！から竹割り！！』

『ぬおおおおおおおおお！！』

グレート動輪剣が振り下ろされ真っ二つになるゾーマ艦。

戦いが終わり楓、シズマ、ノア、ヴィヴィオが舞人と向き合っていた。

「本当にありがとうございました！！」

「いや。当然の事をしたまでだよ」

楓が舞人にお礼を言うと舞人も楓に言葉を返す。ヴィヴィオが舞人の前に立つ。

「ねえ！本当に本当に舞人さん」

「ああ。嵐を呼ぶナイスガイ。旋風寺舞人とは俺の事だよ」

「うわ〜握手して下さい！！」

「ずりいぞヴィヴィオ！あたかも握手！！」

舞人に詰め寄るヴィヴィオとノアすると。

「なんだ!？」

突然空間が乱れ始めた。

「どうしたんだこれは!？」

「う!うわあああああああ!！」

楓、シズマ、舞人、ノア、ヴィヴィオ、ゴールドラン、グレートマイ  
トガインが空間の歪みに飲み込まれた。

霧島園

「!！」

空間転移され元の世界に戻る楓たちと未知の世界に来てしまった舞  
人。

「ここはヌーベルトキオシティじゃない！」

「霧島園？」

「どづいつ事ですか？」

舞人に事情を話す楓。

「そうですか……ここは俺の世界とは違うのですか……」

「舞人さん」

「……俺がこの世界に干渉してはいけないのかもしれないかもしれません」

「はい……」

「だが……どの世界であろうと……悪が蔓延るのを黙って見過ごすわけにはいかない!!」

「え?」

「俺も協力します……幸いガインもこちらに来たことですし」

「それでこそ舞人だぜ!!」

ノアの絶叫と共に肩を叩かれる舞人。

こうして勇者特急マイトガインが楓たちの仲間に加わった。

余談だが舞人にツーショット写真を撮らせ握手にサインまでねだったヴィヴィオは大層喜んで帰っていった。

第十四話 嵐の勇者あらわる！（後書き）

突然私達の前に現れた男性。え？ワルター・ワルザック？何この女性恐怖症・・・てええ！！シルバーナイトって！何々何なのよ！？え？誰？ワルター様のことをどう思っているか？

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 シルバーナイト！これぞ元祖出来ちゃった合体！

うゝん財布？

## 第十五話 シルバーナイツ！これぞ元祖出来ちゃった合体！

第十五話 シルバーナイツ！これぞ元祖出来ちゃった合体！

### ある日の霧島園

「一体・・・パワーストーンは何処にあるんだ？」

赤毛の青年が霧島園を訪れようとするが・・・

先客が居た。

「おうおう！！今月の支払いどうなってるんだこら！！」

任侠姿の男二人が何やら因縁をつけている。

『何だてめえら！！ヤクザがブレイブポリスの居るところに何のよ  
うだ！！』

『レジエンドラの勇者も舐めるなよ！！』

「な！何なんだてめえら！！」

ラリーエースとブロンゾンに睨まれ怖気づくヤクザ。

「てー！警察は民事不介入じゃー！！」

『そついつのは一般の警察に言っただな』

「いつもの女出せよ」

『しょうがねえな・・・リーダー』

話が進まないため楓を呼び出すラリーエース。

「ん〜なに？」

『うわ・・・何ツー姿に・・・』

今の楓の姿。寝癖で髪の毛ボサボサ顔はヨダレだらけ目やにも凄い・・・身だしなみの欠片も感じられない姿。

「んあ？また来たの？せつかく気持ちよくお昼寝してたのに・・・」

超面倒くさそうな楓が構えたその時。

「待て！」

赤毛の青年が割って入った。

「何だテメエは！！」

楓たちが怖いのか青年に手を出すヤクザ。

「何しに来たんだ？」

「こいつらが金払わないんだよ！」

「て今月の集金来週じゃん」

楓に突っ込まれるヤクザすると青年は・・・

「なんだ？金が欲しいのか？」

そう言って懐から何かを取り出しペンでサラサラサラと書き始めた。

「ほれ」

「「「え？」「」」

青年がヤクザに小切手を渡すと楓とヤクザは小切手を見ると目ん玉が飛び出そうになった。

「一億円！！！」

漢字で一億円と書いてある小切手。

「なんだ？足りないのか？」

そう言って青年は0を一つ増やす。

「十億円・・・失礼しました！！！」

逃げ帰るヤクザ。

(うわ・・・こういうお金持ってる人って絶対敵に回したくないな)



そう思う楓。

「ふん！あんな奴らにパワーストーンを渡してなるものか！」

（・・・あゝこの人パワーストーンが欲しいんだ）

頷く楓。

「そこのだらしない芋娘」

「？私？」

楓を指す青年。

「聞くがこの近くにパワーストーンは無いか？」

「これ」

楓が指したブロンゾン。

『リーダー・・・俺を売りに出さないでくれよ』

「な！勇者が復活してしまったのか！！」

頭を抱える青年は一時撤退した。

「何なんだろうあの人？」

啞然とする楓だった。

『殺したのは・・・お前だ!!』

「やっぱ犯人は秘書だろ？」

「違っつて愛人だよ！」

霧島園の中でタクヤたちと一緒にサスペンスドラマ見ている楓たち。

「ねえねえシズマ！犯人誰？」

「・・・知らねえよ」

興味無さそうなシズマ。

「ああ。そっぴや今日来た変な奴ワルターだぜ」

「ワルター？」

さっき来た変わった変な人の名前を教えられる楓。

「ああ。なんか勇者を集めるんだ〜とかなんとか」

「タクヤ君説明端折りすぎだよ」

タクヤにツッコミを入れるダイその時だった。

「ん？臨時速報・・・パワーストーン発見か！！」

テレビに出た臨時速報でアドベンジャーに乗り込み現場に向かう楓たち。

一方

「ふふふ・・・哀れなお子達よ・・・偽の情報に騙されるとは」

ワルターがワルケリアンXで勇者達を待ち構えているのだった。

島国に到着するアドベンジャー。

「ここにパワーストーンがあるのか？」

アドベンジャーから降りる楓、タクヤ、カズキ、ダイ。島には見たところ何も無かった。

「・・・臭いな」

カズキが何かを感じくと

「オイラ屁なんてしてないぜ」

「私もオナラしてないよ」

「んなベタなオチは」「置いていて」「」

4人一緒に同じ動作をする。

「パワーストーンの実験は俺達とワルターしか知らないはずだろ？  
なのになんでニュースに出るんだよ」

「て言うことは罠？」

「！！」

楓が何かに気づくと巨大な戦艦が近づいてきた。

『だっはっは！！勇者どもよ！！今日こそパワーストーンに戻して  
くれる！！』

巨大戦艦ワルケリアンXが人型に変形し楓たちに襲い掛かる。

「トライダグオン！」

楓がダグコマンダーを起動させると翡翠のダグテクターが装着され  
フルフェイスのマスクで覆われる。

「ストームカエデ！」

「いけえ！みんな！！！」

『心得た!?!』

アドベンジャーからドラゴン、ジェットシルバー、スターシルバー、ドリルシルバーが発進される。

『チエエエンジ!黄金剣士!ドラゴン!』

『チエエンジ!ジェットシルバー!』

『チエンジ!スターシルバー!』

『チエンジ!ドリルシルバー!』

『チエンジ!鋼鉄武装!アドベンジャー!』

『ダグストーム!』

ロボット形態になったダグストーム達がワルケリアンXに飛び掛るが・・・

『うえ!?!?』

無数の砲台から集中砲火されるダグストーム。

『何々!?!?』

『ぐ!?!?』

『ぬおお!?!?』

火力圧倒されはじめる勇者達。タクヤがドランに向かって叫んだ。

「ドラン！ゴルドランに合体だ！！」

「心得た！ゴルゴーン！」

ドランの叫びに大地が割れゴルゴンが召喚・・・

「させるか！！」

されなかった。ワルケリアンXがゴルゴンが出てくる地点を塞いでしまったのだ。

「ちょっと待ってよ！合体の邪魔するのってロボット物じゃやっぢやいけないだよ！！それって悪役のやることじゃん！！」

ダグストームが不満な声を上げる。

「何を言うか娘！私は列記とした悪役だ！！」

「そうですね」

「ひ！！」

突然女性の声が響きワルケリアンXの動きが止まった。

「え？止まった？」

何が起こったのか考えるダグストーム。

『けど！チャンス！相手が動けないうちに攻撃！！』

『ゴルゴーン！』

ドラゴンがゴルゴンを召喚するとゴルゴンが人型に変形する。

『ぬおおお！！とお！！』

ドラゴンがゴルゴンに向かって飛ぶと巨大な宝石のような形になりゴルゴンの胸に納まった。それを見ていたシルバーナイツは・・・

『何故だ？』

『ゴルドランの合体を見ていると不思議と胸が熱くなる』

『君達に秘められた記憶じゃないのか？』

アドベンジャーの言葉に考え込むシルバーナイツ。

ゴルゴンが咆哮をあげると同時に現れる顔。

『黄金合体！ゴルドラァン！！』

誕生した黄金の勇者。

『ようし私も！疾風合体！』

ダグストームが飛び上がるとダグストームを中心にガードクイーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの

足に装着された。

『キエエエエエエエエエエ！！』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。腕が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン！！』

ストームダグオンが降り立つと物凄い風が巻き起った。

合体が完了すると母艦から戦闘機が発進され勇者達を襲った。

その頃ウルケリアンXでは

「シャランラ来るなああああ！！」

「ワルター様お待ちになってええええええ！！」

シャランラから逃げ回るワルター！。

『であああああ！！ストームガンビーム！！』

ストームダグオンの獣の瞳から光線が発射され戦闘機が撃墜されていく。

『スーパー竜牙剣！！』



『フットランチャー！！』

『『『』でああああ！！』』』』

ゴルドラン、アドベンジャー、シルバーナイトの攻撃に次々と戦闘機が撃墜される。

「ようし！みんな！！あとはあの無駄にでかい奴だけだ！！」

『心得た！！』』

タクヤの指令にワルケリアンXに飛び掛ろうとしたその時。

『『『』！！』』』』』』

再び動き出したワルケリアンXに砲撃された勇者達。

ワルターの戦艦にてワルターの執事カーネルが何故かスーファミ型のコントローラーでワルケリアンXを操縦し始めていた。

「こんな事もあるのかと遠隔操作が出来るのだ！」

カーネルがワルケリアンXを操縦したことで再び勇者達を危機に陥れた。

『く！！』』

『なんとという火力だ』』

ストームダグオンとゴルドランが圧倒されそうになったその時。

『レジェンドライフル!!』

『ジャックロッド!!』

『コンテナキャノン!!』

救出に現れたエースレジェンド、プロズガー、ブレイバーズ。

『リーダー大丈夫か?』

『みんな!!』

『話してる場合じゃないぜ』

突然ワルケリアンXから巨大な砲身が現れた。

『グレートビッグキャノン・・・発射!!』

『!!』

グレートビッグキャノンに飲み込まれてしまう勇者達。

『みんな!』

爆風の中シルバーナイトとブレイバーズが舞い上がった。

『シルバーナイト!ブレイバーズ!無事だったのか?』

ストームダグオン、ゴルドラン、アドベンジャー、エースレジェン

ド、プロズガーはダメージのため動く事ができない。

『く！みんな！今戦えるのは我々しかない！！』

『『『『『『おっ！！！』』』』』』』』

ジェットシルバーの号令でワルケリアンXに襲い掛かる勇者達だが効果があまりない。

そのころのワルター

「さあワルター様これサインを」

「くっくっくっ！！」

何故か日本の婚姻届にサインを求められるワルター……日本の婚姻届が宇宙で適応されるかは置いておいてもらおう。

（そうだ！今！勇者達に敗北すれば！この危機から脱出できるかもしれない！！だが！人生を捨てて勇者を取るか勇者を捨てて人生を取るか……うっ）

結果

「シャランラ！！」

婚姻届にさらさらと何かを書いたワルターは紙飛行機を作り……

「お子達よ！受け取れえ！！」

タクヤ達に向かって紙飛行機を投げるのだった。

それを受け取るタクヤは・・・

『紙飛行機？』

「何だこれ？」

タクヤたちの前に飛んできた紙飛行機を見るストームダグオン。

『婚姻届？』

何故こんなところに婚姻届がというのは置いておいて書いてあったのは・・・

『シルバーナイツは合体できるぞっと！！』

「これが本当なら！！」

「ようし！シルバーナイツ！合体するんだあああああ！！！！」

突如響いたタクヤの声に場は静まり・・・

『あ・主』

『今なんと？』

『俺達に合体しろだって？』

『そ！そうだ！！』

『『え?』』

突如立ち上がるジェットシルバーに振り返るスターシルバーとドリルシルバー。

『思い出したぞ!我々シルバーナイツは!合体する事ができたんだ!』!』

『そうだ!』

『思い出したぜ!』!』

(んな大切なこと忘れないでよ!!!)

心中でツツコミを入れるストームダグオン。

「いっけえ!シルバーナイツ!」

タクヤの掛け声にシルバーナイツはフォーメーションに入った。

『シルバーナイツ!フォームアップ!』

ジェットシルバー、スターシルバー、ドリルシルバーが舞い上がり、とジェットシルバーが胴体、スターシルバーが腕、ドリルシルバーが下半身になった。

ワルケリアンX内

「良いんですワルター様」

「ひいひい!!」

「形式なんて要りませんわ〜誓いのキスがあればああ」

「ひいひい!!シルバーナイツ早く!!」

敵側に助けを求める悪役ワルター・ワルザック20歳。

そんなワルターをよそに

ドリルシルバーにジェットシルバー、スターシルバーの順番に合体すると頭部が現れトライランサーを手にした。

『<sup>シルバー</sup>白銀合体!シルバーオン!!』

誕生した白銀の勇者。そしてストームダグオンは思った。

(ああ・・・うちのご主人の元ネタ彼らだ・・・)

シルバーオンを見てストームダグオンはそう思った。

『『おお・・・』』

ゴルドラン、アドベンジャーが驚く。

『・・・』

エースレジェンドは何やら複雑な表情だ。

「いかしてるぜ！！シルバーナイツ！！」

『いや！合体を果たした我々の名は・・・シルバリオン！！！！』

堂々と名乗りを上げるシルバリオン。

そして

『ようし！こうなったら俺達もやるんだ！！』

『なに！？？』

ビッグブレイバーの言葉にえ？つとなる勇者達。

『何を根拠に！？？』

『あいつらに出来て俺達に出来ないはずがない！！いくぜ！！』

『『『『おう！！！！』』』』

ビッグブレイバー、ライナーブレイバー、スターブレイバー、ドリルブレイバーが空に舞上がるとビッグブレイバーが頭と両腕、ライナーブレイバーが右足、スターブレイバーが胴体、ドリルブレイバーが左足になり合体した姿。

『『『『4体合体！！！！』』』』

『キングブレイバー！！！！』

降り立つキングブレイバー。3代目出来ちゃった合体だった。

『おう！出来たぞ！見たか俺の姿・・・を！！』

その瞬間エースレジェンドに蹴り飛ばされるキングブレイバー。

『な！なにを！』

『てめえ・・・俺達ブレイブポリスの合体の苦労は一体なんだっただよ！！！！』

合体にとても苦労したメイドイン地球製のエースレジェンド。ここにプロズガーが・・・

『ふ・・・メイドインレジェンラを舐めるな！！』

『あに！？』

『レジェンドラの勇者は何でもありなのだ！！』

『ギヤアギヤア！！』

言い分に納得しないエースレジェンド。その時

「よし！奴らがもめているうちに！！グレートビッグキャノン！発射！！」

再び発射されるグレートビッグキャノンだが・・・

『トラアアイ！シールド！！』



シルバリオンのトライシールドに防がれた。

『なんと！』

『強力な盾だ』

シルバリオンの防御力に驚くゴルドランとアドベンジャー。

『負けてらんねえ！！ブレイバーキャノン！！』

キングブレイバーから発射されるブレイバーキャノンが次々とワルケリアンXを破壊される。

『トライランサー！！』

トライランサーを構えるシルバリオンはそのまま突撃した。

『トライファイニッシュュ！！』

ワルケリアンXを貫いたシルバリオン。そして爆発するワルケリアンX。

戦いが終わり戦闘体制をといた勇者達。

「んま〜結局パワーストーンは無かったけどヒントはあったな〜」  
パワー石のヒントが表示され考えるタクヤ達すると。

「あれ？ワルターじゃねえか？」

何やら必死でシャランラから逃げているワルター。

「女の子に追っかけられるなんて羨ましいね」

「じゃあ私が追いかけてあげようか？」

楓の言葉に赤面するダイ。

「まあ楓は『顔だけ』は美少女だからな」

「けどあいつ命がけで逃げてるって感じだぜ？」

「いいじゃんどうせ他人事だし」

「そうだな」

その時シャランラが楓の前に立ち塞がった。

「あなた！」

「はい？」

「突然だけど・・・あなたワルター様のことどう思ってますの！？」

突然のフリに考える楓。

結論

「財布」

((((ひでえ)))

楓の言い分にツッコミを入れるメンズだった。

「そつでしたの〜それでは」

楓の言葉を聞いたシャランラは再びワルターを追っかけていった。

第十五話 シルバーナイツ！これぞ元祖出来ちゃった合体！（後書き）

そつえば私の剣ってシズマからの借り物なんだよね〜早く返さないとシズマが本来の力が使えないよ〜はあ〜空から剣でも降ってこないかな〜って！！本当に降ってきた！！！！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 もう一人の剣星人

あなたがライアンの同胞？

## 第十六話 もう一人の剣星人

宇宙

『ここが・・・地球か・・・』

一人のロボットが成層圏から地球を眺めていた。

『ここに・・・同胞が・・・!!』

その時ロボットに向かって砲撃が浴びせられた。

『く!ゾーマか?』

ゾーマの戦艦から次々と円盤が出てくるとロボットは応戦する。

『ファルコフレア!!』

ロボットの鳥の顔のついた胸から火炎が発射されるが・・・

『ぐおおおお!!』

円盤に撃墜されロボットは大気圏に入った。

『く...!!』

咄嗟に変形するロボット。その姿は・・・

第十六話 もう一人の剣星人

宇宙剣士フアルコ登場

霧島園

本日の業務を終了しデッカールームの出来損ないのようなロボ部屋で整備している楓。

「うん」

『どうした？リーダー』

考え込んでいる楓に声をかけるブロンゾン。

「私の剣ってさ」

『ムゲンブレードの事か？』

ラリーエースの言葉に頷く楓。

「うんシズマからの借り物なんだよね」

『アフエタの剣って奴か？』

ビッグブレイバーの言葉に再び頷く楓。

「うん……あれさ……最後にはシズマに返さなきゃいけないだよね……そうしないとシズマが本当の力が使えないから……」

『だな……』

「あく私にもお爺ちゃんのダグセイバーみたいな伝説の聖剣や彼の地でパワーアップしたカイザーソードみたいな剣来ないかなあ！」

何かのメモを書き留める楓。

『リーダーなにやってんの?』

「これで今年のサンタさんに頼む！」

『『『おいおいおい』』』

あまりにも幼稚な手段に呆れる勇者達。

『リーダー多趣味なんだから自分で作ればいいじゃん』

「いやだ！ロマンがないもん!!」

『んなわがままな』

呆れるブロンゾン。

『ていうかリーダーよ……おめえサンタに物もらったことあるのか?』

「無い！」

『やっぱりな・・・サンタクロースはいい子のところにしか来ないんだぞ』

ラリーエースの言葉に楓は・・・

「今年こそいい子にするもん!!！」

『いや・・・リーダーにはサンタいねえんじゃぬが!!！』

「居るもん！私にもサンタさん居るもん!!！」

楓にボコスカ殴られるラリーエース。

『んじゃリーダー七々に頼めば』

「うっん今年こそ頼む!!！」

『お！流れ星』

ビッグブレイバーの言葉に楓は外に出た。

そしてお祈りのポーズで流れ星を見た。

「私に強い剣をください！私に強い剣をください！私に強い剣をください！私に強い剣をください！私に強い剣をください！」

キラーン





剣に向かって頬ずりしている楓。余程嬉しいらしい。

「私の剣だ〜 私の剣だ〜 お星様が私のお願い叶えてくれたんだ」

はっきり言ってみんな引いてます。

「どづいう事？」

『たぶんさ・・・今まで人に物もらったこと無かったんじゃない？』  
ビッグブレイバーの言葉にホロリとする勇者プラススバル。

「けど・・・これ落とし物かもしれないよ？」

「良いんだもん！拾った物は私のもんだもん！！落とし物は一割もらえるんだもん！」

『ていうかこれ一割どづやってもらうんだ？』

剣のデザインは金色の十字剣で鳥の紋章があった。

その時だった。

『ん・・・ん・・・』

「ん？ラリーエースなんか言った？」

『なんもいってねー！！』

ラリーエースが反論しようとしたその時。

『!!--』

楓の目の前の剣がグラグラ揺れだした。

『なんだ?こいつ!?!』

「!!--」

戦闘体制をとる勇者達そして・・・

『!!--』

剣が独りでに上昇すると変形を開始した。

『チエンジ!!』

剣がロボットになると胸の鳥が吼えた。

『!!--』

楓たち前に降り立つロボット。戦う意志は感じられない。

『てめえ!ゾーマか!?!』

警戒したブロンゾンの言葉にロボットは答えた。

『・・・誇り高き剣星人と一緒にするな・・・』

「剣星人？」

聞きなれない単語に考えるスバル。

「とりあえず訳を聞きたいから・・・みんなの部屋まで来てもらえないかな？」

『・・・わかった』

「名前は？」

『・・・宇宙剣士・・・ファルコ・・・』

ファルコと名乗った剣星人はそのまま勇者達の部屋に入るのだった。

「剣星？」

『このことは違う惑星だ・・・美しい星だった』

自分の星について話し始めるファルコ。

『だが・・・突如悲劇は起こった・・・俺がアーク星人をサルガッソに送った後・・・アーク星人はその復讐に剣星を滅ぼした・・・』

「星を？」

『アーク星人はその悪魔のような科学力で星全体を氷付けにした・・・まるで氷河期だった・・・』

「星を・・・凍らせた・・・」

『科学も度が過ぎると悪魔のテクノロジーになるって事か』

青ざめるスバルとラリーエース。

『・・・俺は別の太陽系にいたおかげで難を逃れたが・・・生き残った剣星人がこの地で戦ったと聞いて来た・・・』

「もう一人の剣星人ってライアンさん？」

『知っているのか？』

「ええ。けどライアンさんはあなたを追ってエルバイン太陽系に行っただけ」

楓の言葉に考えるファルコ。

『そうか・・・行き違いになったようだな・・・世話になった』

そのまま部屋を出ようとするファルコだがビッグブレイバーが止めた。

『ちよつとまちいなファルコさんよ』

『なんだ？』

『折角来たんだ。よかつたら俺達と一緒に戦わないか？』

『・・・一緒に戦う？』

『おう！そうすればその内ライアンも『悪いが断る』なに？』

ビッグブレイバーの言葉を断るファルコ。

『気持ちありがたい・・・ここで戦っていれば同胞も訪れるかもしれない・・・だが俺は一刻も早く星を再興させたい・・・』

『んじゃこれどうすんの？』

『ん？・・・』

己の足元見て絶句するファルコ。その足には楓がしがみ付いていた。

「ちよつと楓！離しなさいって！」

「いやだ〜これ私の！！私の剣なの！！！」

駄々こねている楓を引つ掴むスバル。

『・・・頼むよ・・・あんたしばらく付き合ってよ』

『・・・』

ブロンゾンの言葉に考えるファルコだが・・・

その時

スッドーン

『・・・』

急いで部屋から出る勇者達。上空からゾーマの円盤が強襲してきた。

『死にぞこないの剣星人が!!』

ゾーマの円盤から宇宙人が強襲すると

「トライダグオン！」

楓はダグコマンドーを起動させ翡翠のダグテクターを装着しフルフェイスのマスクが覆った。

「ストームカエデ！」

「セットアップ!!」

影の守護者スバルもセットアップしバリアジャケットになる。

「このまま一気に合体だ！疾風合体!!」

ダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエ!!』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。拳が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン!!』

『Bアーマー!!』

ブロンゾンのコールと共に空から巨大なジェット機が飛来した。

『行くぞ!!』

Bアーマーが各パーツになるとブロンゾンの身体に装着される。

『青銅合体!ブロスガー!!』

『『『高速合体!!』』』

エースチームが大空に舞い上がると

『うおおおおおお!!』

ソニックエースが両腕両足に変形し

『おりゃああああああ!!』

アクセルエースが頭と翼に変形し

『ああああああ!!』

ラリーエースが胴体に変形した。

そしてそのまま組みあがっていく。



『『『うおおおおおおおおお！！』』』』』

頭部の瞳が輝き全身に力が沸き起こる。

『エエエスレジェンド！！』』

『行くぜ！フォームアップ！！』』

ビッグブレイバー、ライナーブレイバー、スターブレイバー、ドリルブレイバーが空に舞上がるとビッグブレイバーが頭と両腕、ライナーブレイバーが右足、スターブレイバーが胴体、ドリルブレイバーが左足になり合体した姿。

『『『4体合体！』』』』』

『キングブレイバー！！』』

「みんな！がんばれ！」

応援に入ろうとする影の守護者スバルだが・・・

『何言ってるの？スバルも一緒に戦うに決まってんじゃない』』

「へ？」

スチームダグオンの無茶振りについていけないスバル。

「え？なに？私これであんな大きいのと戦うの？」

『問題なし！スチームクレーン！！』』

ストームダグオンが叫んだ。

ファイバード時代の天野平和科学研究所

「るるる」

鼻歌歌ってストームクレーンを洗車しているスバル。もう既に私物になってしまったようです。

「あゝこのサインはげちゃってるな」

と言ってクレーン部分の『私のB Yスバル』と書いてある部分を塗りなおすスバルすると・・・

「え？」

急にストームクレーンが沈んでいった。

「なにになになに？」

消えてしまったストームクレーン。

「うわゝ私のストームクレーン！！」

風の詩時代

『到着！』

「へ？」

影の守護者スバルの前に召喚したストームクレーンを出すストームダグオン。

『機甲合体！』

<POWER LOAD>

クレーンアームが展開しそのまま上半身が起き上がり下半身の四輪部分がリフトアップしていく。リフトアップと同時にクレーンアームが装着されている腕が展開し胸部が展開した。

「え？何々何なの？」

『男らしゅう観念せい！』

「私女の子だもん！」

バリアジャケットを摘み上げられているスバルはそのままストームクレーンの胸部に放り込まれた。

スバルが胸部に放り込まれるとゆっくりと胸部が閉じ同時に竜の顔

が胸に現れた。

「あ！閉じないで！閉じないで！！」

<CONNECT>

スバルの叫びも虚しく胸部が閉じ瞳が淡い緑に光る。

『え？え？なんなのこれええええええええええ！！』

急にメタルダグオンにされてしまった影の守護者スバル。

読者の皆様は不思議に思わなかっただろうか

何故スバルがメタルダグオンになれるのか？

それは楓がストームクレーンの設計をドジったからであった。

ドライアスとの戦いの最中急ごしらえで作ったストームクレーンそれ故に内部の認識機能が若干あまくなっており、機械の身体と魔力があれば中に乗っているのがダグストームであると認識されてしまっただった。

早い話がスバルとギンガ、ナンバーズだったらダグストームとして認識され使えるという事になる。

『・・・そんないい加減な機能だったんだ・・・』

呆れる影の守護者スバルことメタルダグオン。

『ちなみに飛鳥さんも乗れるよ〜』

『というよりなんで私まで?』

『いや〜人手が多いほうがいいし〜だったらそのままが良いやって』

ちよつと頭を抱えるメタルダグオンそしてお決まりのイベントが・

・

『何故胸に龍の顔が!?!』

宇宙人の言葉にメタルダグオンは・・・

『それはね・・・かつこいいから!?!』

『・・・俺もそうなのか?』

己の胸を見るファルコ。

『とにかく攻撃!?!』

『『『『おっ!?!』』』』

宇宙人と円盤軍に飛び掛る勇者達。

『ジャックロッド!?!おりゃあああ!?!』

ジャックロッドで円盤を一掃するプロズガー。

『レジェンドパルサー!!!』

両肩からキャノン砲を展開し一斉掃射するエースレジェンド。

『アックスシフト!!!』

キングブレイバーがドリルブレイバーのアックスで斬りかかった。

『こつなつたらヤケクソじゃあああ!!メタルトンファー!!!』

右腕のメタルトンファーで宇宙人を滅多打ちにしていくメタルダグオン。

『メタルバレット!!!』

メタルトンファーが砲身になり鋼鉄の弾丸が発射される。

『ぐっおおお!!!』

『マグマブラスト!!!』

胸の龍の顔から炎が発射され宇宙人を飲み込んだ。

『凄い・・・初めてなのに使いこなしてるなんて・・・基本的な武装スバルにあつてたのかな?』

などと己の設計に惚れ惚れするストームダグオン。

『ぼやっとしてないで攻撃しろ』

『え？はい！』

ファルコに押され宇宙人に攻撃するストームダグオンとファルコ。

『ファルコ・・・バルカン！！』

『サイクロンノヴァ！！』

ファルコの腕から銃口が現れ銃撃しストームダグオンの胸から竜巻が発射された。

『ストームガンビーム！！』

ストームダグオンの獣の瞳からビームが発射された。

『おかしい・・・何故我々の攻撃を受け続ける・・・』

ファルコの言葉に宇宙人は・・・

『うおおおおおおお！！』

進化し始める宇宙人。

『まさか・・・私たちの攻撃を吸収して進化したの？』

『ウオオオオオオオオオオ！！』

『『『ああ！！』』』

宇宙人に吹き飛ばされるストームダグオン、メタルダグオン、ファルコ。

『くそ！リーダー！』

『あほ！今俺達がいいつらのこと放っておいたら園のガキどもどうなんだよ！』

『いまは我慢だぜ！』

ブロスガー、エースレジェンド、キングブレイバーは霧島園防衛を優先させた。

『どっしよっつ』

『なら・・・進化できないほどの攻撃を与えれば・・・ぬおおおおおおおおお！』

『ファルコ！』

宇宙人に向かって飛ぶファルコは剣の姿に変形した。

『ジイイイイイイ！』

『おおおおおおお！』

宇宙人にぶつかるファルコだが・・・

『！』



強固になった宇宙人に弾かれてしまった。

『く！浅い！！』

己の突進力だけでは宇宙人を倒せない。

『ぐー！！』

そのまま吹き飛ばされるファルコ。宇宙人はそのままファルコにトドメを刺そうとするが・・・

『うおおおおおおおー！！』

ストームダグオンとメタルダグオンが宇宙人を止めた。

『何故だ？何故見ず知らずの俺を庇う？』

『目の前でやられちゃいそうな人を見捨てられるほど神経太くないの！！それに！！』

宇宙人を蹴り飛ばすストームダグオン。

『あなたは私の剣だ！私の仲間だ！！』

『・・・仲間？』

単純だが真つ直ぐなストームダグオンの言葉を聞いたファルコ。

『ストームダグオン！また来るよ！』

『く!』

宇宙人が起き上がり再びストームダグオンとメタルダグオンに襲いかかるうとしたその時だった。

『ストームダグオン!』

『!』

『この俺を使え!』

ファルコが剣の姿になりストームダグオンの目の前に突き刺さった。

『ファルコ・・・うん!』

アタックモードになりファルコを引き抜くストームダグオン。

『うおおおおおおお!』

ファルコを引き抜いた瞬間凄まじい嵐が巻き起こり瞳がこれ以上にならないほどに輝いた。

『ぬん!』

翼が広がり巨大な大剣ファルコソードを構えるストームダグオン。

『はああああああああああああああああ!』

瞳が再び輝き宇宙人を一刀両断するストームダグオン。

『うそ・・・』

ファルコの威力に唾然とするメタルダグオン、プロズガー、エースレジェンド、キングブレイバー。

宇宙人がやられた事により円盤は撤退を始めるのだった。

戦いが終わり霧島園に集結する勇者達。

『それにしてもなんだ？偶然とはいえリーダーのところに降ってくるなんてな？』

ブロンゾンがファルコを突つつくとファルコは答えた。

『・・・いや・・・偶然じゃないかもしれんぞ』

『なに？・・・偶然じゃないって事は・・・宿命か？』

『・・・さあな』

ビッグブレイバーの言葉をぼかすファルコ。

『ちょっと待ておめえ俺達に手を貸すのか？』

『・・・ああ・・・借りを作るのは気に食わんが・・・貸しを作るのも悪くない・・・それに』



尚天野平和科学研究所で

「うっぎゃあああああああああああああああ！！！！」

ズタボロになって帰ってきたストームクレーンを見て嘆きまくるスバル。

「うっ……洗車したばかりだったのに……」

直ちに天野博士が修理に取り掛かっていると……

「ん？ヴィヴィオそれどうしたの？」

何やらブレスレットのようなものを持っているヴィヴィオに声をかけるスバル。

「これね。お姉ちゃんに上げるためにお爺ちゃんに作ってもらったんだ」

「へえ、何それ？」

「魔力制御装置」

そう言ってヴィヴィオは楓に会う日を楽しみにするのだった。

第十六話 もう一人の剣星人（後書き）

むっふっふっ私の剣、ちょっと捻くれてるけど良い剣、けどな。私  
剣を使った戦いあまり得意じゃないんだよな。お爺ちゃんはエクス  
カイザーの剣真似したって言うし・・・うっんそっだ剣を使う勇者  
ロボに殴りこみに行こう！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 ストームダグオン対セブ  
ンチエンジャー

ロボマニアにいま娘って言われた

## 第十七話 ストームダグオン対セブンチェンジャー

ゾーマに襲撃され迎撃に出た勇者達。

『ジャッククロッド!!』

ブロズガーのジャッククロッドからチェーンが発射され宇宙人を締め上げた。

『アックスシフト!!』

キングブレイバーの一閃を浴びる宇宙人そして

『ストームダグオン!俺を使え!!』

ファルコが剣になり楓の元に飛んだ。

『ファルコソード!!』

ファルコとシンクロし凄まじい風を巻き起こすストームダグオン。

『うおおおおおおおおお!!』

ファルコソードを宇宙人に向かって振り下ろすが・・・

『あ!あああああ・・・』

振り切れず標的を外してしまうストームダグオン。

『嘘』

『何やってんだよリーダー……』

『今度こそ……!』

再びファルコソードを振り下ろすが宇宙人はジャッククロッドから脱出し離脱した。

『しまった!』

『タアアアボシューティング……!』

エースレジェンドの狙撃に撃墜される宇宙人。

『バーロー!リーダーあにやってんだ……!?!』

第十七話 ストームダグオン対セブンチエンジャー

霧島園

「ぼけえ……」

ファルコを使いこなす事ができずに無気力になってしまっている楓。



「で……あの調子なんだ……」

シズマに呼び出されたスバル。何故か両手にビニール袋を持ちその中には大量のカードゲームがあった。

「なんだそれ？」

シズマが聞いてみるとスバルは笑って答えた。

「あははは……ケンタ君がシークレットレアのカードが欲しいって言うてさ〜カードの筐体に並んで3万円つき込んだんだ……」

「んで？出たのか」

「私が5時間粘って出なかったのに……両替に離れた時に次の子が一発で出した!!」

悔し涙を流すスバル。シズマは呆れている。

「……それって……これの事？」

キュピーンとスバルがジャスト欲しがっているカードを出す楓。

「はっあー!!」

「……8枚持ってるけど」

「な!!!!」

己の引きの悪さに飛雄馬のごとく沈んでしまうスバルだった。

「楓姉ちゃん今日のテスト返ってきた」

子ども達が本日のテストを楓に見せるとやる気のない楓は・・・

「ああ・・・良いよ・・・次がんばれば・・・」

ピンポン

楓の教育方針 身体じょうぶで元気ならそれでいい

「良いのかな・・・それで」

「さあ」

スバルとシズマは楓に疑問を持った。そして風太郎が・・・

「姉ちゃんそろそろ巻き割りの時間」

「あゝい」

表に出て薪を割る楓だが・・・

「うゝん上手く切れてないな・・・」

中心を外しグズグズになってしまう薪。

「楓!」

「玄さん！」

「ちょっと貸して」

霧島園園長の玄が楓から斧を受け取った。

「！！！」

玄が思いっきり振り下ろしたその時。

スパン！！

薪が真つ二つに割れた。

「凄い！見事に真つ二つ！」

「原始的かもしれんが・・・背中中の筋肉を鍛えるのにはこれが良い」

玄が上着を脱ぐと背中に凄まじい筋肉が出来ていた。

「玄さんの歳でそんな筋肉を維持してるなんて・・・よし・・・」

楓が力いっぱい斧を振り下ろすが・・・

カラン

標的がずれてしまう。

「え？」

玄のようにいかない事に考える楓。

「どうして？」

「ただ闇雲に振れば良いってものじゃないんだよ」

そう言うと玄は園に戻っていった。

その後も楓はひたすら薪を割ってみるがどうも上手くいかず焦ってしまう・・・焦れば焦るほど無駄な努力が続く。

「はああ!！」

日が暮れた頃になると楓の腕は肉刺だらけになり皮がむけていた。

「いった・・・けど・・・」

疲労の中楓が斧を持った瞬間違和感を覚えた。

（あれ？斧ってこんなに力入れないで持てたっけ・・・）

さっきよりも少ない力で斧を持っている楓。

（・・・もしかして・・・）

何かを掴み取り両手で斧を構えると

「!！」

そのまま振り下ろした。

スパン！！

見事に真つ二つになる薪。

「わかった・・・力が入りすぎてたんだ・・・ガツチガチに固まってちゃダメってこと」

斧を振るときに無駄な力を入れていた楓。だが数百回斧を振ることによって疲労し斧を持つ力が最低限になった。そしてそのまま振り下ろし一刀両断する。

「・・・これなら・・・突破口が開けるかも・・・」

楓は何かを思いファルコを連れストームバンディットに乗り込んだ。

『どこに行くつもりだ？』

「見てて・・・時限転移！！」

楓が時間の扉を開きタイムスリップをした。

「着いた」

楓が着いたのは力達の時代よりも数年前の海鳴だった。

『こんな所に連れてきて・・・何の真似だ？』

ファルコも楓の考えに付いていけず困っていた。

「うん……ここにすれば……ダ・ガーンの剣を見られると思っ  
て」

『ダ・ガーンのこと？』

「地球の守護者……伝説の勇者の太刀筋……見ておいて損はな  
いかも」

『なるほどね……それじゃあ』

ファルコが剣になるとそのまま伸縮し楓の懐に収まった。

「あら？ファルコって伸縮自在なんだ」

『ああ』

そう言ってストームバンディットを走らせる楓。

だがダ・ガーンの姿は見当たらなかった。

「町は平和その物が……この方が良いよね……帰ろっかな」

そう思ったその時

「え？」

楓のダグコマンダーが何かの反応をキャッチした。急いで見てみる  
と……

「何これ・・・こんなロボット見たことない！」

緑色のロボットがジェット機に変形しどこかに飛んでいった。

楓はすかさず追いかけると何処かの森のような場所に着いた。

「たしかこっちに・・・何処に行ったの？」

楓が森を探したその時。

『俺に何か用か？』

楓が振り向くと緑色のロボットが舞い降りた。

『さっきから人の後ろを付回して何のようだ？』

「えっと・・・その」

『チェンジャーメッサー！』

「うわああ!!！」

ロボットのチェンジャーメッサーを咄嗟に避ける楓。

『その身のこなし・・・貴様何者だ？』

ロボット・セブンチェンジャーが楓の身のこなしに不振を思った。

そして懐からファルコが呟いた。

『どうする？リーダー？』

「わかんないけど・・・放っておくわけにはいかない！！トライダグオン！！」

楓がダグコマンダーを起動させると翡翠のダグテクターが構築されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ストームカエデ！！」

『ダグオン？・・・まさか』

ダグオンという言葉に聞き覚えのあるセブンチェンジャー。

「疾風合体！」

ダグストーム、ガードファルコン、ガードジャガー、ガードクーガーが合体し完成した勇者。

『ストームダグオン！！』

アタックモードでセブンチェンジャーと対峙するストームダグオンそして懐からファルコが飛び出した。

『ストームダグオン！この俺を使え！！』

『ファルコソード！！』

ファルコソードを構えるストームダグオン。



『ほお・・・中々の剣だな・・・だが・・・使い手のお前がその程度ではな』

『なに!?!』

『今日のところは見逃してやる・・・とっと帰れ』

『ふざけるなー!?!』

セブンチェンジャーにファルコソードを振り下ろすストームダグオンだが、あっさり回避するセブンチェンジャー。

『く!』

『仕方ない・・・少し遊んでやるか・・・』

セブンチェンジャーがチェンジャーシユヴェルトを構えストームダグオンに斬りかかった。

『ぐー!!..う!!..!』

セブンチェンジャーの一閃を受けるストームダグオンだがまだファルコを使いこなせていない為押され始める。

『ぐあああああ!?!..!』

セブンチェンジャーの砲撃を受け吹き飛ばされるストームダグオン。

『まだ若いな』

『はあああああああああ！！！』

楓の攻撃を受けるセブンチェンジャー。

『（なるほど・・・鋭い剣だ！！）だが！！』

『ぐあああああ！！』

セブンチェンジャーの一閃を受けるストームダグオンは撃墜された。

『はあ・・・はあ・・・』

『ほお・・・まだ立ち上がるか・・・所詮は俺の敵ではない』

立ち上がるうとするストームダグオン。

それを見たセブンチェンジャーは・・・

（・・・ほお・・・まだ立つか・・・目が死んでいない）

（見えない・・・見切れない・・・よく見て・・・飛鳥さんの流星脚を・・・お爺ちゃんのパンチを受け止めた心の目を開けば・・・必ず見えるはず！！）

ストームダグオンの瞳が輝きを無くすとそのまま座り込んだ。

『ふん・・・勝てないと分かり勝負を捨てたか・・・とどめだ！！』

チェンジャーシュベルトを構えストームダグオンに斬りかかる

その時

『ぬん!!!!』

セブンチェンジャーの一閃を避けるストームダグオン。

そのまま心の向くままセブンチェンジャーの剣をかわし続け一瞬のスキを見つけた。

(出来るはず!ダイノガイストに一撃をいれたあの時の力を出せれば!!!)

何かの力が発動しかけストームダグオンが一閃を振り下ろすが・・・

『く!!!!』

わずかに標的がずれた。

『外れた!!!!』

やられると思ったストームダグオンだが・・・

『外れたのではない・・・俺が外した』

よく見るとセブンチェンジャーの剣がファルコソードを押さえ込んでいた。

『あれだけの攻撃を食らいながら・・・俺に一太刀浴びせるとはな・・・面白い・・・ふん!!』

『ぐー!!』

セブンチェンジャーに蹴り飛ばされるストームダグオン。そしてセブンチェンジャーはそのまま飛び去っていった。

『なんなの・・・あの人』

ストームダグオンはセブンチェンジャーの存在に疑問を持った。

『くー!え?』

再びレーダーに何かの反応が出た。

『これって・・・レッドロン!?!』

町に向かって飛び出すストームダグオン。

『ダ・ガン!今日こそ決着をつけてやるぞ!!出てこい!』

レッドロンが新型のロボットを狩りダ・ガンをおびき出そうとしたその時だった。

『待ちなさい!!--』

『なに!?!』

上空からガンビームでロボットを強襲し舞い降りるストームダグオ

ン。

『ここでなにやってるの!?!?』

何故かジーツとストームダグオンを見るレッドロン。

『な・なんですか?』

『く!!なんと醜い芋娘だ!!!!』

『ガン!芋娘って言われた!!!』

流石に面と向かって言われるとショックだったストームダグオン。

『最低だ・・・女の子泣かした』

ファルコに白い目で見られるレッドロン。

『閣下・・・いくらなんでも女の子泣かせるのは最低ですよ』

「黙れ!!!」

レッドロンに引っ叩かれる科学者ロボ。

『ファルコソード!!』

立ち直ったストームダグオンがファルコソードロボットに向かって振り下ろすが・・・

『甘い!!!!』

ファルコソードを受け止めるレッドロン。

『なに!?!』

『いい剣だな・・・しかし!にわか仕込みの剣ではこの私に勝てまい!!--!』

『う!!--!』

吹き飛ばされるストームダグオン。

『所詮その程度か』

『うああああ!!--!』

レッドロンから一斉砲撃を食らい倒れこむストームダグオン。

『まだまだ!!--!』

倒れているストームダグオンに容赦のない攻撃を浴びせるレッドロン。

『ふん・・・歯ごたえのない』

そのまま飛び去ろうとしたその時だった。

『なに!?!』

立ち上がりファルコソードを構えるストームダグオンを見て驚くレ

ッドロン。

『・・・・・・・・』

ダメージが頂点に達し余計な力が全て抜け感覚が極限まで研ぎ澄まされていた。

瞑想するストームダグオンがファルコとシンクロし始める。

(なんだ！？凄いパワーを感じる！！)

ストームダグオンとシンクロするファルコは凄まじいエネルギーを感じた。

『なんだこれは！？』

『閣下・・・退避を・・・』

科学者ロボがレッドロンに退避することを提案するが・・・

「そつだな・・・貴様犠牲になれ！」

『ソナナ』

科学者ロボを置き去りにしロボットから脱出するレッドロン。ストームダグオンがファルコを振り上げると凄まじい次元嵐が巻き起こった。

『ストームファルコソード！！！！』

嵐を纏った縦一閃がロボットを一刀両断すると脱出ポットが発進した。

「おのれ！ダグオン！！」

レッドロンはファルコソードを構えるストームダグオンに憎悪するのだった。

「ふう終わった〜散々だったな〜」

『結局。当初の目的も果たせずか』

「まあいいじゃない」

そう言って帰ろうとする楓とファルコその時だった。

「ん？」

角の道で放電が起こり楓が近づいてみると何かが放置されていた。レッドロンの科学者ロボだ。

『ガガガガ・・・』

壊れかけている科学者ロボ、すると楓は何かを閃いた。

「直せばまだ使えるかも」

『リーダー・・・過去のもの拾って行っていいのか？』



楓の変な趣味で拾われていった科学者ロボ。

霧島園

「ええつと・・・はあ〜こつ出来てるんだ〜」

科学者ロボを修理している楓。メカいじりが好きなせいかちよちよいのちよいと技術を説明していく楓。

「うわ〜おもしろ〜此処がこつなつてて〜」

「楓って天野博士やドクター並の技術力の持ち主かも」

シークレットレアのカードを報酬に部品の調達をさせられたスバルも感心していた。

「あとはこの基盤を差し込んでホイ出来た！」

楓に電源を入れられると起動する科学者ロボ。

『コ・ココハ？・・・！！！！』

科学者ロボが何かに気づいた。それは自分のことをジーツと見ている勇者の姿だった。

『おつリーダー直つたみたいで良かったな』

『ゆー！勇者！ー！！』

『勇者で悪いか?』

ラリーエースに驚く科学者ロボ。

『アノ〜私どうしてココニ?』

『あ〜リーダーの話だと捨てられて勿体無いから拾ってきたんだと』

『ガン!〜!』

ブロンゾンの捨てられたという言葉にショックを受ける科学者ロボ。

「あはは・・・ショックみたいだね」

『それは・・・私は閣下に尽くしてきたのに!〜ヒドイ!〜!』

「じゃあ・・・ウチ来る?」

『は?』

楓の提案に混乱する科学者ロボ。

「まあ〜うちはこんだし。ちょうど頭のよさそうな人探してたんだ〜」

『良いんですか!』

「まあ〜袖振り合うのも他生の縁っていつ〜」

『お優しい!〜!』

感動する科学者ロボ。

こうして園児たちのアルファ君と名づけられた科学者ロボは霧島園の家庭教師ロボという立場を押し付けられるのだった。

第十七話 ストームダグオン対セブンチェンジャー（後書き）

あははは。中々心強い仲間が増えたな。私たちが苦手な頭脳労働担当者までくん？何か次元が変わったここ何処？ミッドチルダ！？え？なんでドクターが悪人なの！？誰この美少女・・・その目・・・ヴィヴィオちゃん！？ここはパラレルワールドのミッドチルダ！？

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 悪魔対聖王

わかったよ・・・ヴィヴィオちゃんの気持ち・・・受け止める！！

## 第十八話 悪魔対聖王

ある日の天野平和科学研究所

「こんにちは」

暇だったので天野平和科学研究所に遊びに来た楓すると

「お姉ちゃーん!!」

「ぐぶは!!!」

毎度毎度ヴィヴィオに挨拶代わりに世界を狙えるタックルをお見舞いされ悶える楓だった。

「砂糖いくつ？」

「4つ！」

「甘党なんだね」

天野博士の助手(?)のジェルにコーヒーだされる楓。

「ねえねえお姉ちゃん！」

「ん?なに？」

「カのおじちゃんってはやてさんの家来なんでしょ？」

「うん！」

「で。ヴィータさんはサイモン君子分にしてるし・・・ヴィヴィオも家来ほしい！」

その言葉に楓は

「わかった！私ヴィヴィオちゃんが大きくなったら家来になつてずつと一緒に居るよ」

「ほんと！？ヴィヴィオが大きくなったらお姉ちゃんずつと一緒に居てくれるの！？」

「うん！私出来ない約束は絶対しないよ！」

「じゃあ指きり！」

「うん！」

こうして楓はヴィヴィオに家来宣言をしてしまうのだった。

すると

「出来たぞい！！」

天野博士がなにやらマシンを持ってきた。

「お爺ちゃんこれ何？」

「名づけて！ミラクルジャンプマシンじゃ」

ハルカの言葉に天野博士がそう答えた。

「これ何するものなんですか？」

「んまあ〜簡単に言えば空間を越えるマシンじゃ！んでもってほい  
！！」

天野博士がミラクルジャンプマシンのスイッチを押すと周囲が光り始めた。

「！！」

楓の身体が光り輝くと何処かに跳ばされてしまった。

「消えちゃった！」

驚くヴィヴィオ。だがケンタは

「ヴィヴィオ大丈夫だって・・・楓姉ちゃんの事だから自力で生きて帰ってくるって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その言葉に何も言えなくなるヴィヴィオだった。

第十八話 悪魔対聖王

「な！何なんだ此処は！？」

急に視界が変わり何かの戦艦のような場所に辿り着いた楓。

「うわ〜どうやって帰ろう・・・」

とりあえず通路を歩いてみる楓。

「ごめんくださ〜い・・・誰か居ませんか？」

広い場所を探索する楓。その時だった。

ドーン！！

「なに！？」

突然の爆音が響きその方向に駆け出す楓。



「これって!!」

楓は目の前の状況に混乱した。ナンバーズの破壊行為、そしてそれを見るジェイルいやスカリエッティとオッドアイの少女がなのはを血祭りにあげたこの状況。

「これって……一体？」

『ねずみが一匹迷い込んだようだね』

いつも知るジェイルと同じ声で狂気的な声を上げるスカリエッティ。

楓は感じ取った。ここは自分とは違う世界のミッドチルダである事に……そして目の前のジェイルは敵であることに……

そしてオッドアイの少女の正体を自然と分かった楓。

「まさか……ヴィヴィオちゃん？」

「……誰？」

涙を流し振り返るヴィヴィオ。

「ヴィヴィオちゃん?……どうしたの……何があったの」

「来ないで!!」

「え?」

ヴィヴィオに近づこうとした楓は足を止めた。

「どうして？」

「ヴィヴィオ・・・もう戻れない・・・なのはママを・・・傷つけた」

（そっか・・・ここではなのはさんがヴィヴィオちゃんママなんだ）

自分のいる世界とは違う事を実感する楓。ヴィヴィオは見ず知らずの楓に胸のうちを明かした。

「分かったの・・・私・・・ずっと昔の人のコピーで・・・もうママは死んじゃって・・・なのはマ・・・なのはさんもフェイトさんも・・・本当のママじゃないんだよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙ってヴィヴィオの言葉を聞く楓。そして今の全ての状況を直感した楓。

「私は・・・この船を飛ばすためのただの鍵で・・・玉座を守る只の兵器・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「守ってくれて・・・魔法のデータ収集が出来る人を探してただけ・・・・・・・・」

何故楓にそんな事を話すのかヴィヴィオ自身も分かっていない……  
だが涙を流し楓に胸のうちを解き放つヴィヴィオ。

「悲しいのも……痛いのも……全部偽物の作り物……私はこの  
世界に居ちゃいけない子なんだよ!!」「……そんな子」「え?」

「そんな子……居るわけないでしょ!!!!」

ヴィヴィオの言葉に楓が叫んだ。

「居ちゃいけない子なんて居るはずがない!!例え血が繋がってな  
くたって……あなたとなのはさんは『絆』で繋がっていたでしょ  
!!」

「……お姉さん」

「……娘だと思えば娘……ママだと思えばママ……本人がそ  
う思ったらそれで良いの!!……それに子どもが間違った道に  
入っちゃったら……大人は全力で元に戻す!!」

「けど……私……もう誰も傷つけたくない!!!!お願い!!」

ヴィヴィオが楓に向かって叫んだ。

「私を殺して!!!!」

ヴィヴィオの言葉に楓は……

「わかった……わかったよ……ヴィヴィオちゃん……私はこ

んなやり方しか出来ないけど・・・今楽にしてあげるよ」

楓がダグコマンダーに手をかけた。

「トライダグオン!!」

楓がダグコマンダーを起動させると翡翠のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われた。

「ストームカエデ!!」

「!!」

ダグテクターを装着した事に驚くヴィヴィオとモニターのスカリエッティ。

「ヴィヴィオちゃん!行くよ!!」

ヴィヴィオに向かって駆け出した楓はパンチを放つがヴィヴィオには効いていない。

「え?」

聖王の鎧に楓の攻撃が防がれてしまう。ヴィヴィオも拳を突き出すと楓は捌き勢いを利用し後ろに回りこむとヴィヴィオの膝関節を蹴り顔面を殴りそのまま回すと締め上げた。

「ぐ!っ!!」

間接を締め上げられるヴィヴィオ。するとヴィヴィオは力技で楓の

関節技を外した。

「!?!」

楓は立ち上がり構える。

「だめ……止まらない」

ヴィヴィオの拳と楓の拳がお互いの身体に刻み込まれるが楓の方がダメージが大きい。

その時なのはが目を覚ました。

「やめて!!その子は……ヴィヴィオなんだよ!!私の子なんだよ!!」

傷つきながら叫ぶのはにヴィヴィオは……

「はやく!私を殺して!!」

楓に殴りかかる。

もうなのはを傷つけない……その思いで。

だが楓はヴィヴィオの拳を受け止めながら叫んだ。

「ヴィヴィオちゃん!ヴィヴィオちゃんが本当に死にたいと思っ  
ているなら……私が殺してあげる!!」

ヴィヴィオを蹴り飛ばす楓は構えなおした。

「けどね・・・私は嘘をつく子が嫌いなの！・・・自分に嘘をつく子が一番大嫌いなもの！！・・・ヴィヴィオちゃん・・・本当のこと言いなさい！！ヴィヴィオちゃんの本当の気持ち！！私は絶対受け止める！！」

「けど・・・けど・・・私！！」「ヴィヴィオちゃん！！」「！！！！」

楓に怒鳴られ一瞬ためらってしまふヴィヴィオ。

「ヴィヴィオちゃん・・・言いなさい！！本当の気持ち・・・正直に『生きなさい』！！！！」

楓の嘘偽りない言葉にヴィヴィオは楓に組み付きながら呟いた。

「・・・たす・・・けて・・・」

「・・・OKボス」

ヴィヴィオを突き放し構えなおす楓。

（・・・ヴィヴィオちゃんを助けるには体内のレリックを壊すしかない・・・だったら・・・あれが出るか・・・違う・・・やるんだ！！！！）

魔方陣を展開する楓。

楓の構えにスカリエッティは・・・

「ふふふ！レリックを破壊するつもりか！？そんな事が出来るはずがない」

その言葉に楓は己の魔力を暴走させ構えた。

「見せてやります！！人のみが持つ無限の可能性を！！」

「ほざけ虫けら！！」

スカリエツテイの言葉に突進するヴィヴィオに向かって楓は走った。

「（お爺ちゃんが・・・何度もはやてさんを救ったあの拳・・・）  
はああああああああ！！」

楓は迷いをふつきり全ての思いを載せたパンチをヴィヴィオに向かって放った。

「ああ！！」

ヴィヴィオの鳩尾にクリーンヒットする楓の拳。

何かが碎ける音が響き渡った。

「・・・手ごたえ・・・あり！！」

楓のダグテクターが装着を解除されるとヴィヴィオの身体が輝き始めた。

そしてくたびれた服と共に楓の腕に落ちてくるヴィヴィオ。

「すう……すう……」

穏やかな顔で眠っているヴィヴィオ。楓は少し微笑むとダグテクタ  
ーを解除した。

「……なのはさん」

ヴィヴィオを抱き上げなのはの元に歩み寄る楓はヴィヴィオをな  
はに預けた。

「ヴィヴィオ!!」

ヴィヴィオを抱きしめるなのは。

「大切な子は……もう離しちゃダメです……」

「うん！ありが……え？」

なのはが楓にお礼を言おうとした瞬間楓の姿は消えていた。

そして同時に何かが起こった。

「……風？」

なのはとヴィヴィオに温かい風が吹いたのだった。



アジトにてスカリエッティは楓の拳の事を検索していた。

「何故だ・・・完璧のはず・・・科学では図れないものがあるのもいづのか？」

そのときだった。

「なに！？」

スカリエッティの周囲に風が巻き起こった。その風は荒れ狂う嵐のような風だった。

「！！！」

スカリエッティが振り返ると其処には楓とフェイトの姿が・・・

「馬鹿な！トーレは？」

「残念ながらずっと寝てますよ・・・しばらくお話できないくらいに痛めつけておきましたから」

己の欲望の為に子どもを利用した事が楓の逆鱗に触れた。

「その傷ついた身体で私を倒そうというのか？」

正直楓の身体はヴィヴィオとの戦いでボロボロだった。同じくフェイトもトーレたちとの戦いで疲労している。

スカリエツティは爪のような腕を装着し光線を放った。

「!!!」

「避けたか・・・ふふふその身体で何処までもつかね〜」

フェイトがライオットザンバーを構えようとした瞬間楓が前に出た。

「ここは私にやらせてください」

「気をつけて！奴はまともじゃない・・・あなたのその身体じゃ！  
」

「放っておくわけにも行かない！トライダグオン！！」

再びダグテクターを装着する楓。

「!!!」

「ぐああああ!!」

スカリエツティの攻撃を受け吹っ飛ばされる楓。

「く!・・・身体がいうこと利かない」

魔力暴走や連続のダグテクターの装着で限界疲労の楓は手も足も出ない。

「もろい!もろすぎる!!!所詮これが人の限界だ!!!」

「ぐー!!うー!!」

スカリエツティの攻撃を受け蹲る楓。

「どうだ!? 造り出された者に殺される気分は!」

「ぐー!!」

再び吹き飛ばされる楓。

(このままじゃ勝ち目がない・・・一か八か・・・)

懐に飛び込み格闘戦に持ち込もうとする楓は膝を立てる。

「どうだ! 私は人を超えるものとして生み出された!」

「勝手な事言って」

「どつちがだ!! お前にはわかるまい!! 造り出され・・・弄ばれた私の気持ちや重みなど! 貴様には分かるまい!!」

あまりにも身勝手な言葉

その言葉に

「貴様あああああああ!!」

楓の中の秘められた全ての野生が目覚めた。

立ち上がり瞳が赤く光る楓はスカリエッツィに向かって走った。

楓の目が赤く発光したその時

楓の怒りが頂点に達した証拠だった。

「悪あがきを」

「この負け犬がああああああああ！！」

スカリエッツィに拳を振りかざす楓。

「黙れ！！」

楓の肩にスカリエッツィの爪が刺さるが楓は前に進んだ。

「造られた者の重み？・・・生きている人はみんな重みや地獄を背負ってるんだ・・・自分だけが背負った気になるな！！・・・ヴィヴィオちゃんやスバルを見習え！！この馬鹿野郎おおおおおおおお！！！！」

「ぐあー！！」

楓の渾身の拳がスカリエッツィに突き刺さった。

「あ・・・あが・・・」

口から大量に吐血するスカリエッツィはそのまま倒れた。

「・・・あと・・・よろしくお願いします」

「わかった……え？」

フエイトがスカリエツティを逮捕しようとしたその時再び風が吹き荒れると楓の姿が消えていた。

「……風の……使者？」

その言葉に数日間ミッドチルダで風の使者の噂が立つのだった。

天野平和科学研究所

「え？」

突然ミラクルジャンプマシンが輝くと楓の姿が現れた。楓が現れたと同時にミラクスジャンプマシンは木っ端微塵に破壊された。

「帰ってこれた？」

その時

「お姉ちゃんーん!!」

「ぐぶは!!!!」

アメフトやラグビーで世界を狙えるであろうタックルで楓に抱きつくヴィヴィオ。

（あゝ戻ってきたんだ）

ヴィヴィオの挨拶のタックルに元の世界に帰ってこれた事を実感する楓だった。

「あ！お姉ちゃんこれ上げる!!」

「これって？」

ヴィヴィオが楓にブレスレットを渡した。

「魔力制御装置！ヴィヴィオがデザインしてお爺ちゃんが作っただよー！」

「へえ」

そう言って右手首にブレスレットをつける楓は魔力が安定し身体が楽になった。

「良い感じ・・・ありがとう」

ヴィヴィオの頭を撫でる楓だった。

余談だが楓の家来宣言をはやてが物凄く止めに入ったのは言つまでもない。

第十八話 悪魔対聖王（後書き）

やってきました霧島園名物『演劇会』この日の為に子ども達は色々な出し物を考えたんだ。え？私たち大人組は何やるかって？それは勿論漫才！！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 ロボット漫才

え？なんで襲撃されるの？



## 第十九話 ロボット漫才

ある日の霧島園

「『演劇会？』」

楓に呼び出されたシズマ、スバル、舞人は茶の間を囲みながら何かの行事の事を聞いていた。

「そ！霧島園名物！『演劇会』みんなが頑張って練習して共同制作を楽しもうって行事！！」

「それで・・・俺達は何をやられば良いんだい？」

舞人の言葉に楓は答えた。

「そう！大人も参加して子ども達と一緒に物をやりきる喜びを感じるのが目的！！という訳で！！みんな頑張ろう！！」

「『・・・』」

楓の発案に目が点になるシズマ、スバル、舞人、通称・楓軍団達。

「え？何今のネーミング」

「俺達いつの間にか楓の軍団に入れられたのか？」

スバルとシズマはもう何がなんやらパニックだった。

更には・・・

「それじゃあ皆頑張ろう!!」

『頑張ろうってリーダー俺達もやるの?』

「もちのろんすけ!!」

『リーダーよお・・・』

楓に無茶を振られる楓軍団だった。

## 第十九話 ロボット漫才

翌日、何はともあれ演劇会は開始された。

「ありがとう!!」

風太郎が礼をすると子ども達はステージから退場した。

「さあ・・・いよいよ私たちの番だ・・・」

緊張するスバル。昨日徹夜で楓のセットを作るのを手伝われたのだった。

「おい! 始まるぞ」

シズマの合図でステージでた楓軍団。

今回のコントは囚人と刑務官というコントだった。

「皆さん・・・ご苦労様です今日は・・・刑務官になりました」

暗闇のステージで神妙な顔で刑務官になりきる舞人。

「総員起床！！」

電気がつくと囚人服姿で檻の中に居る楓、スバル、シズマ。

「シズマ！」

「あんだよ？」

「相変わらずその態度は・・・お前は木刀所持で逮捕されたんだぞ・・・後3ヶ月がまんしろ」

「ちえ（おい舞人・・・そんな台詞はねえだろ）」

そう言ってベッドの上に座るシズマ。

「南！！」

「はい！」

元気よく折から出る楓。

「お前は違法改造技術で5年・・・もう少し大人しくしろ」

「は〜い」

最後の房に入る舞人。

「ナカジマ！」

「はい」

元気よく出てくるスバル。

「君は・・・食い逃げで1300年の懲役だからね・・・長生きしなよ」

「は〜い長生きします！」

そう言っつて食事を取るスバル。

そんなこんなで話は進んでいくが・・・

一方

『今頃皆漫才やってるだろうな・・・』

一所懸命にお笑いのネタ考えているブロンゾン、エースチーム、ブレイバース、ファルコ達楓軍団。

『あんなに子ども達に純真な目で見られちゃ断れねえよな……』

『けど俺達に漫才なんて出来るのか?』

『今この中で出来んのかってブロンゾンだけじゃねえか?』

『しかし……リーダーが帰ってくるまでに準備だけはしたいよな』

ラリーエース、ファルコ、ビッグブレイバー、ファルコの順に会話が  
が進み。

『『『『うん……』』』』

腕を組んで一生懸命考えている楓軍団……そこに……

ズドーン

『な!なんじゃ!?!』

行き成り襲撃される楓軍団。

『楓軍団!!--貴様ら今日という今日は全滅させてやる!!--』

ゾーマの襲撃だった。

『く!こんな時にゾーマかよ!皆合体だ!!--!』

『『『おっ!!--!』』』

ブロンゾンの合図に合体体制に入る勇者達。

『青銅合体!!ブロスガー!!』

『高速合体!エースレジェンド!!』

『4体合体!キングブレイバー!!』

『チエンジ!!』

戦闘体制に入る楓軍団。

『ふん!貴様ら!!お笑いにあんなに苦労してるんじゃととと座  
布団盗られるのがオチだ!!』

そう皮肉を言いながら攻撃するゾーマ兵。

『余計なお世話じゃ!!』

ジャッククロツド振り回すブロスガー。

『未熟未熟!!』

『うるさいんじゃボケええ!!』

ターボシューティングを放つエースレジェンド。

『ファルコバルカン!!』

『シユートシフト!!』

ファルコとキングブレイバーの銃撃戦のどんちゃん騒ぎが始まった。

その頃

「ん？」

コントの途中にもかかわらず何かの銃撃音が響く。

「まさか……」

嫌な予感がしたため様子を見に行く楓。

『どうしたどうしたどうした!!』

ゾーマ兵が楓軍団に向かって凄まじい弾丸を放っていた。

『やる！気にいらねえな!!』

『抑えるエースレジェンド!』

冷静さを欠いているエースレジェンドを止めるキングブレイバー！

『こつなりや！！！！』

ブローズガーが飛び出した。懐に入られパニックに陥るゾーマ。

『我！なに銃撃ってんねん！！』

『がああ！！！！』

ジャックロッドでぶん殴られるゾーマ。

『隣の家が塀を建てたってねえ！！』

『へえ〜』

エースレジェンドに蹴られキングブレイバーにホームランされ打ち上げられるゾーマ。

そして

『いい加減に・・・しなさああい！！！！』

『ぎゃあああああああ！！！！』

剣の姿になったファルコがゾーマを貫くと凄まじい爆発を起こすゾーマ。

『出来たぞ！！お笑いの呼吸！！！！』



思わぬところでお笑いの呼吸ができた事に喜ぶ楓軍団。

『よっしゃー！このノリでいくぜー！』

『子ども達ウハウハだぜー！』

『だが的はどうする？』

『そりゃリーダーの人形で良いじゃん』

そう言っつて楓軍団が納得しようとしたその時。

「良いわけ無いでしょおおおー！」

『『『『うぎゃああああー！』』』』

突如怒った楓（等身大）に殴り飛ばされる楓軍団。

『いや！だつてリーダー！この方が子供喜ぶつてー！』

「良い訳ないでしょー！子ども達が一生懸命やってるのにそんな不真面目なネタやっちゃダメでしょー！」

凄まじくどす黒いオーラを放つ楓。その姿は300年前に現れたと言われる邪神の姿だった。

このオーラに逆らつたら怖い事になるだろうと本能的に錯覚する楓軍団だった。

「はー！しまった！またやっちゃった・・・」

邪神化した事に自己嫌悪する楓。

「ああ・・・なんでだろうな〜最近妙になりやすいんだよね・・・はやてさんのが伝染したのかな〜・・・ノアちゃんが襲撃してきた時には出さないようにしないと・・・」

実は楓も持っていた邪神モード。

公式スペック的には、はやてよりも上であるが良心が強いせいばかり出る事は無い。

個性豊かなメンバーを纏めるには、ある意味はやてのようなくとも凶太い神経が必要なのも思ってしまう楓。

尚、これ以降楓軍団の楓への印象はアホなリーダーから怒らせたら怖いリーダーになるのだった。

霧島園では

「うわ!!!」

とりあえず楓無しで段取りをこなし無事話を終わらせるが・・・

「あれまで落ちる予定じゃなかったよね・・・」

セットを突き抜けるシーンでスバルの突進力が上回りセットごと落下してしまったのだった。

夜

楓は小さい頃から疑問に思っていた事がある。

「何で私に邪神モードがあるんだろう・・・」

第十九話 ロボット漫才（後書き）

楓

「こんな所に呼び出して・・・大地あなたなの？」

大地

「この阿婆擦れ・・・今日こそ殺す」

楓

「大地！聞いて！！今は私たちでいがみ合ってる時じゃない！！」

大地

「うるせえ！！」

楓

「！！ゾーマ！！大地！危ない！！」

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 六人目の馬鹿

楓

「・・・わかった・・・決着をつけましょう・・・大地」

## 第二十話 六人目の馬鹿

ある日の霧島園

「　　」

鼻歌歌いながら暢気にチャーハン作っている楓。するとチャーハンを作っている中華鍋を持っている手の動きに注目した。

「閃いた!!」

## 第二十話 六人目の馬鹿

「新技の披露？」

「いったいどうして？」

霧島園の茶の間に集められたスバル、舞人、シズマ、ヴィヴィオ。ちやぶ台にはスイカが並べられていた。

「これお姉ちゃんが手刀で斬ったんだよ！」

「へえ〜それ凄いね〜見てみたい!!」

凄まじく綺麗に切り分けられているスイカ。ヴィヴィオの喜んでい

る姿にスバルも見てみたいと思うが・・・

「いや、私曲芸を披露してるわけじゃないから・・・で、私の必殺技なんだけど・・・ん？」

何かの気配を感じる楓は表に出るのだった。

「お姉ちゃん!!」

慌てて楓を追いかけるヴィヴィオ。

霧島園から離れた草原

「大地・・・」

楓が感じた何かの気配・・・それは大地のことだった。

「・・・久しぶりだな・・・楓・・・」

「大地・・・どうして？」

「……知ってるだろ？俺たち南家は人を不幸にすることしかできねえ……離れてやるのが情けなんじゃねえか？」

大地の悲しい言葉に反応する楓。

「大地……どうしてそんな悲しいこと言うの？」

「……お前のせいだ……」

「え？」

「お前のせいで……俺は裏切られ続けてきた……お前に踏みにじられた……もうウンザリなんだよ……お前をここで倒す！」

憎しみをこめた大地の瞳に楓は決意した。

「……わかったよ……大地」

大地と向かい合う楓はダグコマンダーを握り締める。

「……姉貴……」

「……私はあなたの気持ちを踏みにじったかもしれない……けど……私は決してあなたを裏切ったりはしない！！！」

ダグコマンダーを起動させダグテクターを装着する楓。

大地もジェノサイドアーマーを装着し楓と対峙した。

「・・・大地・・・あなたは本気で誰かを信じた事がない」

「・・・うるせえ・・・」

「だから誰からも信じられない・・・」

「うるせえ!!」

「けどね・・・私は大地を信じる!!」

「うるせえ!!」

楓に飛び掛る大地は蹴りを放つが楓は受け止め突き放す。

「はああああああ!!」

「うおおおおお!!」

楓の拳と大地の蹴りがお互いの身体に突き刺さる。大地のほうに立ち上がり楓を踏みつけるように蹴った。

「く!!・・・うああああああ!!」

楓は大地の蹴りを腕を交差させ受け止めそのまま大地をひっくり返した。

「食らええええ!!ゼンクデックバイス!!!」

大地の拳からエネルギーが放たれ楓は吹き飛ばされる。



そしてお互いにビークルを召喚した。

『合身！デスライカー！！』

『疾風合体！ストームダグオン！！』

合体しお互いに向かうストームダグオンとデスライカー。

『メガストームパンチ！！』

『グランドクロス！！』

誰かの力を頼らないストームダグオン自身の技で強襲するがデスライカーのデスランサーがストームダグオンを斬った。

『う……く……』

デスライカーの一撃に撃破されるストームダグオンは蹲った。

(……だめ……私だけの力じゃ……勝てない……)

デスランサーをキャノン砲に変形させるデスライカー。

『……お前は所詮そこまでだ……』

ストームダグオンに向けられるデスキャノン。

その時デスライカーに4つの攻撃が浴びせられた。

その先にいたのは……

『みんな!!』

ストームダグオンの先にいたのはライフルを構えたプロズガーがエースレジェンドがキングブレイバーがファルコが……そして駆けつけたヴィヴィオが居た。

『リーダーが俺たちを裏切るかなんて知らねえ……いや……例えそうでも……俺たちはリーダーを信じる!!』

そう叫ぶプロズガー。

『もしリーダーが俺たちを踏みにじるなら……俺はそんな事を見抜けなかった俺を攻めるね!!』

エースレジェンドも叫び。

『俺は踏みにじられてもいいぜ……リーダーにならな』

優しく叫ぶファルコ。

『俺達はな……上辺だけの絆じゃねえんだ……みんな仲間なんだ……』

キングブレイバーの言葉に涙を流すストームダグオン。

『……お前ら……ち!!』

デスライカーがストームダグオンにキャノンを向けるが仲間達はス

トームダグオンを守るように立ちはだかる。

その姿を見たデスライカーはキャノンを下ろした。

『大地……』

『……お前の姿を見ていたら……何だか羨ましくなってきたよ……やっぱりお前と俺は決定的に違うみてえだ……』

デスライカーの皮肉のような言葉。

その時だった

『ダグオン抹殺!!』

空から奇襲をかけてくるゾーマ兵。ゾーマ兵はデスライカーに攻撃を仕掛けようとするが……

『大地!!』

『く!!……お前!!』

デスライカーを庇ったトームダグオン。ダメージが刻み込まれていた。

『『『リーダー!!』』』

仲間たちが駆け寄ろうとするが……

『待つて!!』

仲間たちを止めるストームダグオン。

『大地・・・無事?』

『お前・・・なんで・・・』

『だって・・・大切な【弟】だもん・・・』

その言葉にデスライカーはストームダグオンを抱き起こした。

『・・・相変わらず能天気な奴だな・・・【姉貴】!!』

『大地・・・』

『一々口出すんじゃないやねえ・・・行くぞ!!』

『うん!!』

デスライカーの言葉に立ち上がるストームダグオンは二人同時にゾーマ兵に飛び掛った。

『はあ!!』

『りゃ!!』

『!!』

ゾーマ兵を両サイドから掴み取りストームダグオンとデスライカーは跳躍し仲間たちと離れたところに行った。

『ストームガンビーム!!』

『シューツ!!』

二人の一斉射撃が放たれるがゾーマ兵は防いだ。

すると何かを思いついたストームダグオン。

『大地・・・』

『あ?』

『ん!あ!あ!あ!あ!あ!!ん!!』

『あ?あああ?あ?』

何か変な言葉で理解しあうと立ち上がり構えるストームダグオン、  
デスライカー。

『『うおおおおおおお!!』』

ストームダグオンが後方、前方をデスライカーが一行で突き進むと  
ゾーマ兵はビームを放つが大地が先に銃撃しゾーマ兵の動きを止め  
るとストームダグオンがジャンプした。

『!!!』

デスライカーが腕を交差させるとストームダグオンを押し出すよう  
に弾き凄まじいジャンプを生み出した。

『飛鳥さんから教えてもらった必殺の跳び蹴り!!』

飛鳥譲りの強烈な蹴りで吹っ飛ばされるゾーマ兵。デスライカーと並び立つストームダグオン。

『よ!大地!よくわかったね』

『・・・てめえのやりたい事は大体わかる』

力譲りの奇妙な言葉・力語を楓語として発し、力に対する飛鳥のごとく解読した大地。

『!!!』

そしてゾーマ兵が立ち上がると・・・

『行くよ!正式になった私の超必殺技!!』

空手の構えを取るストームダグオンは右拳を風の魔力とエネルギーを纏った。

『レイソニック!!ウェーーーーブ!!!』

ストームダグオンの右拳の連打から放たれる真空波の連打が宇宙人に突き刺さった。

『おりゃおりゃおりゃおりゃおりゃおりゃ!!!!!!』

素早く正確な楓の右ストレートから放たれる真空波の連打がゾーマ兵の内部を破壊していくと・・・

『チエストーリーー!!!』

『うぎゃあああああああああ!』

散々真空波で殴りつけた拳句弱って大人しくなった所に渾身のストレートを直接叩き込むストームダグオン。

ゾーマ兵が倒れると凄まじい爆発を起こし戦いが終了した。

楓と大地の元に駆け寄るヴィヴィオ。

「お姉ちゃん!すごい!いつの間にあんな技を?」

「・・・大方チャーハンでも作って思いついたんだろ?」

「へ?」

大地の言葉にあっけらかんとするヴィヴィオ。

「昔からそうなんだよ・・・コーヒークップに乗ったら旋風脚とか・・・逆上がりしたらサマーソルトキックとか・・・」

楓の発想の柔軟さに驚くヴィヴィオだった。

「・・・大地・・・私たち・・・今からでもまた姉弟なれないかな?」

楓の言葉に・・・

「わからない・・・けどな・・・決着がつくまで・・・精々ゾーマにやられない事を祈ってるぜ・・・姉貴・・・」

その言葉を残し立ち去る大地。

『リーダー!!』

大地が立ち去ったと同時に駆けつけた勇者たち。

『リーダー!ここに大地が居たよな!?!』

「さあ・・・ここに居たのは新しい仲間です八神組の六人目の馬鹿だよ?」

楓の言葉に全員が・・・

「お前か?」

ヴィヴィオを見るのだった。



第二十話 六人目の馬鹿（後書き）

ある日のことでした・・・私は誰かに呼び出されました。相手は山脈地帯に潜んでて子供たちを誘拐した！！これは一体！？

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 山に潜む影

子供をさらうなんて許せない！！

第二十一話 山に潜む影

地獄山

「はあ・・・はあ・・・!!!!」

子供が山の中を必死に逃げている。その姿は何かを追われていた。

「あう!!」

転んでしまう子供にその追跡者は詰め寄った。

第二十一話 山に潜む影

霧島園

「んしょんしょ」

何やら格納庫で機械をいじくっている楓。

『リーダー何やってるんだ？』

ラリーエースが見てみると巨大なトレーラーを作っている楓。

『リーダー……どっからそれ持ってきた……まさか盗んだんじや！！』

「人聞きの悪いこと言わないでよ！これは！ちゃんと私が正規の手続きで手に入れたハンドメイドだよ！光子力研究所でアルバイトやミツキさんから要らなくなったパーツ回してもらってようやく出来たんだから！！」

『勉強』以外はなんでも出来る楓は近日積極的にアルバイトを始めた。

その理由は……

「そろそろね、あいつの誕生日だからねえ……」

そう言ってトレーラーを点検する楓だった。

「よし！完成！！」

その時だった。

「え？管理局から？」

通信端末を繋いだダグコマンダーで確認すると・・・

「秘密回線・・・ごめん！ちょっとよろしく！！」

『おい！リーダー！！』

ラリーエースが止めるのを聞かず楓はストームバンディットに跨り出撃した。

ダグコマンダーに表示されていたのは・・・

「『数日間私の住む村の頂が赤く光っていました。その時私の友達が怪獣にさらわれてしまいました。ダグオンさん！助けてください！！』・・・急がないと」

悪戯メールとして届いたのか管理局は動かない。飛鳥のやったように自分の眼で見て判断することにした楓は村に向かって走った。

「・・・着いた」

メールにあつた山を見るとサーチを始めた。

「金属反応はないか・・・今のところ動体反応も無い・・・直接行って調べてみるか・・・ん？」

何かの気配に気づき振り返る楓。するとそこには楓の姿を見ていた少女が居た。

「!!!」

少女は楓が気づいた事に驚くと逃げ出した。楓は咄嗟に少女を追った。

「待つて!!・・・は!!」

少女の前にジャンプして止める楓。

「どうして逃げるの?」

「私は!何も知らない!!知らない!!」

「まさか・・・あなた?管理局にメールを送ってくれたの?」

「え?」

楓がメールを見たことに驚く少女は観念して話し始めた。

「この前・・・赤い光の正体を見ようって頂に登ろうって頂に上ったら・・・変な怪物が襲ってきたの・・・私・・・怖くて・・・逃

げちゃって……みっちゃんも置いてきちゃって……」

おびえている少女に楓は優しい笑みで言った。

「誰でも怖い時はあるよ」

「……お姉ちゃんにも？」

「うん……私が調べる。霧島園ってところに連絡してくれる？」

「うん！」

少女が元気よく答えると近くの通信端末まで向かい、楓は山の中に入った。

山道の森に入った楓は周囲を搜索し始めた。

「……今のところ異常なしか……あの子の目……嘘をついてるような目じゃなかったな」

そう言って楓が周囲を搜索していると……

「うわー!!」

足元からロープが現れ楓の足を捕らえ逆さ宙吊りになってしまった。

するとぞろぞろと出てくるゾーマ兵。

「ゾーマー！やっぱり！ー！」

急いで罨をはずそうとする楓だが上手くない。

ゾーマ兵は楓に詰め寄ると・・・

ドンー！！

楓を吊り下げていたロープが撃ち砕かれ楓が落下すると楓を受け止める人物が・・・

その人物は・・・

「大地！」

「よっ」

楓を下ろす大地。それを確認するとゾーマ兵は楓と大地に襲い掛かった。

「どづしてここに？」

ゾーマ兵を倒しながら質問する楓。

「・・・おめえがあんまりにも遅いんで・・・勝手に調べてたぜ」

ゾーマ兵を蹴り飛ばす大地。

「まるで遊園地みたいだぜ。あちこちに遊具がある!」

「へえ……それは楽しみ!! 竜巻拳!!」

楓の竜巻がゾーマ兵を一掃する。

「仲間が皆こっちに向かっている」

「不味いぞ……遊具にはまったら命は無い」

「皆をお願い!」

「え? おい! 待てよ!」

大地に全ての厄介ごとを押し付け楓は前に進んだ。それを見送る大地は……

「たく……相変わらず勝手な女だ」

そう言って笑みをこぼす大地だった。

山道

『たく……リーダーも人使いが荒いぜ』

『全く』



ブロズガー、エースレジェンドが周囲を散策しながら山道を進むと・

『ん!?!』

「よ!」

キングブレイバーが何かに気づくと大地の姿が・・・

『てめえ何しに着やがった!?!』

「そう邪険にするなよ。この辺りは仕掛けだらけだ。案内してやるから着いて来い」

そう言う大地だがエースレジェンドは・・・

『敵か味方かわかんねえお前の言うことを信じるほど俺はお人よしじゃねえ』

「おいおい・・・親切心で教えてやってんだぜ」

今まで楓に反抗し続けた大地を信用できない楓軍団。それを見た大地は・・・

「んじゃ・・・好きにすれば」

『ああ!勝手に行かせてもらっ』

そう言って先に進む楓軍団・・・その時楓軍団の全方位からレーザービットが発射され楓軍団を襲おうとした。

「!!」

大地の銃がビットを破壊し楓軍団を守った。

「どうだ？これでも敵か味方かわかんねえか？」

『ち』

不本意ながら大地の道案内で先に進む楓軍団だった。

頂にたどり着いた楓は周囲をみると巨大なレーザー砲基地を発見した。

「これか・・・トライダグオン!!」

楓がダグコマンダーを起動させると翡翠のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われた。

「ストームカエデ!」

楓がダグテクターを装着すると少女の言っていた怪物が姿を現した。

『疾風合体!!』

ダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエエ！！』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。拳が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン！！』

怪物の前に降り立つストームダグオン。

『ストームガンビーム！！』

怪物を攻撃するストームダグオンすると怪物は恐竜の姿を現した。

『恐竜型？く！！』

恐竜型宇宙人の尻尾に締め付けられるストームダグオン。

すると

『『うおおおおおおおお』』

キングブレイバー、ファルコが恐竜宇宙人を蹴り飛ばした。反動で離されるストームダグオン。

『キングブレイバー！ファルコ！！』

『リーダー！お待たせ！』

『子ども達は！？』

『多分中！救出お願い！！』

『了解！！』

ファルコとキングブレイバーが中を散策すると子供たちが囚われていた。

『こつちだ！！』

ブレイバースに乗り込む子ども達。するとファルコがあることに気づいた。

『まずい・・・これはクラナガンに照準が合わされている』

今回のゾーマの作戦はレーザー砲基地による首都壊滅だった。その為目撃した子供たちをさらい人質にしていたのだ。照準を変えようとコンピューターを操作するファルコ。

子ども達はブレイバースによって脱出が完了していた。

『よし・・・機能は停止した』

ファルコも撤退した。

表では

『ターボシューティング！！』

『ジャッククレイブン！！』

エースレジェンドとブロズガーが周辺のゾーマ兵の一掃を図っていた。

『しかし良いのか？あいつに行かせて・・・』

『ま・・・やる事はやっておこつよー!!』

ブロズガーはエースレジェンドに呑気に返した。

『てあああ!!』

恐竜宇宙人を蹴り飛ばすストームダグオンだがパワーが足りない。すると・・・

『デスランサー!!』

デスランサーで恐竜宇宙人を傷つけるデスライカーの姿が。

『大地!!』

『よ』

ストームダグオンと並び立つデスライカー。すると恐竜宇宙人は二人に襲い掛かった。

『』とお!!』

恐竜宇宙人の攻撃を回避するストームダグオンとデスライカーはフ

オーメーションに入った。

『行くよ大地！！サイクロンノヴァー！！』

ストームダグオンの胸から発射される竜巻にあわせる大地は腕に力を籠めた。

『ランドスマツシャー！！』

デスランカーが地面に拳を叩きつけると凄まじい衝撃波が放たれ恐竜宇宙人を吹き飛ばした。

しかし

『ぐう！！』

恐竜宇宙人の尻尾がドリルのように回転しデスライカーの身体を貫いた。

『大地！！』

「ぐう！！」

咄嗟にデスライカーから分離し地面を転がり落ちる大地。ジェノサイドアーマーも火花を上げていた。

『うおおおおおおお！！』

大地を逃がすべくストームダグオンは恐竜宇宙人に体当たりをするがパワーが足りない。

「やる・・・」

立ち上がる大地だが戦う術が無い。

その時

『大地！これ使って！！』

ストームダグオンの腕から何かのユニットが発射され受け取る大地。

「これは！？」

『今日誕生日でしょ！私からの誕生日プレゼント！あなたのジェノサイドアーマーのノウハウを取り入れて作った勇者のダグオンアーマー！名づけてDアーマー！！』

高々と宣言するストームダグオンに大地は・・・

「相変わらず・・・アホな姉貴だな・・・俺の誕生日は来月だ！！・・・セットアップ！！」

そう宣言しDアーマーを装着する大地に未知なるパワーがあふれ出した。

「これは・・・」

大地のゴーグルに一台のトレーラーが映し出された。

「使えつてのか・・・来い！！Dトレーラー！！」

大地の叫びと共に霧島園の格納庫から発進するDトレーラーは即座に大地の元に駆けつけると大地は乗り込んだ。

そしてトレーラーがコンテナを切り離しロボットに変形し大地と一体化する。

新しい姿になった大地。

するとあることに気づいた。

『て！おめえこれジンライじゃねえか！？』

『え？あんた昔ジンライになりたいって騒いでたじゃん！んで玩具だつていっぱい買って・・・』

『だからって現実にするんじゃないやねえ！！』

幼き頃の夢を現実にされ激怒する大地。

だが楓の作ったジンライのバッタ物がディスプレイカーの数倍の力を秘めているのも事実だった。

『うおおおおおおお！！！！』

恐竜宇宙人の足を押さえる大地。そしてそのまま恐竜宇宙人を投げ飛ばした。

『すげえパワーだ・・・これなら』



『気に入った？流石お爺ちゃん譲りの馬鹿力』

『てめえこそ爺さん譲りの殺人パンチの癖にな』

『ははは・・・それじゃあ・・・』

『だな・・・合体!!!!』

大地のコンテナがボディに変形すると大地と一体化しスーパーモードが起動した。

『グルルル!!!!』

恐竜宇宙人がレーザー砲を背にストームダグオンと大地に向かって走ってくる・・・

『決めるよ！大地!!!!』

『おう!!!!』

超伝導ライフルを構える大地は大地のエネルギーを身体に集め始めた。

『行くよ！超必殺!!!!』

空手のような構えを取るストームダグオン。

『天・・・地・・・』

天と地の微粒子化した魔力を身体に蓄える大地。

『レイソニック・・・ウエーブ!!』

ストームダグオンの連打から衝撃波が放たれ恐竜宇宙人を足止めする。

『アース!グラビトン!!』

全ての魔力を一気に解き放つ大地。

『チエストー!!』

大地の放ったエネルギーを纏いながらトドメの拳を恐竜宇宙人に叩きつけるストームダグオン。

『ギシャオオオオオオオオオオオオ!!』

そのままエネルギーと共に恐竜宇宙人はレーザー砲基地と共に飲み込まれ爆発を起こした。

戦いが終わり子ども達は皆親元に帰り少女の友達も少女と再会した。

「良かったな」

「だな」

「ていうか・・・これ貰って良いのか?」

Dトレーラーを見てそう言う大地。

「良いの良いの！プレゼントで作ったし。それに勇者がデス何て縁起が悪いよ。Dはダグオン・・・つまり勇者のDで」

「アホ姉」

呆れる大地。

「その内ボンバーの方も作っておくから、名前考えておいてね」

「そこまで再現するな！！」

そう絶叫する大地だった。

## 第二十一話 山に潜む影（後書き）

今日は、新作のお披露目、え？何のお披露目かって？それは勿論！私の最終兵器！無限砲のお披露目！ガンキッドの動力を元に皆で作ったんだけど・・・え！？ストームダグオンじゃ反動に耐えられない！？メタルダグオンはスバルにあげちゃったし・・・え？スバルが使うの？

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 誓いの無限砲

スバル・・・無限砲・・・託したからね！

## 第二十二話 誓いの無限砲

### 第二十二話 誓いの無限砲

天野平和科学研究所にて

「うんしょ……こことここを繋いで……」

何やら格納庫で巨大な大砲を整備している楓と楓のアシスタントをしているヴィヴィオ。

「お姉ちゃん！このパーツこっちでいいの？」

「うん！そこにおいて？」

大砲のパーツを置くヴィヴィオとそのパーツで整備を始める楓。

「楓姉ちゃん！」

「あ！ケンちゃん！」

格納庫を訪れたケンタと付き添いのシズマ。

「楓姉ちゃんのこれなあに？」

ケンタの質問に答える楓。

格納庫で整備されていたものは新装備・無限砲

全長15メートル・重量30トン

初代ダグオンメンバーの一人・ガンキッドのノウハウを地球の技術で再現し無限砲モードのみとして造り上げた巨大大砲。

「実はこれ・・・ストームダグオンじゃ撃てないんだ」

「へ？何で？」

ケンタの質問に楓が説明した。

「元々ストームダグオンは近接戦闘型の業師タイプだから無限砲の反動に耐えられないんだ・・・例えるんだったら・・・グランバードがグランキャノン千発を一発にして撃つ反動に耐えるようなもんだよ」

「千発を一発って・・・ミラクル凄いじゃん」

楓の言葉に啞然とするケンタ。するとシズマが・・・

「お前・・・んな極端な例えしか出来ねえのかよ？」

「だってその方が分かりやすいじゃん」

「なるほど」

楓の意見に納得するシズマ・・・その時マイナスエネルギー探知機

が作動した。

『緊急出動！天野レスキュー臨時隊員一号！二号！出撃じゃ！』

天野博士の指令に出撃体制に入る楓とシズマ。

「ところで？どっちが一号？で二号？」

「どっちでもいいだろ」

楓のポケをツッコム、シズマだった。

『でっはっはっは！！』

ジャンゴがロボットに乗り暴れまわっていると・・・

『そこまでだ！！』

駆けつけるストームダグオンとセイバーヴァリオン。

『きおったな！ダグオン！最後の剣！！新装甲！スパルタンXの力  
見せてやる！！』

ジャンゴが突進してくると・・・

『受けてたつよ！メガストオオム・・・パアアンチ！！』

拳に風のエネルギーを纏い突撃するストームダグオン。

『でえええい！！』

『うおおおおおおお！！』

ストームダグオンの拳がジャンゴに突き刺さろうとしたその時。

ガキン！！

『な！！』

ジャンゴのロボットがストームダグオンの拳を弾いた。

『メガストームパンチが・・・効いてねえのか？』

ストームダグオンの技が弾かれたことにシズマも驚きを隠せない。

『ふん！このスパルタンXを甘く見るな！！死ねいダグオン！！』

『うわあああああ！！』

ジャンゴに吹っ飛ばされるストームダグオン。

『楓！やる！ディスチャージャーキャノン！！』

セイバーヴァリオンの攻撃がジャンゴにヒットするが後ずさるだけ



で効果が無い。

『こつなつたら・・・無限砲!!!』

楓のコールと共に天野平和科学研究所から射出される無限砲はストームダグオンの腰に連結した。

『新兵器か？撃てるもんなら撃つてみる!!!』

ジャンゴの挑発にストームダグオンは照準をあわせた。

『ターゲットマーク・・・ファイア!!!うああああああああああああああああああ!!!』

無限砲を放つが反動で吹っ飛ばされあらぬ方向を撃ってしまうストームダグオン。だがそのエネルギー量は凄まじくいかに新装甲といえど食らったら消滅してしまいかねないエネルギーだった。

『く！退却だ!!!』

無限砲の威力を見たジャンゴは形勢不利と判断し撤退するのだった。

天野平和科学研究所

「つまりこついう事かな・・・無限砲を撃てるのは今はメタルダグオンしか居ないって事？」

「・・・うん」

研究所のロビーでスバルと話す楓。

「正直・・・私のダグビークルに合わせて設計されてるから私のエ  
ネルギーじゃないとその最大の力を発揮できない・・・」

楓の言葉にスバルが・・・

「私が撃つ！」

「へ？」

「今使えるのが私のメタルダグオンだけなら私が撃つ」

そう決意しメタルダグオンの砲戦改造に移ろうと格納庫に向かった。

### 格納庫

「・・・・・・・・」

大地がモニターでジャンゴの作った装甲の威力を検証していた。そ  
こに現れた楓とスバル、そしてアシスタントのナンバーズ。

「・・・大地！」

「てめえそこで何やってんだ!？」

ノーヴェエの言葉に大地は・・・

「メガストームパンチを弾き返す装甲スパルタンXか・・・今の状態じゃ勝てない」

挑発するように答える大地にノーヴェエが・・・

「余計なお世話だ!!」

次の瞬間大地はノーヴェエに持っていたティアナのヘアスプレーを煙幕にしノーヴェエを軽くあしらった。

「て！卑怯もん！」

あしらわれた事に激怒するノーヴェエだが大地の戦い方にもっと激怒した。

「卑怯か？甘いな・・・戦いはスポーツじゃない!!」

「!!」

大地の言葉に焦りを感じるメンバー。

「敵はお前たちを殺す為に毎回攻めてきてるだぞ・・・時間ばっかりかかる機械的な力じゃ勝てない」

「え？」

「自分の中の秘められた力でも解放するんだな」

そう言って大地は去っていった。

その時再びマイナスエネルギー探知機が作動し出撃する楓たち。

『ではっはっはっは！！』

ジャンゴが新装甲スパルタンXを量産し軍団を編成し攻めてくると・

・

『待った待った待った！！』

『何奴！？』

ジャンゴが振り返るとそこにはメタルダグオンの姿が・・・

『きおつたなダグオン！！やれ！！』

ジャンゴの指示にメタルダグオンに向かっていく軍団だが・・・

『てええい！！』

メタルダグオンの拳に貫かれる軍団口ボ。

『くう！やはり量産型の劣化版では弱いか・・・』

量産型に劣化させて作業効率を上げたせいかオリジナルよりは弱くなっただよっただ。

「スバルここは私に任せて！」

「わかった!!」

楓の指示でスバルはジャンゴに向かって突撃し楓はストームバンデ  
イットで軍団を引き付けた。

しかし

「数が多すぎて合体してる暇がないよ〜!!」

荒野を逃げ回る楓。すると一体の軍団ロボが爆発した。

その先には

「大地!？」

楓の視線の先には銃・インパルスマグナムを構えた大地の姿が・・・

「・・・俺もお前たちが気に入ってるんだぜ」

Dコマンドーを構える大地は楓と背中合わせになるように構えると  
軍団ロボは取り囲むように構えた。

「やろう!大地!」

「!!」

楓の言葉にサムズアップで答える大地はセットアップしDアーマー  
を装着した。

「迅雷!!」

大地が叫ぶと駆けつけるDトレーラー。あまり名前を変えたくないのか漢字で迅雷と命名したDトレーラー。

楓もストームガードを投げると合体制に入った。

『疾風合体!!』

『合身!!』

楓はストームダグオンに合体し大地は迅雷に武装した。

『ストオオオムダグオン!!』

『迅雷!スーパーモード!!』

合体が完了し取り囲む敵に構えるストームダグオンと大地。

『ストームダグオン!この俺を使い!!』

ストームダグオンの元に何処からともなく駆けつけたファルコが剣になりストームダグオンの元に突き刺さる。

『行くぜ!アースグラビトン』

母なる大地に根を張るように自分自身を大木とし大地の力を吸収する。

『ストームファルコソード!!』

大地からファルコソードを引き抜き、大いなる嵐を巻き起こすストームダグオン。

『はあ!!!』

超伝導ライフルから発射されるアースグラビトン。

『奥義! 疾風一閃!!!』

次元嵐の一閃で軍団ロボを薙ぎ払うストームダグオン。

その一方

『うおおおおおおお!!!』

『ぐう!!!』

パワーと攻撃力ではストームダグオンを圧倒的に上回るメタルダグオンがジャンゴを殴りつけている。

『おのれ!!!』

『いくよ! 磨きに磨いた必殺技!!!』

空手の構えを取るメタルダグオン。

『必殺! 振動おおおおけええん!!!』

メタルダグオンの振動拳がジャンゴにヒットするが……

『バカめ！オリジナルには効かん！』

『一発でダメならああ！！！！』

振動拳をレイソニックウェーブのような連打でジャンゴに放つメタルダグオン。

『おりゃおりゃおりゃ！！！！』

『な！速い！速すぎてパンチが避けられない！！うおおおおおお！！！！』

メタルダグオンに押し切られ吹っ飛ばされるジャンゴ、スパルタンXを持ってしても完全に防ぎきることができなかった。

『行くよ！無限砲！！！！』

天野平和科学研究所から射出される無限砲はメタルダグオンの左肩に連結した。

『ばかめ！そんな使えない代物！！！！』

『やってみないとわかんないよ！！！！』

無限砲にエネルギーがチャージされていく。

『ターゲットマーク！ファイアー！！！！』

反動に耐え切りジャンゴに直撃させるメタルダグオン。



「くそ！おぼえている！！」

脱出ポットで逃げるジャンゴをよそにメタルダグオンの無限砲が光った。

「まさか・・・私にも使えたなんて・・・」

無限砲を撃てた事に驚いているスバル。その考察に楓が・・・

「うーん・・・もしかしたら単純な力だったらスバルのほうが上かも・・・思いつ切りがいいし」

「それって私単純な怪力女じゃん！」

楓の言葉に目を丸くするスバル。

「まあまあ・・・けど・・・私も修行すればストームダグオンでも撃てるようになるかも・・・それまでこれ預けていい？」

「私に？」

「スバルなら正しく使えるし！」

「わかった！無限砲は私が預かる！！」

そう言って楓から無限砲を譲り受けたスバルだった。



## 第二十二話 誓いの無限砲（後書き）

あれ？シズマ？何してるの？・・・て！何あれ！？黒いセイバー  
ヴァリオン・・・シズマが町を破壊してる！どうしちゃったのシズ  
マ！？え？向こうにもシズマが？

次回！勇者指令ダゲオンA's 風の詩 シズマ対ゴウマ

シズマが・・・二人？

## 第二十三話 シズマ対ゴウマ

クラナガン路地裏

「はぁ！はぁ！！！」

一人の男性が路地裏を逃げ回っていると足元に衝撃が走った。

「うわあ！！！」

衝撃波に転げ落ちてしまう男性にジリジリと詰め寄る影・・・

「やめろ！！うわああああああ！！！」

男性の絶叫が響き渡るのだった。

## 第二十三話 シズマ対ゴウマ

霧島園

「連続通り魔事件？」

『ああ・・・最近クラナガンの住民が襲われてるんだってよ』

ラリーエースの情報に考え込む楓。

『リーダー・・・この間その通り魔が乗ってたロボットがこれだつてよ』

モニターに映し出されたのはセイバーヴァリオンだった。

「セイバーヴァリオン？」

『まさか・・・シズマの奴が？』

「そんなわけ無いよ！シズマがそんなことするわけない！！」

犯人のロボットとして映し出されたセイバーヴァリオンに驚きを隠せない楓軍団。

『セイバーヴァリオン持ってんのなんて・・・シズマしか居ないぜ？』

ラリーエースの言葉に考えた楓は・・・

「わかった・・・調べてみるよ・・・もし本当にシズマが犯人なら・・・その時は容赦しない」

そう言ってクラナガンの街へ出向く楓だった。

夜のクラナガンの街では通り魔事件の影響のせいで警戒が厳重になつてた。

楓もストームバンディットで街をパトロールしていると・・・

「うわあああああああああー！」

何者かの悲鳴が聞こえすぐさま現場に急行した。

「！！」

楓が路地裏の現場に到着するとそこには木刀を持ったシズマの姿が・・・

「シズマ！これは！？」

「楓？」

楓は目の前のことに驚愕した。シズマの目の前に傷つけられた局員の姿があつたからだ。

「まさか・・・シズマ！」

「違う！俺じゃない！！・・・と言っても信じられねえだろうが・・・ん！あいつー！！！」

「待つてシズマー！！！」

何かを感じ取つたシズマが路地の奥に向かうのを追いかける楓。

「どっくに!?!」

楓が先行したシズマを見失うと背後から凄まじい殺気を感じ取った。

「!?!」

衝撃波が放たれると楓は咄嗟に避けた。

「ここじゃ狭い・・・く!?!」

楓は路地裏から出ると強襲者を確認した。その人物は・・・

「シズマ?」

「・・・」

木刀を構えたシズマが楓に襲い掛かった。シズマの攻撃を避ける楓。

「なんで・・・シズマ・・・どうして!?!」

ニヤリと笑いながらシズマが楓に飛び掛ると避けきれなくなった楓。

「!?!」

シズマの木刀が楓に襲い掛かったその時。

「うおおおおおおお!?!」

何者かがシズマの木刀から楓を守った。

その人物は・・・

「シズマ!!」

楓は目の前の出来事に驚愕していた。楓に襲い掛かってくるシズマと楓を守ったシズマ・・・シズマが二人居る事に・・・

「シズマが二人?・・・どうして!!」

「やっぱりテメエか・・・ゴウマ!!」

「ゴウマ?」

楓を守ったシズマが楓に襲い掛かったシズマに向かってゴウマと叫んだ。

「楓!奴は俺じゃねえ!俺の身体を基に作られた暗黒剣ゴウマだ」

「ふふ・・・久しぶりじゃねえか・・・シズマアア!!」

そう叫びながらシズマに襲い掛かるゴウマ。シズマとゴウマの木刀が交差する。

「てめえ・・・なんで生きてやがる!!あの時倒したはずだ!!」

シズマの疑問にゴウマはニヤリと答えた。

「シズマ、俺はゴウマであってゴウマじゃねえ・・・ゴウマの記憶と身体を取り込んだ魔王バルドーの化身だ!!」



「なに!?!」

「かつて・・・テムエに倒されたバルドールは再び身体を求めた・・・そこにちょうどあったのはゴウマの記憶・・・ゴウマの記憶を元にこの身体を再現したのよぉ・・・シズマ! てめえをぶっ潰す為になあぁ!?!」

そう叫びながらゴウマはブレスを輝かせた。すると天から黒いセイバーヴァリオンが舞い降りた。セイバーヴァリオン に乗り込むゴウマ。

『シズマ! 今度こそテムエをあの世に送ってやるぜ!?!』

ラダーブレイドを構えるセイバーヴァリオン。

「バルドールの野郎・・・ゴウマの記憶を取り込んでゴウマそのものになりやがった・・・楓! 行くぞ!?!」

「うん!」

「セイバー・・・チェンジ!?!」

シズマのブレスが輝くとスカイソニック、ランドファイヤー、マリンスピーダーが各パーツに変形しヴァリオンがスカイソニックに吸収される。

瞳が輝くと完成する戦士。

「セイバアアアア! ヴァリオン!?!」

『疾風合体!!』

ダグストームが飛び上がるとダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエ!!』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。腕が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストオオオム!!ダグオン!!』

セイバーヴァリオン の前に降り立つセイバーヴァリオンとストームダグオン。

『行くぜ!ゴウマ!!』

『ははははは!!』

セイバーヴァリオンとセイバーヴァリオン のラダーブレイドが交差しあつ。しかしセイバーヴァリオンのほうを押されてしまう。

『く!野郎・・・前よりも強力になってやがる・・・』

ラダーブレイドを構えなおすセイバーヴァリオンにセイバーヴァリオン は・・・

『弱くなったなあ・・・シズマあああ!!』

セイバーヴァリオンにラダーブレイドを振り下ろすセイバーヴァリオン すると……

『うおおおおおおおおおお！！』

ストームダグオンがファルコソードでセイバーヴァリオンを守った。

『ストームダグオン！』

『シズマ！行くよ！』

『おう！！』

ラダーブレイドで円を描くセイバーヴァリオンとファルコソードで次元嵐を巻き起こすストームダグオン。

『破邪滅殺！虚空烈破！！』

『奥義！疾風一閃！！』

セイバーヴァリオンとストームダグオンに両断されるセイバーヴァリオン。

『ち……シズマ！これで終わったと思うなよ！シズマアアアアア！！』

爆発するセイバーヴァリオン。

『シズマ……ごめん……疑っちゃって』

シズマに謝罪するストームダグオン・・・だが・・・

『楓！まだ終わっちゃいねえ！！』

『え！？』

シズマの叫びと共に爆炎から飛来する邪悪なる剣。

そのままシズマに突き刺さろうとしたその時・・・

『シズマ！！』

ストームダグオンが身を挺してセイバーヴァリオンを守った。そのまま暗黒剣はストームダグオンに吸収され始めた。

『楓！！』

『ひひひ・・・シズマ』

ストームダグオンから聞こえてくるゴウマの声。

『ゴウマ！てめえ何する気だ』

『簡単なことよぉ・・・本当はこのままテメエの身体を乗っ取るつもりだったがかこっちのほうが面白うそっだぜ』

『まさか！てめえ！！』

『貰っぜい！いつの身体！！』

そのままストームダグオンに憑依し始めるゴウマ。

『シズマ……』

『楓!』

ストームダグオンから聞こえる楓の声……

『楓お前!』

『ごめん……長く意識を保てなさそう……もし私が他の人に牙を向けるなら……私を倒して!』

そう宣言した途端ストームダグオンが暗黒の力に包み込まれた。

そして現れたのは暗黒剣を手にした黒く邪悪なるロボット……サタンダグオン。

『楓……この野郎……楓を……返しやがれえええ!』

セイバーヴァリオンがラダーブレイドを振り下ろしたその時暗黒剣で吹き飛ばされてしまった。ポロポロになってしまったセイバーヴァリオン。

『へへへ……いい様だなシズマ!そのままこいつが破壊の限りを尽くすところを見物でもしてるんだな!手始めに……宇宙艦隊でも壊しにいこうかね』

そう宣言するサタンダグオンは空へ飛び立った。

『楓・・・ちくしょおおおおおおおおおおおお!!』

ボロボロになったシズマの叫びだけが響き渡るのだった。

## 第二十三話 シズマ対ゴウマ（後書き）

宇宙艦隊へ向かったサタンダグオン・・・宇宙艦隊と接触するまでに奴を止めないと・・・だが今からじゃ間に合わない・・・ん？ミツキさん？ひなぎくを出してくれるのか？それにゴツドアーマーが完成したのか！？

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 発動！迅雷最強形態！！

姉貴・・・あんたが俺を暗闇から出したように・・・今度は俺がそれをやる番だ！！俺が相手だ！！

## 第二十四話 発動！迅雷最強形態！！

宇宙空間

月面をバツクに飛んでいるサタンダグオン・・・だがそのサタンダグオンは何者かと戦っていた。

『うおおおおおおおおおお！！ジャッククロッドブレイカー！！』

・  
ブロスガーの一閃を暗黒剣で防ぐサタンダグオン。更に背後から・

『ターボシューティング！！』

エースレジェンドの銃撃を浴びるが怯まないサタンダグオン。

そして

『アックスシフト！！』

キングブレイバーの攻撃を避け続ける。

あの後宇宙に上ったサタンダグオンをすぐさま追いかけた楓軍団は楓を救うべくサタンダグオンと戦っていた。



第二十四話 発動！迅雷最強形態！！

ひなぎく内

「急いで！楓さんを助けるわよ〜・・・楓さんが居なくなったら面白さが半減するからね〜」

やや個人的な理由を挙げながらミツキがファントム母艦ひなぎくでサタンダグオンを追っていた。

何故ミツキがここに居るのかというと・・・

「・・・悪いな」

「良いって良いって〜それしても急よね〜大地君？」

そう・・・ミツキを呼んだのは大地だった。

その理由は怪我で倒れたシズマが居ない今。迅雷では単独で宇宙に拳がるほどの出力が無く。楓がミツキに部品を送って組み立てを頼んでいたゴッドアーマーを取り寄せる為なのだが生憎システムのバ

グの都合上完成しておらず、時間の節約としてひなぎくで移動しながらゴッドアーマーを完成させているのだ。

「よいつしよ・・・よいつしよー!!」

完成を少しでも早める為に楓のところに遊びに来ていたダグオンヴィヴィオも機材運び等を手伝っていた。

「あー!」

焦りすぎて機材を落としてしまっヴィヴィオ。その前に大地が立っていた。

「大地さん・・・」

「焦るなよ・・・ほら」

ヴィヴィオに機材を渡す大地。すると大地はヴィヴィオに今まで見せたことの無い穏やかな顔を見せた。

「安心しろ・・・もしもの時は・・・俺が姉貴を楽しませてやる」

「!!!」

子どもながらに大地の考えを読んできたヴィヴィオ。

そう大地は楓をその手につけようとしているのだ。

背を向けた大地を追いかけようとするヴィヴィオだがミツキがそれを止めた。

「ミツキさん？」

「南家の人って損な性格ね」

「え？」

「人が傷つくくらいなら平気で自分が傷つく選択をするからね・・・  
大地君の場合は末期かもね。嫌な役を平気で引き受けようとする」

「・・・大地さん」

ミツキの言葉に心配するヴィヴィオ。

「けどね。そうさせないように私たちに出来ることをしないと・・・  
ヴィヴィオちゃん？楓さんから切り札預かったんでしょ？」

「え？・・・うん」

楓から切り札を預かっているヴィヴィオ。

するとミツキは・・・

「じゃあ・・・あっちに楓さんが作った奴のコンテナがあるから・・・  
お願いね」

「・・・はい」

そう言って楓のコンテナに向かうヴィヴィオ。

「さあつてと……ちやつちやと完成させちやいますか……楓さんには借りがあるし……まあ私が貸した貸しのほづが多いけどこれでもた貸し一つね」

そう言つて本気になったミツキはゴッドアーマーの完成を急いだ。

『……あれか……』

ひなぎくの甲板でサタンダグオンを捉えた大地は既にスーパーモードになっていた。サタンダグオンと戦っている楓軍団はボロボロになり始めていた。

『大地君！発進して！ゴッドアーマーも準備万端！思いっきりぶん回して！！』

そう言つて宇宙空間に飛んだ大地とひなぎくから射出されるゴッドアーマー。

『……ちえ……ゴッドボンバーまで作りやがつて……行くぜ！超神合体！！』

大地の身体にゴッドアーマーが合体した。

『迅雷！ゴッドモード！！』

決意を固めサタンダグオンに向かって飛ぶ大地。

『ハハハハハハ！！』

サタンダグオンが楓軍団相手に戦っていると・・・

『うおおおおおおおおおおおお！！』

『な！！』

大地のタツクルを浴びそのまま月面に墜落した。そのまま立ち上がりサタンダグオンと対峙する大地。

『け！新顔かよ・・・テメエもこいつの仲間か！？』

『そうだ！！俺の姉貴を返しやがれ！！』

その言葉に笑い出すサタンダグオン。

『ハッハッハッハッハ！！美しい兄弟愛って奴か？こいつの身体は俺がもらってんだよ！！』

そう宣言するサタンダグオンに決意を固める大地。

『そうか・・・なら・・・楽にしてやるぜ・・・姉貴』

『何？テメエ・・・実の姉を手にかける気か？』

『そうだ!!』

迷うことなく答える大地をあざ笑うサタンダグオン。

『姉貴・・・分かってくれるよな』

『テメエら六馬鹿は人のために死なないんだろ?』

『確かに・・・俺たちは誰かの為になんて死なない・・・残された奴の気持ち分かるから・・・けど・・・それでも俺たちは誰かの為なら笑って死ねるんだ!!』

サタンダグオンに駆け出す大地は拳を突き出した。

『矛盾ぶっこきやがって・・・あめえんだよ!!』

大地の拳を受け止めるサタンダグオンだがそのまま蹴りで突き放す大地。

『ゴツドキャノン!!』

サタンダグオンの至近距離でゴツドキャノンを放つ大地。直撃を食らいよけた。

『ち!てめえ・・・他の奴らよりはマシだな』

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!』

サタンダグオンを殴りまくる大地。決意を固めた大地の攻撃を次々

と浴びるサタンダグオン。

『ゴツドパンチ!!』

腕のパンチが飛ぶとサタンダグオンに直撃するがサタンダグオンは踏み止まり一斉砲撃で大地を攻撃した。

『うおおおおおおお!!!!』

吹き飛ばされる大地は月面に叩きつけられた。サタンダグオンの追撃を大地は転がって避けると立ち上がり際に拳を放ち突き放すがサタンダグオンは大地の拳を押し切りそのまま大地を殴りつけた。

『うおおおおおおお!!!!』

暗黒剣に攻撃される大地。

一方ひなぎくでは・・・

「これ？」

ヴィヴィオが一つのコンテナを見つけ出し楓に託されていた物を出した。

「お姉ちゃんが・・・ピンチの時はこれを使えて・・・」

起動キーのようなものを取り出すとコンテナの端末を開いた。

「これで開くはず・・・」

ヴィヴィオが指紋認証でコンテナを開けるとコンテナが開き中から現れたのは巨大な翼を持った鋼鉄の獅子だった。

「これって・・・まさか」

鋼鉄の獅子の中に入るとモニターがあり同時に起動キーの差込口があった。

「お願い・・・大地君を助けて」

起動キーを差し込むヴィヴィオだが獅子はうんともすんとも言わない。

「どうして？バグなの？」

楓に預けられた切り札が使えないことに絶望するヴィヴィオ。

月面

『うおおおおおおお！！』

サタンダグオンの攻撃に弾き飛ばされる大地。

『く・・・うー！』

再び起き上がりサタンダグオンに殴りかかるが大地の攻撃はリズムを読まれ効果が無くなり始めた。

『どうした？テメエの覚悟はその程度か！？』



『うおおおおおおおお！！』

サタンダグオンの攻撃が当たる直前咄嗟に分離し分離の反動を利用して回避する大地。そこに・・・

『でああああああああ！！』

肩のキャノンに乱射してサタンダグオンを牽制するがサタンダグオンは構わず大地に向かって暗黒剣を振り下ろした。

『く！』

今度こそ回避できないその時。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！』

ファルコが暗黒剣に体当たりしサタンダグオンを弾いた。危機回避と共に膝を突く大地。

『ファルコ！！』

『リーダー！リーダーの剣はこの俺だ！！その座は譲らないぜ！！ファルコ！バルカン！！』

両腕を機銃に変形させサタンダグオンを攻撃するファルコ。

更に

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！』

ジャックロットで暗黒剣を打っ叩くブロスガー。

そして

『あああああああああああ！！』

『うおおおおおおおおお！！』

エースレジェンドとキングブレイバーの体当たりがサタンダグオンを弾き飛ばした。

『ち！テメエらしい加減諦めろよ！！』

『リーダーの保護者やってるとな．．．ちょっとやそつとこのことで諦めないんだよ！！』

そう言つて次々とサタンダグオンに向かって突撃する楓軍団だが次々と吹き飛ばされてしまう。

だが楓軍団は立ち上がるたびに闘志を燃やし飛び掛った。

それを見ていた大地は．．．

『．．．あ．．．ね．．．き．．．』

傷つき膝を付きながら悪魔と化した楓の姿を見る大地。

『．．．やめろ．．．姉貴．．．姉貴のそんな姿見たくねえ．．．』

『ウオオオオオオオオオオオオ!!!!』

『『『『『うわああああああああああ!!!!』』』』』

雄叫びを上げながら仲間を襲うサタンダグオン。

大地は・・・そんなサタンダグオンの中に楓の姿を見出し胸のうちを明かした。

『・・・姉貴・・・俺姉貴が羨ましかつたんだ・・・倒れても潰されても・・・どんな時だって立ち上がってくる・・・そんな姉貴に嫉妬して・・・憧れてた・・・』

拳を握り締める大地。

『姉貴・・・あなたは俺を暗闇から出した・・・だから・・・今度は俺の番だ!!!!ん!!!!くうわああああ!!!!』

拳を大地に叩きつけ立ち上がる大地はサタンダグオンに向かって駆け出した。

『俺が相手だ!!!!』

そう叫びながらサタンダグオンを蹴り飛ばす大地。

『大地?』

『・・・ここは俺に任せろ』

エースレジェンドの前に立ちはだかりサタンダグオンと対峙する大

地。

『……姉貴にできて俺にできないはずはないさ……行くぜ！超神合体！！』

再び決意を固めた大地の目を見たエースレジェンドは……

『今は……あいつに賭けるしかねえ……』

そう呟き膝を付くエースレジェンド。

『うおおおおおおおおお！！！！』

『しつこいんだよ！！』

ゴッドモードになった大地に攻撃を繰り返すサタンダグオンに大地は……

『南家は悪党に屈しないんだよ！！……お前の相手はこの俺だ！！』

そう言ってサタンダグオンを叩き潰しにかかる大地。

ひなぎく格納庫内

『お願い……動いて……お姉ちゃんを助けて！！』

必死に起動キーを入れなおすヴィヴィオだが切り札は起動しない。

『お姉ちゃん……私恐いよ……お姉ちゃんが居なくなったら……』

・だから・・・私もお姉ちゃんを助ける為に戦う!!お願い・・・  
動いてええええ!!」

ヴィヴィオの瞳から涙が零れ落ち起動キーを入れる・・・

その時

「え?」

獅子が機動を始めた。

そのままヴィヴィオを乗せた状態で格納庫から発進する獅子。

「ん!?!」

サタンダグオンを蹴り飛ばし大地が上を見るとひなぎくから発進された鋼鉄の獅子を捉えた。

「あれは・・・ビクトリーレオ?」

楓が作った切り札・・・それはまごう事無きビクトリーレオだった。

「大地君!それは楓さんが特注で作った絶対に勝つ為の鎧・・・ビクトリーレオ型アーマー!その名もVアーマーよ!」

ミツキの言葉を聞いた大地は何かを感じ取り・・・

「Vアーマー・・・ようし!合体だ!Vアーマー!!脅威の三段合体!真・超神合体!」

『ガアアアアアアア！！！』

大地の叫びにVアーマーが吼えると巨大な翼と足パーツに変形した。そして大地の身体に合体し……

『うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！』

大地の瞳が光り輝き両腕と背中が光り始めた。

『！！！！』

右腕に巨大なバンカーが装着され

『！！！！』

左腕に巨大なクローが装着された。

『迅雷！ガイアモード！！！！』

見る者を圧倒する姿に変わった大地はそのままブースターをフル活用しサタンダグオンに突進した。

『スタッグブレイカー！！！！』

『！！！！』

左腕のスタッグブレイカーでサタンダグオンを挟み込むとそのまま上昇した。

『ビートルバンカー！！！！』

『!!!』

サタンダグオンをスタッグブレイカーで捕らえたまま右腕のビートルバンカーで突き刺し叩き落した。

『がああ．．．がああああああああああ!!!』

サタンダグオンが大地に向かって突進するが大地は左右の新武装のコンビネーションでサタンダグオンを殴り飛ばした。

Vアーマーのパワーがサタンダグオンを遙かに上回りサタンダグオンを一方的に殴り飛ばした。

そのまま右腕を掲げる大地。

『来い! 姉貴の最高傑作!!』

『え? そんなもの無いわよ』

ミツキの言葉に大地は．．．

『あの姉貴のことだ．．．トンでもねえ隠し玉があるに違いない』

( )( )( これ以上何を隠すんだ? )( )( )( )

仲間たちが何かを感じ取ったその時大地の右手に巨大な大砲が転送された。

『『『『 まだあったのか!?』』』』

楓は隠し武器を作るのが好きなようだ・・・自分たちが知らない間に何か隠し機能を追加されているんじゃないかと疑ってしまうのだった。

『!!!』

巨大大砲・マグナムバズーカを構える大地。その銃口をサタンダグオンに向けた。

『サブマシンガンモード!!!』

大地のマグナムバズーカの下部に接続されたエネルギー機銃でサタンダグオンに百発百中し足を止めると大地は巨大な砲身を変形させた。ロングバレルモードになるマグナムバズーカ。

『!!!ファイナルモード!!!』

巨大な大砲を構える大地・・・その狙いは・・・

『姉貴・・・撃つからな・・・・・・・・・・・・・・・・死ぬんじゃないぞ!!!!!』

『ガア・・・アアア』

サタンダグオンに向かって構える大地は・・・

『エネルギーチャージ!』

己を大木とし根を張り月面の大地の力を吸収し膨大なエネルギーが



砲身に蓄えられる。

『馬鹿な！そんなもんを撃つたら・・・こいつは!?!』

『マグナムノヴァー!』

『うわあああああああああああああ!』

サタンダグオンの言葉を押し切り全てのエネルギーを開放する大地。無限砲やパーフェクトキャノンに勝るとも劣らないエネルギー波に飲み込まれるサタンダグオンは断末魔の叫びを上げた。

『・・・大地さん・・・お姉ちゃんは?』

大地の中から全てを見ていたヴィヴィオ。その言葉に大地は・・・

『・・・安心しろ』

『え?』

大地の言葉にヴィヴィオが爆炎を見ると・・・

『ぜえ・・・ぜえ・・・』

元の姿に戻ったストームダグオンが走ってきた。その姿を見た楓軍団やミツキ達もすぐさま駆けつけた。

『・・・姉貴・・・』

『皆!心配かけてごめん!』

謝るストームダグオンに楓軍団は・・・

『このやるつー！』

『心配かけさせやがって』

『落とし前はつけてくれるんだろうな？』

『・・・ふ・・・正義の戦士はそう簡単に死なない運命にあるようだ・・・まっリーダーが100%善人とは言えんがな』

各々の反応に苦笑いになるストームダグオン。

その姿を見た大地は・・・

(・・・ビビった)

震えていた手を隠しストームダグオンに駆け寄った。この後元に戻った楓がひなぎく内でヴィヴィオから世界を狙えるであろうタツクの洗礼を浴びたの言うまでもない。

「大地・・・借りが出来ちゃったね・・・何かお礼しないと」

楓の言葉に大地は・・・

「光太郎さんのトロピカルバナナパフェ10杯・・・キャラメルプ  
ランデーケーキも」

「あゝ昔から甘いのが好きだったよねゝかしこまりました」

そう約束した楓だった。

一方

月面で不気味な再生をする暗黒剣ゴウマ。

「ち・・・あのまま取り付いていたらあのエネルギーに飲まれて消滅してたぜ・・・ここは機会を待つか？」

そう言ってゴウマは月に消えたのだった。

第二十四話 発動！迅雷最強形態！！（後書き）

今巻で大人気のゲーム！VARS！自分が作ったバーチャルロボツトで戦う格闘対戦ゲームだよ！勿論私はストームダグオンで舞人さんはマイトガイン。あれ？あの子のVARS変わってるな・・・え！？巨大化した！あれって！

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 聖勇者登場！

ブレイブチャージ！バーンガン！！

## 第二十五話 聖勇者登場！

第二十五話 聖勇者登場！

本日は人気ゲームVARSの大会であり全員イベント会場に集まっていた。

VARSとは宇宙開発用のOSを簡単にしたものであり玩具として売り出されたものである。

このVARSを使った格闘ゲームが子供や大人の間で人気になり大会にまでなったのだ。

「　　」

「よっと」

「くうう！おいらも負けてらんねえぜ！」

楓と舞人とタクヤもVARSに熱中している一人であり大会用のVARSを調整していた。

勿論楓はストームダグオン・舞人はマイトガイン・タクヤはゴールドランに参加している。

「右腕の間接もうちよっと滑らかにしておこうかな」

「動輪剣を持つ為に腕力を強化してみるかな？」

大会用に入念に調整する楓と舞人。

一方では……

「大地、今度はこっちのアイス！」

「……てめえはドンだけ食うんだ……」

スバルによつて会場の出店に付き合わされまくっている大地。

最近スバルが大地の隠していた甘党を見抜いてしまいそれが元で甘いものを食べに行かされるのに付きさわされるのだった。

因みに大地が甘党を隠している理由は……

「……恥ずかしいんだよ」

男で甘い物好きは正直恥ずかしいと思つている大地。だがスバルに誘われるのを口実にアイス屋に行くようになったのも事実である。  
一人ではダメでも誰かが一緒なら平気らしい。

誤解の無い様に言つておくがスバルと大地はお互いに茶飲み友達だと思つているので恋愛の感情などは一切無い。

「……」

しかめっ面で席を取らされているシズマ。正直やる事が無いので応援席を取らされていたのだった。

「はぁ……ここで瞬兵に会うのはな」

ばやくシズマ。

そして大会が開始されあつという間に決勝リーグに突入した。

『それでは！決勝リーグ一回戦は！南楓さん対！芹澤瞬兵君！！』

アナウンスと共にボードの上にVARSをセットする楓と瞬兵。

「よろしく！」

瞬兵に挨拶する楓。すると瞬兵も・・・

「宜しくお願いします！」

元気良く挨拶を交わした。

『Ready』

合図が言われようとしたその時。

「！！！！」

突如会場が揺れだした。パニックになる会場。

「なに！？」

『これは・・・瞬兵！』

「え？」

何かの声に気づいた楓。よく見てみると瞬兵のVARSが喋りだしたのだ。

「バーン！どうしたの!？」

『ゾーマの兵士達だ・・・』

「ゾーマが」

瞬兵とバーンの話を不本意ながら立ち聞きしてしまった楓はすぐさまダグコマンダーで皆に連絡を取った。

「みんな！ゾーマが着た！大地とスバルとシズマは皆の非難を！舞人さんとタクヤ君は私と!！」

「…………おう!」「…………」

通信を受け取った仲間達はおのあの行動を開始した。

会場の外では巨大ゾーマ兵が会場を襲撃しようとしていた。

『ここに宇宙開発用OSが・・・死ね!！』

ゾーマ兵がここに来た理由は手軽にされた宇宙開発用OSを兵器に転換しようとしていたのだ。

大会会場が破壊されようとしたその時。



『つあああああ！！』

『うおおおおお！！』

先に外で待機していたドランとガインがゾーマ兵を蹴り飛ばした。

『く！邪魔するか勇者！！』

ゾーマ兵がドランとガインに攻撃を仕掛けるとサイドステップで回避する。

その時

『お待たせ！！』

駆けつけるダグストームとマイトウイング。

『疾風合体！！』

ダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエ！！』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。腕が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン！！』

ストームダグオンが降り立つと物凄い風が巻き起こった。

「レエエエツッー！マアアアイト！ガアアアインー！」

舞人のコマンダーが輝くと発進されたロコモライザーを中心にガイン、マイトウイングがVの字に並び巨大な紋章を描いた。

ロコモライザーから足が展開するとガインが左腕、マイトウイングが右腕に変形するとロコモライザーに合体し舞人の乗っているコックピットが移動するとレバーを掴む。

「マイトガイン！起動ー！」

頭部が形成されると汽笛が鳴り響き誕生した嵐の勇者。

『銀の翼に望みを乗せて！灯せ平和の青信号！！勇者特急マイトガインー！！定刻通りにただいま到着ー！！！！』

響き渡る勇者の叫び。

『ゴルゴオオンー！！』

ドランの叫びに大地が割れ黄金の恐竜が現れた。

『ゴルゴンー！黄金合体だー！！』

『グオオー！！』

ドランの叫びにゴルゴンが人型に変形する。

『つおおおおおお！！とお！！』

ドランがゴルゴンに飛び込むように飛ぶと四角の宝石のような姿になりゴルゴンの胸に納まった。ゴルゴンの方向と共に口に顔が現れる。

『黄金合体！ゴルドラアアアン！！』

3体の勇者が駆けつけたその時。

『『『！！』』』

突然周囲から電磁ネットが放たれ勇者達は絡め取られてしまった。

『ふん！貴様達が来ることは分かっていた！！ダグオン！！』

『くっ！！』

電磁ネットを引き千切ろうとするが電流を流され力が入らない。

会場

「このままじゃ・・・」

ゾーマ兵を見つめる瞬兵その時。

「瞬兵！」

振り返ったそこには・・・

「シズマさん!!?」

死んだはずのシズマの姿が・・・

「瞬兵!ここは任せろ!!あいつを頼む!」

「はい!」

シズマの言葉にVARSを取り出す瞬兵。

「バーン・・・行くよ!!」

『わかった!』

瞬兵の言葉に答えるバーン。

「ブレイブチャージ!」

瞬兵が車型のVARSを投げる。

「バーンガン!!」

バーンブレスが輝くと光が発せられ一つの道が現れる。

『おう!ガンダッシャー!!』

瞬兵のVARSがバーンの姿になるとトレーラー型ビークル・ガンダッシャーが現れ人型に変形する。

『とうあー！』

人型になったガンダッシャーにバーンが装填されると頭部から光が発せられ瞬兵と一体化する。

『龍神合体！バーンガアアアアーン！！』

降り立つバーンガン。バーンガンが現れたことに驚くゾーマ兵。

『貴様！聖勇者！！』

『VARSを悪用しようなど許さん！！デュアルランサー！！』

双剣を構えるバーンガンはそのままストームダグオン達の電磁ネットを切り裂いた。

『うあー！』

消耗し倒れこむストームダグオン。だが傷は浅い。

『ドラゴンナツコウー！！』

右腕のパンチが放たれ後ずさるゾーマ兵。

『ちいー！！』

バーンガンの強さに撤退を試みようとするが逃がさない。ゾーマ

兵を蹴り飛ばすとデュアルランサーを構えた。

『クロス！インパクト！！』

『ぎゃあああああああ！！』

十字に斬られるゾーマ兵が爆発するとバーンガーンの瞳が輝いた。

大会後

「へえ……瞬兵君も勇者だったんだ」

「えつと……その……」

楓の言葉に照れてしまう瞬兵。

すると

「久しぶりだな……瞬兵」

「シズマさん……生きてたんですね！！」

シズマの生還に驚く瞬兵。

「事情は分かりました……僕も一緒に戦います」

「うん！よろしく」

戦うことを決意した瞬兵を否定しない楓は瞬兵と共に戦う決意をし

た。

一方

「シズマさん」

「なんだ？」

「楓さんってシズマさんの彼女ですか？」

「誰があんな顔だけの奴もらうか！！」

絶叫して怒るシズマだった。

第二十五話 聖勇者登場！（後書き）

大地

「俺が偶然通りかかった公園・・・そこには一人の女が居た・・・同じ頃、元管理局員の男が管理局員から逃げ回っていた・・・この女・・・一体」

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 戦闘機人の恋

大地

「・・・誰が誰を好きになるなんて・・・興味ないね」



## 第二十六話 戦闘機人の恋

クラナガンの某公園にいつもの如く無愛想な顔の大地の姿が・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大地はいつも行く秘密のアイス屋を訪れていた。実は甘党であることを恥ずかしいと思っている大地は休みになるとこっそり秘密の店を見つけ出し甘いものを食べに行くのが日課になっていた。

「あーいらっしやい」

「よ・・・」

バンの中に設置されているアイス屋の店主ミサが大地の顔を覚えていた。ミサの店はあまり繁盛してないがミサの物腰の柔らかさが話題になり密かに甘党の男の間で話題になっていてこっそり隠れ家的な店となっているのだった。

「今日は彼女さんは一緒じゃないの？」

「彼女なんて居ねえし・・・」

「へえーあの青髪の子彼女じゃないんだ」

実は大地の甘党がスバルにバレてしまい、この店を紹介させられた拳句味までヒットし大地を付き合い合わせるようになってしまったのだ。ぶっちゃけると友達付き合いをした事がなかった為大地も悪くないとは思っていた。

「うるせえな……とつとと出せ……」

「はいはい」

そう言つてミサが新作アイスを大地に出した。常連の為代金は割引されている。今回はキャラメルとバニラで作られたメープルだった。早速食べてみる大地。

「どつ？味は？」

「……悪くない……」

「はぁ……相変わらずつまらない感想……まあ……君の『悪くない』は『良い』って意味だしね。あの子ならもっと豊かな感想言ってくれるのにな。君達付き合い合っちゃいなよ」

「……断る」

正直友達付き合い以上のことなんてしたくないと思っている大地。それ以前に特定の誰かに関わりを持つことすら嫌がっている。

「……所詮他人同士で付き合いなんて乱暴なことねえだろ」

「そつかな？」

「……ああ……じっせん」

そう言っつてミサに代金を置いてぶっきら棒に去っつていく大地だつた。間違えてはいけなひが大地はミサに恋をしてゐるわけではない。

## 第二十六話 戦闘機人の恋

霧島園

「……こつちな……」

突如メールで呼び出された楓は霧島園の人気の無い場所まで来た。

「匿名のメールだつたけど……私じゃないと頼めないことつて……」

「お待たせしました」

「!?!」

背後に気配を感じ楓が振り返るとそこは管理局の制服に身を包んだ男が立つてゐた。

クラナガン某公園

「　　」

ミサがご機嫌で店仕舞いをしバンで帰ろうとしたその時だった。

「！！！」

突如ゾーマ兵がミサを取り囲んだ。身動きが取れない状態になるミサ。

すると

「はあ！！！」

帰り道を引き返してきた大地がゾーマ兵を蹴り飛ばした。

「来い！」

「うん！」

特に怯えた様子の無いミサに不信感を抱きながらも大地は走った。

しばらくして廃工場街に入ると今度は読み辛い気配の者が迫ってきた。

「!!!」

大地が護身用銃型デバイスを構えると現れたのは……

「ロボット?」

「!!!」

ロボットは大地ではなくミサを狙って行動を開始した。大地が銃でロボットを撃墜していくが相手が意思の無い無機物のため気配が読み辛い……

その時だった

「君!後ろから3秒以内で攻撃が来る!!!」

「なに?う!!!」

ミサの言ったとおり後方に現れたロボットに後頭部を殴り飛ばされてしまい意識が跳びそつになるが意識を無くす寸前にロボットに銃を放ち撃破した。

「ちよつと!君!!!」

大地が意識を失った事に焦るミサだった。

「……どうぞ……」

「……」

楓にコーヒーを出され口をつける管理局員ロイ。

「何故……私のようなはみ出し者の所に？」

楓の質問にロイは決意して答えた。

「……あなたじゃないと頼めないんです……彼女のこと……」

「

え？」

ロイの言葉に真面目になる楓だった。

廃工場

「う……ん……」

廃工場で目を覚ました大地は頭に包帯が巻かれていることに気付いた。どうやら殴られた衝撃で切れてしまったようだ。

「血は……止まったかな」

そう言って鬱陶しいので包帯を外す大地。

すると

「ちょっと！まだ外しちゃダメだよ！」

水を持ってきたミサに発見されてしまい止められてしまう大地。どうやら手当てしてくれたのはミサのようだ。

「ん？」

大地は身体に違和感を覚えあるものを探した。

「もしかして……これ？」

「それは」

ミサが取り出したのは大地のDコマンダーだった。

「ねえ……君……迅雷君？」

「何？」

『デスライカー』でなく『迅雷』という勇者の名前を言われてしまい戸惑う大地。このまま迅雷と言われ続けたらミサが襲撃されかねない。

「……そんなに警戒しなくて大丈夫だよ……この辺に人は居ないから……ましてや気配のない無機物なんて……それに迅雷君とても疲れてるよね？」

「なに？」

気配に敏感な大地すら気付き辛い無機物の気配を感じ取りましてや自分の体調までの確に分析されたことにミサに驚愕する大地はある一つの可能性を言ってみた。

「あんたまさか・・・戦闘機人か？」

「うん」

大地の質問にミサは笑って頷いた。

「どうする？私が戦闘機人ってわかったら管理局に突き出す？」

「・・・知らねえよ」

今までミサと付き合いをしていた大地にとってはミサが何者であるうと興味なんて無かった。それでミサ自身が変わるわけではないからだ。

「気持ち悪がらないんだ？」

「・・・少なくともアイス売ってたあんたは偽りは無かったさ」

その人の素性なんてどうでも良いと思っっている大地。自分で目で判断するのだった。

「なあ・・・一つ聞きたい・・・」

「なに？」



「・・・あんだどうして？」

「・・・戦う以外の生き方を知ったから・・・かな・・・最初は戦うことしか知らなかった・・・けど・・・もっと凄い生き方を知ったんだ」

「もっと違う意味があるんじゃないか？」

「相変わらず勘が鋭いね」

そう言っただけで笑うミサは大地にDコマンダーを返し胸のうちを明かした。

「ねえ・・・戦闘機人の女が人間の男に恋するのって・・・変かな？」

そう言っただけで微笑むミサに大地は・・・

「・・・別に・・・」

相変わらず無愛想に答えた。

別に誰が誰を好きになろうが興味なんて無い。

言い方は悪いが自分の周りにも特殊な人間はいくらでも居る。だがそれを知ったところでその人が変わるわけではない。

自分だって戦闘機人に好意を持っている。

「君なら・・・そう言ってくれと思うたよ」

そう笑いながら事情を話すミサ。

霧島園

「……………」

ロイから事情を聞く楓。

ロイは管理局特別犯罪対策班の捜査官であり任務は戦闘機人密造プラントの捜査だった。

300年経った今でもマッドサイエンティスト達による戦闘機人開発の人体改造などは後を絶たない。

「……………」

戦闘機人密造プラントの摘発に内定調査を進めていたロイ。

だが戦闘機人の一人に見つかってしまい戦闘をすることになった。

「!?!」

無感情な戦闘機人の攻撃を受け続けるロイ。相手に感情が無い為疲労という感情が無かった。追い詰められたロイ。

「……………」

死を覚悟し目を瞑ったその時だった。

「え？」

何と戦闘機人が自分の頬に触れ始めたのだった。そして何を思ったのかロイの顔を触り始める戦闘機人。

「・・・暖かい」

「な・・・」

戦闘機人がロイを見て微笑んだ。

「・・・興味本位の出来事だったが・・・戦うことしか知らなかった彼女に感情が芽生えたんだ・・・俺はその顔に心奪われた・・・」

「え？」

「俺は彼女を破壊したと嘘の報告をし・・・彼女を保護した・・・それからだ・・・彼女がもっと笑うようになったのは」

「どうして・・・そんな事を？」

「・・・戦闘機人の女を愛するのは変か？」

ロイの言葉に楓は黙って首を振った。

「彼女を作った組織は戦闘機人に一切の感情を持たせずただ戦うだけの人形としての機能しか求めなかった・・・俺は感情の芽生えた彼女を守るために残党と戦っていた・・・だがそれもゾーマが目を付けてきた・・・ゾーマにとっても戦闘機人は貴重な資料になる」

「局に救助は求めなかったんですか？」

「管理局に行けば彼女がモルモットにされる事が目に見えてる・・・だから・・・あなたに・・・あなたは単独で動いてくれる」

その言葉に楓は・・・

「わかりました・・・ゾーマを倒します」

そう言ってロイに協力することになった楓。

## 廃工場

「・・・!!」

楓からの通信を受け取った大地はすぐさまミサを連れ出した。

「どっしたの？」

「・・・ゾーマがあんたを狙ってる・・・」

「私と彼を守ってくれるの？迅雷君？」

「ああ・・・う！」

大地の溝を殴りつけ気絶させるミサ。

「・・・ごめんね・・・君に迷惑はかけられないんだ・・・」

そう言って自らのISとも呼べる機能加速装置でロイの元に向かった。

「く！！！」

「！！！」

既に楓とロイはミサを狙うゾーマ兵に襲われていた。

「く！！！」

目の前にロイが居るためダグテクターを装着できない楓。ロイは楓がダグオンと知らずに評判だけで頼ってきたのだ。

ゾーマ兵を一掃しミサの元へ向かおうとしたその時。

「！！！」

巨大なゾーマ獣が楓とロイを捕らえた。ゾーマ獣はロイをオトリにしミサをおびき出す作戦に切り替えた。ゾーマ獣がロイを掴もうとしたその時だった。

「!?!」

高速移動する物体が楓とロイを捕まえ脱出した。

その物体とは……

「ミサ!」

「大丈夫?」

「この人が……戦闘機人?」

ミサはロイと楓を安全な場所に下ろすとロイを守る為に再び戦う決意をしゾーマ獣に構えたその時。

『うおおおおおおお!!?!』

ゾーマ獣を蹴り飛ばす迅雷の姿が……

「大地!」

「迅雷君!」

『……………超神合体!!!』

楓とミサをスルーしゴッドモードになる大地。

『うおおおおおおおー!!』

『がああああああああー!!』

ぶつかり合う大地とゾーマ獣。ある程度ゾーマ獣を痛めつける大地は魔力エネルギーを収束した。

『ゴツドファイヤーガッツー!!』

ゾーマ獣を貫き爆発すると大地の瞳が光った。

事件後

「ほら〜大地!速く!!」

「.....」

スバルに引き連れられミサの店に急がされる大地。正直ウザそうである。

「あれ?」

スバルが何かに気付くと其処にはあるはずのミサの店がなくなっていた。

「うえええ〜どうして〜」

「もし？」

スバルが頭を抱え大地が腕を組んでいると公園の管理人が現れ大地に手紙と箱を渡した。

「迅雷君へ・・・ちょっと旅に出ることにしました。勿論彼も一緒・・・しばらくは帰ってこないかもしれません。一番のお客さんの迅雷君には助けられてばかりだったので最後にアイスを贈ります」

大地が渡された箱の中身を見るとミサのアイスが入っていた。ちょっと顔の表情を緩める大地。

「・・・感想待ってます　P S ・彼女さんによろしく　ミサ」

最後の言葉に苦い顔になる大地。

「だから・・・彼女じゃねえって・・・」

「ん？何どうしたの？」

「あ？・・・ほれ」

手紙を覗き見ようとしたスバルの顔にアイスの箱を突きつけ呆れながらそう言う大地はミサの手紙を破り捨てアイスの感想と共に風に載せるのだった。





## 第二十六話 戦闘機人の恋（後書き）

宇宙人に両親を殺されてしまった少年が霧島園にやってきた。宇宙人を倒すことを約束した私だったけど敗北してしまう。

宇宙人を倒す為に私は地獄の特訓を開始するのだった。

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 傷だらけ泥だらけ

南流の修行・・・やるしかない！！

## 第二十七話 傷だらけ泥だらけ

第二十七話 傷だらけ泥だらけ

霧島園

「　　」

霧島園の校庭で呑気に鼻歌歌いながら柱に匍かかっている楓。

何をしているかというと

「姉ちゃん！体育館まだ？」

「後3日くらいは待ってね」

そう・・・手作りで体育館を建てようとしていた。ここ数日雨が続いた為子ども達は外で遊ぶことが出来ず体力を持て余していた。

そこで楓が雨の日でも思いつきり身体を使って遊べる場所として体育館を建てることになったのだ。

勉強以外はある程度ことができ、力たちのダグベースにある全てのダグビークルや霧島園の勇者たちの整備を一人でやっている楓にとっては体育館の1個や2個作ることなど朝飯前であった。

「　　」

休憩でアンパン食べている楓。

すると玄がお茶を持ってきた。

「楓ちゃん・・・悪いね・・・君が着てから大助かりだよ」

「いえ・・・私なんかまだまだ」

そう言う楓に玄は相談を打ち明けた。

「そうそう・・・今度新しい子が来るんだ・・・」

「え？」

「・・・宇宙人災害で両親を亡くしてしまった子が来るんだ・・・」

「・・・そうですか・・・よし！」

そう言ってお茶を飲み干す楓。

「その子の為にも・・・はやく体育館作らないと」

気合を入れて体育館建造に力を入れるのであった。

3日後

体育館の仕上げが残る中楓たちは広場に集まった。

「今日から新しい友達が来たよ」

玄の挨拶で紹介される男の子。

「名前は夢浦新君・・・仲良くしてね」

そう言つて新が皆に紹介された。

「・・・・・・・・」

両親を殺されたショックかずつと俯いている新。そんな新に話しかける楓。

「宜しく！私は南楓！時空管理局時間犯罪部署の一員だよ」

「時空・・・管理局」

その言葉に新が楓に向かって頭を下げた。

「姉ちゃん・・・俺を弟子にして!!」

「え？」

「俺・・・強くなって父さんと母さんの仇を取りたいんだ!!」

新の目を見た楓・・・その目はもう失うものは何も無いといった目だった。それを見た楓は・・・

「ダメだよ・・・」

「え？」

「命を粗末にして・・・復讐の為に弟子入りするなら・・・私は力に慣れない」

「けど・・・俺！！」あなたの復讐は私がやる！！」「え？」

楓の言葉に驚く新。

「あなたの思いを背負って・・・私がやる・・・だからお父さんとお母さんの分まで精一杯生きて・・・その命・・・お父さんとお母さんがくれた命だよ」

「・・・約束してくれる」

「うん・・・私は出来ない約束は絶対にやらないよ」

その言葉を聞いた新は楓に自分の気持ちを全て預け新しい道を生きる決意をした。

その決意を裏切らないように楓は新の両親を殺した宇宙人を探すべくパトロールを始めた。

夜

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ストームバンディットを駆り市内をパトロールする楓だが宇宙人の影も形も無い。

「確か……この間地球に来た種族だよね……バズ星人って言ったっけ？」

管理局の情報によればバズ星人とは数日前地球に飛来し大量虐殺を行っていた。目的は純粹に地球人を狩る事目的としており討伐に向かった局員の数名が返り討ちにあった。

新は両親が殺された時、偶然友達の家遊びに行っており難を逃れたのだった。

「!!!」

ストームバンディットに仕掛けられていたリーダーが宇宙人の反応を捉え、楓は急行した。

「うわ！」

「がは!!!」

重武装局員がバズ星人と戦っていた。重武装局員がデバイスを構えるがバズ星人は懐に入り込み重武装局員を吹っ飛ばした。

「ぐあー！」

倒れる重武装局員に詰め寄るバズ星人。

すると

「は!!!」

ダグテクターを装着した楓がバズ星人を蹴り飛ばした。それにより難を逃れる重武装局員。

「待て!!」

逃げるバズ星人を追う楓は広い倉庫街に出たその時。

「!!」

上空からの攻撃を避けた。バズ星人が巨大化し楓に向かって構えていたのだ。

『疾風合体! ストームダグオン!!』

急速合体しバズ星人に向かってストームダグオンが殴りかかった。

『はああ!! は!! は!! は!!』

ストームダグオンの拳の連打を避け続けるバズ星人。百戦錬磨の実力でストームダグオンに怪光線を放った。

『ぐあ!!』

吹き飛ばされるストームダグオン。そこに・・・

『ストームダグオン! この俺を使え!!』

ファルコが駆けつけファルコソードがストームダグオンの元に突き刺さりストームダグオンが引き抜き構えた。



その様子にはズ星人は・・・

『奥義！疾風一閃！！』

ストームダグオンの剣の軌跡を見切り高速移動で間合いに入り込み吹き飛ばした。

『ぐー！！』

奥義を破られた事に焦るストームダグオン。だがズ星人の追撃は続く。

『！！！！』

咄嗟にはズ星人の攻撃を避けると再びファルコソードを構えた。今度は凄まじい風を身に纏う。

『蔓烈風！！！！』

ファルコソードを振り下ろし広範囲の風の攻撃を繰り出すストームダグオン。ズ星人は技に飲み込まれるが決定打にはならない。

『は！！！！』

蔓烈風を耐え抜いたズ星人はストームダグオンの腕に組み付き・・・

『うあああああああ！！！！』

ストームダグオンの腕を押し折った。激痛がストームダグオンを襲

う。

『うー！』

バズ星人がストームダグオンにトドメを誘うとしたその時。

『させん！』

ファルコがロボット形態に戻りバズ星人にファルコバルカンを浴びせ続けた。

あまりの弾幕に一時撤退するバズ星人。

バズ星人が撤退するとストームダグオンの瞳に輝きが消え倒れてしまった。

『リーダー！』

ファルコの叫びだけが響き渡るのだった。

「……………」

霧島園の自分の部屋のベッドで目を覚ます楓。ファルコによって運ばれたようであり起き上がると腕に激痛が走った。折れてしまった為包帯が巻かれていた。

「……………シャマル先生が居ればこんな傷……………」

数々の力の致命傷を治してきたシャマルが居ない楓は自力で治すしかない。

その時

新が楓の部屋に入ってきた。

「新君」

「……………」

楓に向かって憎しみを持った目で見る新。

「嘔吐き！姉ちゃんの嘔吐き！！」

ベッドで寝ている楓に詰め寄る新。黙ってることしか出来ない楓。

「ちきしょう……悔しい……悔しいよ……僕に力があれば……あんな宇宙人をやつつけられるのに……ちきしょおお！！」

泣き崩れる新を見た楓はただ黙ることしか出来なかった。

風太郎たちによって新が楓の部屋から出されると楓は骨折した腕を見つめた。

「よし……………」

楓がベッドから起き上がった。

「お姉ちゃん！」

楓が心配でお見舞いに来たヴィヴィオは楓の部屋を訪れる。

だが

「嘘・・・」

部屋に楓の姿が無かった。

あったのは窓が開き蛻の殻になったベッドだけだった。

すぐさま楓の後を追いかけて楓が修行に使っている山に向かうヴィヴィオ。

「はー！」

ヴィヴィオが見たのは身体中に拘束ギブスを装着し骨折した腕で大木に突きを打ち込む楓の姿が・・・

「お姉ちゃん・・・骨折れてるのに・・・お姉ちゃんー！」

楓に向かって走るヴィヴィオは楓を止めた。

「止めて！お姉ちゃんー！」

「離してヴィヴィオちゃん！止めないでー！」

「止めてー！ー！」

必死に止めるヴィヴィオに微笑む楓。

「ごめんね・・・ヴィヴィオちゃん・・・止めるわけにはいかないんだ」

「何で!？」

「私は自分で蒔いた種は自分で刈る!! はああああああ!!」

「!」

ヴィヴィオが止めるのも聞かず修行する楓。

「ぜえ・・・ぜえ・・・うあああ!! でああああああ  
あああああ!!」

拳の痛みをこらえ打ち込みを止めない楓を見たヴィヴィオ。

「お姉ちゃん・・・もう止めて!!」

ヴィヴィオが楓に向かって駆け出そうとしたが、誰かがヴィヴィオを止めた。

その人物は・・・

「大地さん!!」

「・・・やめな」

ヴィヴィオを止める大地。

「けど！お姉ちゃんが！！」

「……………」

「え？」

ヴィヴィオは自分を掴む大地の手の力が強いことに気付いた。大地も内心では止めてほしいのだが決してそれを言わない。

「大地さん……………どうして……………宇宙人と戦うためなら止めたほうが！お姉ちゃんの弟でしょ！」

「……………弟だから止めないんだ……………あいつが戦っているのは宇宙人じゃない」

「え？」

「あいつが戦っているのはな……………自分自身だ」

大地の言葉に目を見開くヴィヴィオ。

「あいつが許せないのは宇宙人じゃない……………宇宙人をのさばらせ……………子供を泣かせた自分自身だ……………だからそんな自分を倒す為に今必死に戦っている」

傷つきボロボロになりながらも立ち上がり修行する楓の姿を黙ってみる大地。

「あいつはな……………そんな中途半端な自分自身を倒すためにあんな

「になってやがんだ」

「けど・・・あのままじゃお姉ちゃんは!?!」

「・・・だから・・・南家のやり方でこうすんだよ・・・」

ヴィヴィオに背を向け楓に飛び掛る大地。

「!?!」

「は!?!」

大地の跳び蹴りを受け止める楓は大地を突き放すと距離を置き構えた。

「・・・大地」

「・・・!?!」

何も言わずに楓に襲い掛かる大地。そして大地の意図を分かった楓は・・・

「・・・ありがとう」

全力で大地に襲い掛かった。

楓と大地の拳が交差し大地がカウンターで蹴りを放つが楓は踏み止まり逆に大地が吹っ飛んだ。

そのまま大地は吹っ飛ばされた反動を利用し体勢を立て直すと楓の

顔面に拳を入れた。

「!?!」

顔への衝撃に凄まじい痛みを感じる楓だがそのまま大地のボディに連打を浴びせる。

「この野郎!!」

楓に飛び掛った大地は楓を押し倒しマウントポジションを取った。

「おりゃあああああ!!」

「ぶ!!ぐ!!」

マウントポジションから楓の顔面を殴り続ける大地。楓は無理矢理起き上がって大地を投げ飛ばした。

楓と大地の姉弟喧嘩には手加減が全く無い。

楓は自分を乗り越える為に全ての力を使い大地を倒す。

大地は弟だからこそ全力で姉と戦い姉の思いを受け止める。

お互いの目的を持って全力でぶつかり合っていた。

己を巨大な大木とし大地の魔力を身体に吸い上げる大地。

「アース……」



「レイソニック！ウェーブ！！！」

凄まじい衝撃波を拳から放つ楓。

「グラビトン！！！」

「チエスト！！！」

大地の放った魔力の塊と楓の決め球の拳がぶつかり合い吹っ飛ばされる両者だが楓は先の修行の結果倒れ大地は踏み止まった。

「お姉ちゃん！！！」

「待て！！！」

様子を見ていたヴィヴィオが楓に駆け寄りうつとするが大地が止めた。

すると

ゆっくりと立ち上がる楓。

それを見た大地は……

「ようやくなったか……あの状態に……」

何かを悟った。

「！！！」

身体に装着されている拘束ギブスが楓の身体に耐え切れなくなる破

壊される。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わずうつむいた楓・・・その姿からは凄まじい空気が流れていた。

「!?!」

楓が近くに落ちていた大枝を拾い上げ構えた瞬間凄まじい風が巻き起こった。

「来たか！」

大地はこれを待っていたのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

楓の目には力が無いがその奥には凄まじい魂が燃え上がっていた。

「不味いな」

この状態になつた楓を何故か恐れる大地。

それは全力で殺られるからだ。

「・・・・行くぜ・・・」

右拳に力を圧縮させた大地は本気の技をひねり出した。

「ランドスマッシュャー!!」

大地が地面に拳を叩きつけると凄まじい衝撃波が放たれた。

「……………」

衝撃波が楓に向かってくるが楓は目で見ていなかった。

……危機に陥った時……

……身体から一切の雑念を捨て……

……無の境地……

……無念無想に陥り……

……見開かれた心の目で……

……その先の……

……秘められた力を見ることが出来る……

「!!」

大枝を振り下ろすと凄まじい風の一闪を放ち大地のランドスマッシュャーを丸ごと飲み込んだ。

「!!」

ランドスマツシャーを飲み込んだ風を身体に受けた大地は決定打にはならないが身体の内を奪われ上昇してしまう。

「は!！」

大地が身体の内を奪われた事に気が取られていると楓が至近距離にもぐりこみ決定打の一閃を打ち込んだ。

「ぐああ!！」

真剣でやられていたら確実に両断されている。

地面に叩きつけられた大地と着地する楓。

「……は!大地!！」

現実に意識を戻した楓は倒れた大地に駆け寄り抱きおこした。

「しっかり!！」

「……へへ……やったじゃねえか……」

「……無我夢中だったけど……」

「……勝てよ」

「うん」

大地と拳を交わし楓は……

「ヴィヴィオちゃん・・・大地の事をよろしく・・・」

「うん！」

ヴィヴィオに大地を託すと楓はバズ星人が暴れているとの情報を受け出撃した。

『グウウウアアアアアアアアアアアア！！！』

町を破壊するバズ星人に逃げ惑う人々。

『この野郎！！』

楓軍団・エースレジェンドが飛び掛るがバズ星人の攻撃に吹き飛ばされてしまう。

その時

『はあ！！』

ストームダグオンの跳び蹴りがバズ星人に炸裂した。

『リーダー！！』

『後は任せて！！』

そう言うストームダグオンの連打を受けるバズ星人。大地との修行の末身体能力が上がりバズ星人のスピードについていけるようになったストームダグオン。

以前のストームダグオンと違うことにバズ星人は早期決着を試みるが今度はバズ星人がストームダグオンの蹴りを浴びてしまった。

『ストームダグオン！俺を使え！！』

ファルコが駆けつけストームダグオンの元に突き刺さった。

『ストームファルコソード！！』

ファルコを引き抜き構えるストームダグオンは身体中に凄まじい風を巻き起こした。

『！！！！』

バズ星人が持ち前の高速移動で回避しようとしたその時……

『蔓烈風！！！！』

以前戦ったときよりも格段に威力が上がった蔓烈風がバズ星人を飲み込んだ。

身体を拘束され空中浮遊するバズ星人の上を取ったストームダグオン。

『奥義！疾風一閃！！！！』

ファルコソードを振り下ろしバズ星人を両断するストームダグオン。

大地との修行を得て獲得したのは技と技のコンビネーションだった。

爆発するバス星人にストームダグオンの瞳が輝いたのだった。

霧島園

「よし！ハイハイ！！」

完成した体育館でミツキに寄付されたバスケットで遊ぶ新。ストームダグオンが両親を殺した宇宙人を倒し新の仇を取ったことで徐々にだが元気を取り戻していった。

「お姉ちゃん・・・言わないの？・・・自分がダグオンだって」

「・・・うん」

ヴィヴィオの言葉に頷く楓。

「姉ちゃん！速く！姉ちゃんもダグオンみたいに強くなりたいと！」

新の言葉に楓は頷き・・・

「よっし！負けないよ！」

バスケットチームに加わった。

その様子を見ていたヴィヴィオに大地が話しかけた。

「大地さん？」

「あいつはな・・・そんな性格なんだよ・・・」

「え？」

「他人が傷つくが嫌なんだよ・・・だから平気で自分が傷つくほうを選ぶ・・・どっかの誰かみたいにな・・・だから嫌いなんだよ」

そう言っつて大地は霧島園から去った。

「お姉ちゃん・・・何で・・・」

楓のことにヴィヴィオは思い悩んでしまっただった。



第二十七話 傷だらけ泥だらけ（後書き）

最近ヴァンパイアによる怪事件が発生し調査に向かった私達。え？  
ヴィヴィオちゃんも付いてくるの？大地も来るの！？まあいいや！

そして今明かされる！大地は私を嫌いな理由・・・

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 ヴァンパイア対勇者

大地！グレート化で決めるよ！！

## 第二十八話 ヲアンパイア対勇者（前書き）

名前 みなみだいち 南大地

年齢 十四歳

戦闘スタイル ガンナー 南流喧嘩殺法

趣味 写真 お菓子作り パズル

好きなもの 甘い物

嫌いなもの 姉 うるさい奴 自分自身

ランク B

デバイス 無し

階級 1等空尉

性格 ヘそ曲がり

イメージボイス 竹村拓

備考 300年後の力の子孫で楓の弟。楓を憎んでいたが心と心でぶつかり合った末に和解。性格は凄まじいヘそ曲がりであり楓曰く『ツンデレ』だが本質的には楓と同じである。

幼い頃に楓が自分のせいで傷つけられた事に激怒し楓から離れていた。

楓と同じくらい大食いである。素直に人を誉めることが出来ないためわざとぼかしたような発言をする。

## 第二十八話 ヴァンパイア対勇者

ジャンゴの研究室

「ふふふふ・・・遂に完成したわい・・・」

ジャンゴが怪しげなカプセルを見つめながらそう呟くとゾルとシュラが背後から現れた。

「今度は何を作ったんだ？」

「ふん！こいつはヴァンパイアウイルスじゃ」

「ヴァンパイアウイルス？」

あまり興味なさそうなシュラ。

「こいつに感染すればたちまち凶暴化した人間が広がり世界は全滅じゃわい！...」

恐ろしいことを呟くジャンゴ。

海鳴

「ん？」

町を歩いていた男性が蹲ってるOLを見つけた。

「あの・・・大丈夫ですか？」

『ぐるああああああああああああ！！』

「うわああああああああああ！！」

OLに噛み付かれた男性の絶叫だけが響き渡った。

## 第二十八話 ヴァンパイア対勇者

天野平和科学研究所

「いや〜招待してもらっちゃって〜」

「いえいえ〜お構いできなくて〜」

「何でお前が畏まるんだよ」

楓の言葉に答えるスバルにツッコミを入れる大地。

今日は折角の休日ということもあり、楓と大地は天野家に招待されたのである。

昼ご飯ということもありスバルがご馳走した。三人の食べる量が量なだけに大量に作ってあった。

因みにサンドイッチである。

「あくあく」

「がつがつ」

「どろろ？」

人に振舞うことに慣れていないのか感想を聞いてみるスバル。

「・・・お前・・・いい嫁になるぞ」

「へ？」

大地の言った嫁という言葉に素っ頓狂な声を上げるスバルに楓が・

「ごめん・・・大地はこういう言い方しか出来ないの・・・」

「あ・・・あはははは！だよね〜びっくりしちゃった〜」

そう言って飲み物取りに行くスバル。

すると楓がニヤついて聞いてきた。

「大地〜スバルにほの字なんでしょ〜」

「・・・ちげえよ」

「またまた〜照れちゃって〜人間らしくなってきたじゃん〜お姉ちゃん嬉しいよ〜」

そうやって楓が大地を茶化していると・・・

「そんなんじゃないよ。人を好きになるってのはな凄い責任のある事なんだ」

「それは言えるかもねえ・・・私も似たようなもんだし」

「だな・・・」

愛するということは大きな責任のあることだ。

それに耐えられない楓と大地は人を愛するということが出来ないのだ。

そう物思いに老けていると・・・

『ここ数日ヴァンパイアによる被害の拡大を・・・』

テレビでヴァンパイアに感染した人々への被害が報道されていた。

「ぶっそんな世の中だな・・・」

「けどおかしくない？人間がいきなりヴァンパイアになるなんて・・・」

そう思った楓と大地は調査を開始することにしたのだが・・・

「なんでお前がついて来るんだよ・・・」

「良いじゃん良いじゃん」

迅雷の助手席に座っているスバル。

そして

「この辺には居ないね」

「そうだね・・・」

ストームバンディットの後部座席に座っているヴィヴィオ。付き添いを連れながら海鳴の町をパトロールするのだった。

「何でヴィヴィオちゃんついてきちゃったの？」

「だって・・・私・・・お姉ちゃんみたいに強くなりたいたいから・・・その為には一人で生きていけるようならないと・・・」

「ヴィヴィオちゃん・・・一人で生きていくなんて出来ないんだよ」

「え？」

「私だってそうだよ・・・大地やスバル・シズマにお爺ちゃんに支えられて生きてるよ・・・ヴィヴィオちゃんだってパパやママに支えられてるでしょ？」

「……うん」

「……お母さんに逢えるヴィヴィオちゃんが羨ましいよ……」

「え？お姉ちゃん？」

「なんでもない……行こう」

そう言つてストームバンディットを走らせる楓だった。

一方迅雷では……

「ねえ……大地」

「なんだよ……」

「大地はなんで楓のことが嫌いなのか？」

スバルに言われた一言に大地はハンドルを握る手を強めた。大地にとつては一番触れられたくない事だからである。

「大地……言いたくないなら「昔な」え？」

言う覚悟をした大地の言葉を聞くスバル。

「俺……いじめられててな……姉貴の事や爺さんの事で……我慢できなくなつていじめた相手を徹底的にボコボコにしちまつた……それが親父にばれてな……俺が怒られると思つたら違つたんだ……姉貴が自分がやつたつて言い出した……俺は自分がやつ



たつて言っても信じられずに姉貴が傷つく姿を見ちまった……」

(何で俺のことで姉ちゃんが傷つかなきゃならないんだよ)

「幼かった俺が思いついたのは……俺が姉貴を嫌いになって……姉貴から離れればいい……そうすれば姉貴は俺のせいで傷つかなくて済む……」

「……」

大地の言葉を黙って聞くスバル。

「んなくだらねえ理由だよ……」

「どうして……急に教えてくれたの？」

「さあな……!!」

大地が迅雷に急ブレーキをかけた。目の前に人が倒れていたからだ。

「おい!どうした!?!」

「しっかりして!!」

交差点のど真ん中に蹲った男性を抱き起こそうとしたその時だった。

『グルアアアアアアアアアア!』

何と男性が牙をむき大地に噛み付こうとしたのだ。咄嗟に避ける大地。



ビルの屋上から楓達を見下ろすジャンゴ・ゾル・シユラ。

「これは・・・やっぱりあなたの仕業ね!!」

「その通り！新型ヴァンパイアウイルスによって奴らは凶暴化を果たした！！奴らは感染者を増やそうと群がり続ける！ダグオン！！これで貴様も終わりだ!!」

襲い掛かってくるヴァンパイアの攻撃を避ける楓達。

「生物兵器・・・ってやつ？うわ!!」

信号機を引っこ抜いたヴァンパイアが楓に向かって振り下ろした。咄嗟にかわす楓。

「なんて身体能力・・・」

「どうするの！？いくらなんでも人間相手に戦うわけには・・・」

「だったらこうする！トライ！ダグオン!!」

スバルの言葉に手段を考えていた楓はダグコマンドーを起動させると翡翠のダグテクターが装着されフルフェイスのマスクで覆われる。

「ストームカエデ!!」

風を巻き起こし降り立つ楓はストームシューターを構えた。

「ストームシューター・モード6！ショックビーム!!」

ストームシューターのショックビームが放たれヴァンパイア化した人々が気絶した。

「なるほど・・・その手があったか・・・てかそんなもの付けたのか？」

「えっへん」

「ほめてないって」

トリオ・ザ・漫才が繰り広げられる中、ゾル・シユラ・ジャンゴは・・・

「ええい！貴様らのコントなど見たくないワイ！！」

激怒しながら専用ロボットを召還し3人に向かって構えた。

「ヴィヴィオちゃん！下がって！！」

「わかった！！」

ヴィヴィオを非難させると・・・

『疾風合体！！』

ダグストームを中心にガードクーガー、ガードジャガーが脚部パーツになり獣の頭部が外れダグストームの足に装着された。

『キエエエエエエエエエエ！！』

ガードファルコンの咆哮と共に頭部と翼が外れ上半身に変形するとダグストームの上半身に覆いかぶさった。拳が展開され頭部が展開し瞳が淡い緑に光った。

『ストームダグオン!!』

『合身!!』

迅雷のトレーラー部分が人型に変形し大地と合体するとコンテナが巨大な身体に変形した。

『!!』

大地がボディに変形するとコンテナと合体し新たな姿を現す。

『迅雷!スーパーモード!!』

「機甲合体!!」

<POWER LOAD>

スバルがストームクレーンから飛び上がるとクレーンアームが展開した。そのまま上半身が起き上がり下半身の四輪部分がリフトアップしていく。リフトアップと同時にクレーンアームが装着されている腕が展開し胸部が展開した。

「たあ!!」

スバルが胸部に乗り込むとゆっくりと胸部が閉じ同時に竜の顔が胸に現れた。

<CONNECT>

瞳が淡い緑に光る。

『メタルウウウウウウ！ダグオン！！！！！！』

降り立つメタルダグオン。

『小ざかしい！！』

ゾル・シユラ・ジャンゴに向かっていく二人の勇者と一人の戦士。

『ふふ！勇者の小僧が！！』

『生憎俺は勇者じゃねえ！！』

大地の蹴りで吹っ飛ぶシユラ。

『うおおおおおおお！！』

メタルダグオンのメタルトンファーがゾルを痛めつける。

『小娘！！何故胸に龍の顔が！？』

『それはね！かっこいいからだよ！！！！マグマブラスト！！』

『うああああ！！！！』

お決まりのボケを言いながらゾルの一撃をバックステップで避ける  
メタルダグオンはマグブラストを放ちゾルにダメージを与えた。

『はあ！！』

『ぐっ！！』

ジャンゴに殴りかかるストームダグオン。

戦闘ではストームダグオンのほうが上手であり追い詰められるジャンゴ。

『行くぜ！！アースグラビトン！！』

『ぐおおお！！』

大地の砲撃を浴び撤退するシユラ。

『必殺！振動拳！！』

『ぐー！あー！！』

『おりゃおりゃおりゃおりゃ！！！！』

『は！速い！速すぎてパンチが避けられん！！うわあああ！！』

ゾルのロボットを木っ端微塵に粉碎するメタルダグオン。

『レイソニック！ウェーブ！！』

ストームダグオンの拳から衝撃波が放たれジャンゴを拘束する。

『ぬ!!ぐ!!』

『チエスト!!』

『うおおおおおお!!』

ストームダグオンの拳を直撃され爆発するジャンゴ。

その姿を・・・

『く・・・見ておれんわ!!』

要塞から出撃する3つの獣。デスタイガー・デスドラゴンが合体し身体になるとデスイーグルが頭部と胸部に合体した。

『3獣合体!ドライアス!!』

ストームダグオン・メタルダグオン・大地の前に降り立つドライアス。

『貴様がドライアスカ!』

『ほお・・・見ない顔が居るな』

大地を見てそう呟くドライアス。

『こいつが・・・ドライアスカ』



『何？震えてるの？』

『まさか・・・武者震いって奴よ』

ドライアスから出る威圧感に飲まれそうになる大地。

『まとめて地獄に送ってやる！デスキャノン！！』

『うあああああ！！』

ドライアスの一撃をまともに受けてしまうメタルダグオン。

『ホラーハーケン！！』

『うおおおお！！』

デスタイガーとデスドラゴンの首が大地に発射され噛み付かれてしまう

『はああ！！！！』

ストームダグオンが一撃を入れようとすると・・・

『ぬるいわ！！！！』

『うあああああ！！！！』

デスブレードであっさりと吹っ飛ばされてしまった。

『く！サイクロンノヴァ！！！！』

ストームダグオンから竜巻が発射されるがドライアスはデスブレードで受け止めるとそのまま押し返した。

『うわああああ！！！！』

吹き飛ばされるストームダグオン。

『このおお！！！！』

メタルダグオンが一撃を入れようとすると拳を受け止められた。

『どうした？小娘？』

『！！！！』

至近距離からデスキャノンの連打を浴び後ずさってしまふメタルダグオン。

『スバル！！！！』

ストームダグオンと大地が駆け寄ったその時だった。

『デビルフォーン！！！！』

『！！！！うああああああ！！！！』

ドライアスの必殺技をまともに食らってしまった。吹き飛ばされ倒れるストームダグオンとメタルダグオン。

「お姉ちゃん!!」

居てもたつても居られなくなりヴィヴィオがストームダグオンの元に駆けつけると・・・

『聖王・・・』

「!!」

ドライアスがヴィヴィオに狙いを定めた。

そこに・・・

『うおおおおおおお!!!!』

『ぐー!!』

跳躍しドライアスの顔面を蹴りつける大地だが、ドライアスは少しよろけただけで倒れない。

『この野郎!!』

そのまま拳の連打でドライアスを攻めるがドライアスには全く効いた様子が無い。

『ふふふ見上げた根性だな小僧』

『何!?!ぐあああああ!!!!』

そのまま大地を蹴り飛ばすドライアス。

『……その程度の実力ではこの俺を倒すことなど出来んわ!!』

『ぐづうう……』

消耗した今の身体ではこれ以上ドライアスと闘いきることが出来ない。その上ストームダグオンとメタルダグオンは完全に消耗し気を失っている。

『!!!』

何かを賭ける決意をする大地はヴィヴィオに開き直った。

『ヴィヴィオ……Vアーマーに乗れ……』

「え?」

大地の言葉に考えるヴィヴィオ。Vアーマーは大地が絶対に勝つ為の切り札。それに乗り込めということは何かあった。

『お前の力を吸収して俺の力にする……その為にVアーマーとリンクするんだ……姉貴とスバルを助ける為にやれるか?』

「……わかった」

ヴィヴィオも覚悟を決めVアーマーに乗り込みコックピットに座った。するとVアーマーが勝手に動き始めたのだ。

『え?どう言う事?』

『よし……そのまま逃げる……Vアーマーならここを突破できる……』

『まさか……大地さん……そんな事って!!』

大地の覚悟を見抜いたヴィヴィオ。そして大地はVアーマーからピートルバンカーとスタッグブレイカーのみを装着し、最大の切り札であるマグナムバズーカを保険でVアーマーに持たせた。

『良いから！言つとおりにしろ!!Vアーマー！頼むぞ!!』

『ガアア!!』

Vアーマーが吼えるとストームダグオン・メタルダグオンを連れ脱出した。

『大地さん!!』

ヴィヴィオの叫びを無視し大地はドライアスに向かっていった。

『逃がさん!!』

『ドライアス！貴様の相手はこの俺だ!!姉貴たちの下へは行かせん!!』

『小僧が!!』

『うおおおおおおお!!』

デスブレードで斬りつけられ叩きつけられる大地。ドライアスが降り立ったと同時に大地は傷つきながらも立ち上がった。

『く・・・男は前に立って戦うもんだ・・・その後ろの女を守る為にな!』

『小ざかしいたった一人でこの俺に勝てると思っているのか? 諦めたらどうだ?』

『断る!・・・八神組・・・そして楓軍団でも一番諦めが悪いのはこの俺だ!・・・ドライアス!・・・この命に代えても・・・姉貴たちは渡さん!!!』

『何? 貴様・・・あの小娘の為に死ぬ気か? 『そうだ!!!』 な!』

ドライアスの問いに迷うことなく答える大地。

『俺は姉貴に懸けた!! 姉貴なら・・・貴様達のような邪悪を吹き飛ばす風になると!! だからここで死なせるわけにはいかない!! そして・・・惚れた女の幸せを願ってこそその男!!』

『惚れた女?』

『そうだ! スバルは俺のような奴にも優しくしてくれた!! そんな純粋な瞳に俺は惚れた!! 姉貴とスバルを助ける為ならこの命! くれてやる!!!』

『何故・・・貴様は・・・』

『貴様にはわかるまい!! 決して人の為に死なない者が人のために

死のうとする心を！その覚悟を！！」

スタッグブレイカーを変形させビートルバンカーを組み合わせ巨大な弓に姿を変えた。大地の腕に周囲に残されていた楓の風が集束する。

「貴様の身体に刻み込んでやる！！姉貴の風を！！」

「く！！」

真っ向勝負するべくデスブレードを構えるドライアス。

「貴様！名は！？」

「覚えておけ！！俺の名は迅雷！！真空波！！」

巨大な弓から一転に集中させた楓の風を放つ大地。

デスブレードで受け止めるドライアスの足元が圧力に押しされ削れていく。

「ぐううううおおおおおおおお！！」

ドライアスが真空波を退けると懐に入った大地がスタッグブレイカーでドライアスを挟み込んだ。

「姉貴！後は任せたぞ！！」

「おのれえええええ！！」

大地が魔力を暴走させドライアスごと自爆しようとしたその時だった。

『!!--』

砲弾が大地とドライアスを襲い大地を吹っ飛ばした。

『誰だ!!--』

ドライアスが見た先に居たのはロボット形態に変形しマグナムバズーカを構えたVアーマーだった。

そして

『大地・・・一人で格好付けちゃダメだよ・・・』

肩を抑えながら駆けつけたストームダグオンとまだ意識を回復していないメタルダグオン。

『Vアーマー・・・何故戻ってきた』

『お姉ちゃんが隠し要素付けるのが好きなの分かってるよね?』

『何・・・変形機能まで付けていたのか・・・』

『因みに操縦しているのはヴィヴィオちゃんだよ』

『・・・』

Vアーマーを操縦しているヴィヴィオ。



『大地・・・大地の安っぱい命一つ賭けたって・・・私達は喜ばない!!!』

『!!!』

ストームダグオンの言葉に驚愕する大地。

『やろう・・・大地・・・』

目を覚ましたメタルダグオン。

『・・・わかったよ』

もう止めても無駄だと思った大地は覚悟を決めた。

『ドライアス! 貴様を倒して生きて帰る!!!』

『ふん! 小僧・・・いや! 迅雷!!!』

大地たちに構えるドライアス。

ストームダグオンに乗り込むヴィヴィオ。

『『『超疾風合体!!!』』』

凄まじい風と共にストームダグオンとメタルダグオンが並び立つ。

『『『うおおおおおおおおおおおおお!!!!』』』

ストームダグオンとメタルダグオンの身体が上半身と下半身に分かれるとストームダグオンの上半身がメタルダグオンの下半身に連結する。

そのままガードクーガー、ガードジャガーが再び足の形態になりメタルダグオンの足に差し込まれた。

そしてメタルダグオンの上半身が180度回転しながら展開しクレインアームが折りたたまれそのままストームダグオンの上半身に被さった。

胸にガードファルコンの頭部が連結しクレインアームが左肩に降り背中にガードファルコンの翼が合体した。

メタルダグオンの脚部が腕に変形するとストームダグオンの腕に合体し

ドラゴンヘッドが変形するとストームダグオンの顔を覆い新たな頭部となり瞳が緑色に輝いた。

『『『グラントオオオ!!ストオオオム!ダグウウウオン!!』』』  
『』

緑色の闘気を噴出しながらグラントストームダグオンが降り立った。

『脅威の三段合体!真・超神合体!!』

ゴッドアーマーが各パーツに合体しスーパーモードの大地の身体に合体した。

『Vアーマー!!』

『ガアアアアアア!!』

大地の叫びにVアーマーが吼えると巨大な翼と足パーツに変形した。そして大地の身体に合体し……

『うおおおおおおおおおおおおおおお!!!!』

大地の瞳が光り輝き両腕と背中が光り始めた。

『!!』

右腕に巨大なバンカーが装着され

『!!』

左腕に巨大なクローが装着された。

絶対に勝つ為の形態に姿を変えた。

『迅雷!ガイアモード!!』

見る者を圧倒する姿に変わった大地。

『来い!グランドストームダグオン!迅雷!!』

『一気に決めよう!!無限砲!!』

天野平和科学研究所から射出される無限砲。そして左肩のクレーンがキャノンに変形し右肩に無限砲が連結した。

両肩に巨大な大砲を構えるグランドストームダグオン。

『マグナムバズーカ！ファイナルモード！！エネルギーチャージ！』

マグナムバズーカに全エネルギーをチャージする大地。

そしてデスブレードを構えるドライアス。

『くらえ！！デビルフォーン！！』

デスブレードの一閃がグランドストームダグオンと大地に襲い掛かると・・・

『姉貴！やるぞ！！』

『うん！！』

『ダブルストームインパクト！！！！』

二人から放たれる膨大なエネルギーがデビルフォーンとぶつかり合った。

『ぐううう！！』

真っ向勝負をしかけ耐えるドライアス。



ドでかい注射器を構え不気味に笑っております。

「まさか・・・シヤマル先生！そげん太かもん止めてえ！」

「これも人類の為よ！！！」

「ああああああああああああ！！！」

迷うことなくヴァンパイアウイルスを力に打ち込むシヤマル。

ヴァンパイアウイルスでもがき苦しんでいる力。

「ちよつと！シヤマル先生！お爺ちゃんがヴァンパイア化したらどうするんですか！？」

「その時ははやてちゃんが拳で黙らせるんですよ」

「あ！それなら安心です！！！」

だが

「よくねえよ！！！」

何も起こらない力。

「さすが力君！超抗体機能でヴァンパイアウイルスの交代ができちゃった」

実は前にも殺人ウイルス対策にやった手である。

力は体が丈夫であるため病原菌に対する抗体がすぐさま出来、強靱な血清を作ることが出来るのだ。

こうして力から作られた血清を注射されヴァンパイア化した人々は元に戻っていったのであった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夕暮れの天野平和科学研究所の庭で迅雷の上で寝っ転がっている大地。

「よ！弟！！」

缶ジュースを持ってきた楓。大地の好きな林檎ジュースである。

「・・・そういえば大地」

「ん？」

「さっきの事スバルに言わないの？スバルは気絶してて聞いてなかったみたいだし」

「言わない。俺は相応しくないし・・・」

その言葉に楓は・・・

「損な性格だよね」

「お互いにな」

笑いながら乾杯する楓と大地は夕暮れの風を感じるのであった。



## 第二十八話 ヲアンパイア対勇者（後書き）

さあさあ〜グレート化もした事だし〜ここは皆でパーティーといこうかな〜へ？ワルターさんどうしたの？寄付！？

次回！勇者指令ダグオンA's 風の詩 楽しい？！幼稚園

ワルターさん幼稚園の先生になったの？

## 第二十九話 楽しい?!幼稚園

ある日のクラナガン

「では行ってくるぞ・・・爺」

「はい。かしこまりました」

カーネルに見送られワルターがクラナガンの町出かけるのであった。

## 第二十九話 楽しい?!幼稚園

「・・・しっかしクラナガンとは相変わらずちんけな街だな・・・」

ぶつくさ言いながら町を歩いているワルター。後ろにはカーネルの部下達が尾行している。

花屋の前で足を止めるワルターが薔薇を取った。

「・・・この高貴な香り・・・私にふさわしい」

そう言って胸にさしていくワルターを見た店主は・・・

「ちょっと！お客さんお金お金！！」

そういつた瞬間カーネルの部下達に羽交い絞めされてしまい。

「これで足りるだろ！」

「毎度有〜」

目を回しているところに口に千円札の札束を捻じ込まれる花屋さんだった。

そして横丁に入ってみると・・・

「たまには足を伸ばしてみるか」

そう言つて横丁に入つていった。

「若君を見失いましたあああ！！」

ワルターを見失つてしまったことによりパニックになる部下達。

「ん？」

ワルターがドヤ街のような場所を通つたその時だった。

「待ったね〜」

ぼったり楓に出くわしてしまった。こひつじ幼稚園の送迎バスの送

り迎えのアルバイトをしている楓を見たワルターは……

「貴様は！ダグオン！！」

「あ・・ワルター」

楓に気づいたワルターは警戒するが特に暴れているわけでもない為放っておいた。

今日一日のことを楓に報告する園児。

「それでね姉ちゃん幼稚園にあるんだよパワー……なんだっけ？」

「へえ〜パワーなんちゃらがあるんだ〜」

そう言っつてワルターを無視して帰ろうとする楓。

「なに！？パワーストーンだと！！？」

パワーストーンの名前を聞いたワルターがこひつじ幼稚園のバスを追いかけようとした瞬間落とし穴に落ちた。

部下達がワルターを捕獲する為に掘っておいたのだ。

翌日

「……カーネルめ今に見ているよ……」

ワルターが昨日のリベンジの為にこひつじ幼稚園を訪れた。

「待ってるパワーストーン……ん？」

こひつじ幼稚園に入った瞬間目の前に居たのは任侠の世界に生きて  
いるような人だった。

任侠の人に向かってくる園児達。

「また着たのか!？」

「姉ちゃん!！」

「はいはい」

楓が任侠の人の前に出てきた。実は送迎ではなく用心棒で雇われて  
いたりする。

「このアママ!今日という今日は!！」

「払うもん払ってもらうぜ!！」

「む!地球のヤクザ舐めないでくださいよ!！」

ヤクザ同士の戦いになるその時。

バキューン

「あ!兄貴!？」

「弾き!？」

任侠の人に向かって銃を構えるワルター。

「貴様らパワーストーンが狙いか・・・」

銃を構えているだけあってびびりまくる兄貴。

「い!いや!あつしらは金を返してもらいに!！」

「なんだ・・・そんな事か」

懐から小切手を取り出しサラサラと書くと・・・

「そらよ」

任侠の人に小切手を渡すとそこには10億円と書いてあった。

「失礼しましたあああああ!！」

任侠の人が逃げていった。流石に10億円をポーンと出す人間を敵に回してはいけないようだ。

それを見た楓は・・・

「そんなにお金持つてるならウチにも寄付して欲しいなあ・・・まあこのおっちゃんいい人でしょ」

「私がいい人!？」

蕁麻疹でまくるワルターその時。

「あ……」

園児達によつて倒されてしまったワルターであった。

それを見た楓は……

「……放っておこう」

そう言つて帰っていく楓。

「え？ワルターが来てただつて!？」

タクヤに話す楓。

「まあ……根は悪い奴じゃないと思うんだけど」

「なあ〜」

そう言つてワルターの悪口で大いに盛り上がる楓達だった。

数時間後

「これか……」

こひつじ幼稚園で目を覚ましたワルターは何やかんだで子供たちに

懐かれてしまった。おまけに先生には良い人とまで言われてしまい  
蕁麻疹が出まくと幼稚園を散策し始めた。

そして一つの箱を見つけ出した。

「これがパワーストーン！」

「違うよパワーシャボンだよ」

動かし方を考えるワルターが箱を持ち上げるとおっことどしてしまっ  
た。

「なに!？」

箱が衝撃で空くと綺麗なシャボン玉が噴出しオルゴールが流れた。

「言ったる!？パワーシャボンって」

パワーシャボン・・・それはオルゴールとシャボン玉の玩具だっ  
た。

「私の苦勞は一体・・・へ？」

何やらヘリコプターの音が響くところひつじ幼稚園の校庭にヘリコプ  
ターが舞い降りた。

「若君!ご無事で！」

カーネルが迎えに来た瞬間。ワルターの周りを園児達が囲んだ。



「え？」

「お兄ちゃんを守れ！！」

子供はすっかりワルターに懐いてしまいワルターを守ろうとしている。流石のワルターもパニックになっていると・・・

「ワルター！見損なつたぜ！！」

「子供を人質にするなんて最低！！」

タクヤと楓が駆けつけた。

誤解が誤解を生みややこしい事になっているとカーネルがロボットを発進させた。

「幼稚園が危ない！」

「ドラーン！」

『心得た！ゴルゴーン！！』

ドラーンが変形するとゴルゴンを召喚した。

ゴルゴンが咆哮を上げると徐々に人型に変形しドラーンが胸に納まった。

『黄金合体！ゴルドラーン！！』

完成したゴルドラーン。

そして

『疾風合体！ストームダグオン！！』

並び立つゴルドランとストームダグオンはワルター軍団に向かっていった。

流石にゴルドランとストームダグオン相手じゃ劣勢しておりワルターは見えていられなくなった。

「子供たちよ・・・心配ない」

子供たちに笑顔を残し颯爽と去っていくワルター。

「ふっこれでやっと開放された」

今日一日子供たちの相手ばかりしていたワルターは開放感で一杯になるが同時に寂しくもなった。

『ええい！ゴルドラン！今日こそ！！』

『ぐっ！！』

ロボットに乗り込みゴルドランに襲い掛かるワルター。

『スーパー竜牙剣！一刀両断斬り！！』

『甘いぞー！！』

一刀両断斬りを分離してかわすワルター。するとロボットの手足が分離しゴールドランとストームダグオンの身体にまわり付いた。

『うわあああ！！』

『ぐっ！！！』

電流を流され身動きが取れないゴールドランとストームダグオン。

『気持ちは分かるぞゴールドラン・・・トドメだ！！』

子供にまわり付かれていた時を思い出したその時。

『ゴールドラン！分離して！！』

『そうか！！』

ストームダグオンの言葉で分離するドランは竜牙剣を構え・・・

『稲妻斬り！！』

真つ二つになるワルターは脱出ポットで逃げていった。

こひつじ幼稚園を見つめながら・・・

『何だったんだろうな・・・今回・・・』

ワルターの謎の行動に？マークになるストームダグオンだった。

翌日

「やめておくか」

散歩の最中こひつじ幼稚園の道を見つけるワルターだが足を運ぶのをやめておくのであった。

## 第二十九話 楽しい?!幼稚園(後書き)

本日!玄さんが出張のため霧島園は私がお留守番になりました。

が!私一人ではこの数を相手できません!お願い!飛鳥君!助っ人に来て!!バイト代は・・・必殺技でどう!?

次回!勇者指令ダグオンA's 風の詩 飛鳥特訓日記

レイソニックウェーブを打つにはチャーハンを作って!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1237p/>

---

勇者指令ダグオンA's 風の詩

2011年12月23日00時49分発行